# 邦楽現代

日本音楽集団

第六号 九七八年秋 — 七九年初春

特集 日本音楽集団創立十五周年・定期コンサート七五・七六回
第五次海外公演・音楽之友社賞受賞

時の流れの忘れもの。レミー・マタン
REMY MARTIN
1724年創
香りをたてるためでしょうか
掌で暖めながら飲む人もいます
でも真に円熟したコニャックなら
暖めるまでもないのは無論のこと
注いだばかりでもふんわり立ち昇る芳香を
細みのグラスで楽しむ人もいます
ドッドウェル LE-K.K.

# 文取 あやとり

日本音楽集団創立十五周年誌

富樫 康

一九六五年十月、新宿朝日生命ホールでの日本音楽集団第二回定期演奏会（第一回は前年十一月）、のちに「古代舞曲によるパラフレーズ」の第一曲となった「日本楽器のための前奏曲」の初演は、日本の音楽史上における画期的なプレリュードであった。それは十五年を経過した今日の集団の発展の実績から照していうのでなく、当夜その場に居合せた私が、肌で体験した偽りのない実感だった。

過去何百年の間、邦楽は個人の趣味ないしは少人数の楽しみとして行われ、多種類の楽器が、総合した形で、公衆を相手にきかせる目的はなかった。昭和の時期に入ってからあったとしても、それは洋楽のうわべの形式をとりいれたもので、聴者の心情に肉迫するまでにはいたらなかった。だがこの集団の出現は、現在世界の作曲家たちが当面する、今日の音楽の在り方を真剣に探求してやまない前記「前奏曲」の作曲者三木稔のような作曲家が要となって新しい邦楽を作曲し、敏腕な若手奏者たちの潜在的な能力を存分に発揮させたことにある。また音楽的には、陰湿な日本音楽の性格を拡大的に開放し、しかも洋楽からは得られない、邦楽独自の美学を抽出して、世界に通用する新しい日本の音楽を作り出した点にある。この集団は邦楽器の編成としては大きいが、洋楽のオーケストラから比べればはるかに小さい。しかし実際に演奏した場合は、オーケストラに匹敵するほどのダイナミズムを保有していることは驚くべきである。過去十五年の間には集団内外の多くの作曲家も新作を寄せて、それらも蓄積した。いまや集団を支持するファンは国内ばかりでなく、六年前からの度重なる外国公演によって、国外でも急速に増加しつつあることも、もはやおさえがたい事実なのである。

## 目次


文取　富樫康　1
「音楽之友社賞」記事（転載）　2
客席から見た日本音楽集団の十五年　長尾一雄　5
灯から巨火へ――うちから見た日本音楽集団十五年の歩み　長沢勝俊　9
ヨーロッパにおける邦楽　平野健次　13
日本民族のモダン・ダンスをつくるために　藤井公　13
邦楽器――この魔術師たち　佐藤敏直　14
歌楽帖❷　秋の欧米巡礼　三木稔　16
一九七八年度前期現代邦楽作品と演奏――心に残ったものから　19
石田一志・木村重雄・小宮多美江・土田貞夫・富樫康・長尾一雄
地方邦楽グループの課題　萱森真雄　23
日本音楽集団一九七八年度後期定期コンサート・シリーズ・プログラム　26
49総合定期演奏会　50総合定期演奏会　51定期演奏会―日本の四季・西洋の四季
新しい邦楽を担う人たち――坂田誠山・砂崎知子　32
日本音楽集団第五次海外公演を終えて　37
日本音楽集団第五次海外公演参加団員の声　52
立奏台　58
日本音楽集団今後の主な予定　60

音楽之友社のご好意により、音楽之友社誌より転載

# 第二回 音楽之友社賞

〈受賞者〉

## 日本音楽集団

〈受賞理由〉

日本の伝統楽器をもとにした幅広い、新しい創造（企画、創作、演奏、教育）活動が顕著であった

〈賞〉

賞状および賞金一〇〇万円

〈副賞〉KLMオランダ航空・航空券（五〇万円相当）

〈協賛賞〉

## レミー・マタン音楽賞（賞状および賞金一〇〇万円）

株式会社 音楽之友社

「音楽之友社賞」は、㈱音楽之友社が昭和51年に創立35周年を迎えたのを記念して設けられ、アマチュア、プロを問わず、音楽界において、演奏、創作、音楽文化活動などの各分野で顕著な実績を残した団体を表彰するものである。この賞の設定にあたり、その音楽活動がいかに音楽文化の普及に益するかという点を重視し、この観点から、運営面で困難の多い、団体による音楽活動を対象としている点に特徴がある。

協賛の「レミー・マタン音楽賞」は、フランスの高級コニャックの製造元レミー・マタン社が、かねてより日本のクラシック音楽関係者のうち、優れた業績を示した人を毎年表彰したい意向をもっていたところから、「音楽之友社賞」の趣旨に賛同し、同賞受賞者に重ねて賞を贈ることになっている。

「音楽之友社賞」の、第二回受賞者が決定いたしました。

「日本音楽集団」は、昭和三十九年発足以来、日本の伝統楽器による新しい音楽の創造をめざして、堅実な努力を重ねた、その実績が高く評価されたもので、今回の受賞が、ともすると洋楽偏重の日本音楽界への刺戟となれば幸いです。

今年度の選考委員は、石丸寛（指揮者）、大木正興（音楽評論家）、園部三郎（同）、中田喜直（作曲家）、中村洪介（音楽評論家）、丹羽正明（同）、野村光一（同）、横溝亮一（同）の八氏です。選考にあたって各委員が候補としてノミネートした団体は、演奏団体（交響楽団、室内楽団、合唱団、ブラス）、コンサート・プロデューサー、鑑賞団体、図書館など三〇団体にのぼりました。これは本賞が、演奏、創作、文化活動など、広く音楽活動を対象にしていることによります。

選考の最終段階に残った二団体――日本音楽集団（演奏・創作）と東京オペラ・プロデュース（演奏会企画）は、それぞれの分野において確固とした実績を残しており、いずれとも決しがたいところでしたが、長時間の討議の末、日本音楽集団に決定いたしました。選考の任にあたられた委員の方々の労に深く感謝するとともに、本賞につきまして、楽壇関係各位の、今後のご指導、ご鞭達をお願いする次第です。

また、昨年に引き続き、レミー・マタン社に協賛いただきましたことを厚く感謝いたします。

株式会社　音楽之友社

## 選考経過

第二回音楽之友社賞選考会は、昭和五十三年十月二十一日(土)午前十一時から、ホテル・グランドパレスで開かれた。

まず、昭和五十二年九月から五十三年八月までの間に行なわれた、団体の音楽活動を対象として、昨年度の最終審査にのぼった団体(四十団体)を討議した結果、次の六団体を候補団体として審査することに決定した。

厳本真理弦楽四重奏団
東京オペラ・プロデュース
名古屋グリーン・エコー
日本音楽集団
日本女声合唱団
山形コンツェルトハウス(五十音順)

以上の六団体について慎重な討議を続けた結果、日本音楽集団と東京オペラ・プロデュースに対象がしぼられた。この二つの団体のどちらを選ぶかについて、重ねて討議を続けた結果、長年の活躍に加え、今年度も、内・外での活動が顕著であったことにより、日本音楽集団が第二回音楽之友社賞に決定した。

## 審査員選後評(50音順)

### 創造の魅力　石丸　寛

この集団がいまごろ受賞するというのは、どう考えても遅すぎるのです。日本の伝統楽器と現代との接点というものに結論のようなものは有り得ないでしょうが、この集団がこの十年間に見せた活動には、たしかにメティエと呼べるほどのものがあり、それは試行でも模索でもない、明らかな創造の魅力を私たちに与えてくれていたのです。活動の成果などということばには何の意味もないでしょうが、集団存在のリアリティは今や万人の共感するところではないかと思います。

集団ということばは、実に曖昧なものです。それはしばしばかな「個」の集りでなければならないはずです。その意味で、私は、意欲的な個人の、決定的な魅力をいつも待ち望んでいます。あまり手を拡げないで、そして、むしろ強い独善を期待しています。

### 新しい可能性の発掘・実証　大木正興

今回の「日本音楽集団」の受賞は、ひとえにそのたくましい創造的な姿勢が高く評価されたことによります。この団体の根気のよい、情熱にみたされた過去の仕事のなかで、日本の楽器による音楽的表現の新しい可能性がどれほどたくさん発掘、実証されたか、そしてまたその結果がどれほど多くの音楽家に新しい刺戟と確信とを与えることになったか、計りしれないものがあると思います。その意味ではあやうく衰退消滅のところにきていた日本的音楽の発想と表現にもういちど青春を呼びもどした起死回生の大役を、この集団は果してくれた、といっても過言ではありますまい。

それにもかかわらず、この団体の名も仕事の内容もともにまだ国内で充分認識されているとは決していえないようです。もしこの団体の名をみて音をかしげるような方がありましたら、ぜひいちどその演奏に接してみて下さい。選考の真意はそこでわかっていただけるはずです。

### 大いなる敬意を　園部三郎

日本音楽集団が音楽之友社賞を受賞するにあたって、この集団といわば首位を争うグループが二、三あったが、この集団が創立以来十数年にわたって伝統楽器による新しい日本の音楽を創造しようとしてきた熱心な努力に、審査員諸氏の過半数が大きな敬意を払った結果である。

もちろん伝統は、現代と未来のわれわれの芸術に価値を与えるものこそ、高い意味があるので、このような点については、この集団の活動の成果もまた未来に属するだろうが、ともかくおめでとうといっておきたい。

### 二つに与えたかったが　中田喜直

昨年の例もあり、私は結局複数になるのではないか、と思っていたが、主催社としては一つにして欲しいという強い希望があった。最後に残った日本音楽集団、東京オペラ・プロデュースの中から一つ、ということだが、どれも立派な理由があってなかなかきまらず、長い時間の話合いとなった。私はこの二団体を一つにしぼることが無理であると思い、両団体に賞を、と主張したが、これは少数意見でなく、単独の意見にとどまり、いれられなかった。そしてまた長い時間討論した結果、『日本音楽集団』に決定した。私個人の考えとしては、意見が二つに分れて、どうしてもきまりにくい時は、複数でもいいのではないか、と賞に関してはいつも思っている。芥川賞はじめ、そういう例は非常に多い。特にこの賞は、団体対称とはいえ、金額が多いので、二つに分けても値うちが下がる、ということは全くないと思う。

しあわせとか、不幸は、一つの所にあまり重ならない方がいい、というのが私の持論だから。

### 論議を尽した決定　中村洪介

第二回音楽之友社賞の受賞団体は日本音楽集団に決定したが、当然ながら決定に到るまでには、充分詳細な論議が尽された。無論、日本音楽集団の十数年間に及ぶ企画、創作、演奏その他の面における功績は全審

▲賞状、賞金を手に左より三木、長沢、田村
◀浅香社長より賞状を受ける長沢
（この写真は転載ではありません）

審員重々承知していたものの、最初にノミネートされた団体はアマチュアからプロ中のプロまで、日本各地の演奏グループ、プロダクション、鑑賞組織、音楽祭、音楽図書館等々、殆んどあらゆる種類をカヴァーし、それらのいずれにも受賞相当の理由が付けられていたから、候補が次第に絞られて行く経過は極めて曲折に富んでいた。

日本音楽集団の受賞は、まず大方の異存ない所だろう。私個人としても、かねてその活動ぶりに敬意を払い、成果を認めるに吝（やぶさか）でなかった。この度の受賞を機に、さらに一層の飛躍を望みたい。

## 先駆的役割への評価

丹羽正明

間もなく創立十五周年を迎える日本音楽集団が、これまで成し遂げて来た業績は、まことにめざましいものでした。日本の伝統楽器を表現素材の中核に据えて新しい創造の道を切り拓くという"集団"の仕事は、内側からの強い使命観に支えられた創造意欲のほとばしりであるのは勿論のことですが、それを着実に発展させるについては、ある意味で、外側からの無理解と闘うこともまた必要だったと思います。今でこそ、この種の作品に眼を向けない作曲家の方が稀であるほどになりましたが、一昔前を思うと、日本音楽集団の先駆的役割りの大きさに、今更のように感銘を覚える次第です。室内楽の分野では、「邦楽4人の会」という、これまたすぐれた仕事を内外に繰り広げている演奏グループの先達がありますが、いわばオーケストラに相当する大編成の音楽から、室内楽、ソロ活動を含めて、幅広い創造の可能性を追求して来た日本音楽集団が、これまで、賞というものにあまり関係がなかったのは、むしろ不思議なくらいでした。このたび第二回音楽之友社賞を贈られるのを機に、今後いっそうの発展を期待致します。

## 特筆すべき努力

野村光一

この団体は単なる演奏活動だけでも優れているが、そればかりでなく、作品を公募して、これを自からの手で発表し、われわれの音楽文化振興に尽くそうとしているところが、演奏団体として殊に特筆に値するところである。しかも、そのうえ、その公募作品は日本の伝統に即したものでありながら、それを現代に生かそうとするのだから、その点でもなおさら意義があるのだ。

このような独自の目的と意欲を発揮している団体は、彼らと同属の間では現在おそらく見出し難いのではなかろうか。それだけ同団の価値はいっそう高まるのである。今回の第二回音楽之友社賞に推挙されたこともまた意味深いといってよいだろう。

## 実りの大きい仕事

横溝亮一

今年も四十団体近い候補があり、六時間に及ぶ慎重な審査が行なわれた。いずれの団体もそれぞれに貴重な活動を続け、恵まれぬ環境の中で音楽文化に貢献しているのだから、各審査員の発言にも愛情がこもり、落しがたい気持が動いていたと思う。

じゅうぶんの論議の末、日本音楽集団に決定したのは、まことに妥当な選であった。クラシック音楽関係者は、とかく眼がヨーロッパ音楽に向きがちであるが、それらも元をただせば、各民族の叡智と感性の結晶として生まれ、個性を誇っている。我が国においても、独自の伝承の中から未来につながる音楽を創造していくことは基本であらねばなるまい。そうした意味において、日本音楽集団は昭和二十九年の結成以来、邦楽器による演奏、創作を中心として、充実した活動を続けている。この一年間をみても、定期公演、地方公演等を通して実りの大きい仕事を重ねた。我々自身の足元を見直すためにも、日本音楽集団の地道な活動は評価されるべきであり、受賞を心から祝したい。

# 客席から見た日本音楽集団の十五年

長尾一雄

結成当時の日本音楽集団を聞いて、日本の音楽というものに或る種の開眼の思いを持ったのは、私だけではないであろう。ことに私は、「邦楽の友」という雑誌に批評を書きはじめてからまだ浅く、いわゆる現代邦楽と言われるものに多くの知識を持ち合わせていなかった。藤井凡大の「日本音楽合奏団」（のちに「日本合奏団」）と、名前の上でどちらがどちらだかわからなくなって、執筆後に、「邦楽の友」に訂正を申し込んだことなどもあったような気がする。たしかに、二つの合奏団は同じころの発足であったし、私は、宮城系などの他の合奏団と併せて、「邦楽器によるバロックの合奏団」という認識を持ったりしたものである。

しかし、私の最初の印象から言っても、「日本音楽集団」は他の合奏団とすこし内容がちがっていた。たとえば「日本合奏団」は、藤井凡大のイメージする壮大な音楽殿堂を、多数の邦楽器の合奏によって劇場空間に実現する、という印象が強かったし、他の合奏団も、たとえばヴィヴァルディの合奏曲などをある程度意識的に追っているという感じがあった。そこでは邦楽器の合奏によるできるだけきれいな音づくりというものが、多かれすくなかれ志向されているようであった。それに対して「日本音楽集団」は、日本音楽というものに対するねばり強い批評の態度を、作曲・演奏の両面に対して持ち、今も持ち続けていると思われる。

## 新しい主体性をもった実験

一九六四年一一月の、第一回演奏会のことを私は、当時「邦楽の友」の編集を担当していた田尻喬から知らされた。私の今もつとめている学校の会議が終って第一生命ホールにかけつけた私は、そこで三木稔の「くるだんど」「弦と日本楽器のための協奏曲」、長沢勝俊の「子供のための組曲」などを聞いた。「邦楽の友」の月評で、私は「弦と日本楽器のための協奏曲」を支持し、「くるだんど」には不満を表明した。

「弦と日本楽器のための協奏曲」は、三木稔がのちに自己の作品リストから除いた曲である。三木はこの曲を捨てて、その洋楽弦楽器群と邦楽器群との合奏というアイディアを継承した「序の曲」を八年後に書いている。それはともあれ、「弦と日本楽器のための協奏曲」は私に、洋楽作曲法の洗礼を受けた作曲家が、日本音楽の不確定性を見る眼というものを始めて教えたのだった。それまで私が聞いたいくつかの「洋楽系作曲家による邦楽器作品」のなかにも、もちろんすぐれた作品はあり、そこにも邦楽器の特性とか独得の長所とかの充分に生かされた例もあった。しかし三木のこの作品は、作曲者の持つしたたかな理知の鏡に、日本音楽の特に擦弦楽器の、たとえば余韻を指づかいなどで微妙に変化し得る特性などを写し出して検討し、それを作曲法の許す確実な場所へ定着するという作業が行なわれた結果の作品であって、当時の私には極めて新しい主体性を持った実験作のように感じられた。当然それはあまりに作りすぎた作品となって、のちに作曲者自身によって捨て去られる運命をたどるのはもっともであるけれども、この曲によって三木は、決して日本的素材の中にのめり込みすぎることのないひとつの態度をわれわれに示したのであると私は今も思っている。「弦楽器のユリやコキ」ということが当夜のパンフレットに書かれていたと思うが、そのような五線譜に定着し得ない日本音楽の要素を、或る批判をこめた愛着をもって、理知の光のもとに展示してみせたのが、この曲を含めた当夜の演奏会の成り立ちであった。

一方、「くるだんど」は、周知の通り奄美の人々が黒い雨雲の襲来するのを見て、「黒だんど」と呼ぶうたを原作としている。最近国際交流基金が制作した公演「アジアのうた」のステージで、蛇皮の三味線を弾きながら奄美の人々のうたった「くるだんど」は、やさしい丸みのある旋律の愛すべき歌曲だったが、そのメロディの、くるっとまるまって行くような進行のしかたには、猫族の野獣が危機を感じて丸めた背のすじのようなしなやかな抵抗感があって「日本音楽集団」自身が発行したパンフレットのなかにある三木の「くるだんど」の解説にあるように、「どれい達は黒い雨雲の出現を見て」「雨中でも止むことのない作業の苦痛を予見した切実な声」としてこのうたをうたったこともよく理解できた。三木は、この曲の背の慓悍な丸さをそのままコーラスに拡大して、邦楽器の合奏と共に「くるだんど」という曲を作り上げたのである。奄美のうたと並べてこの曲を置いてみると、三木のダイナミックな構成力の強みを充分感じることができるが、第一回演奏会当夜（この曲の二度目のステージのはずである）の私は、この曲に、日本の生のままの感情がやや未消化のままとり入れられている、という感じを持ったのだった。現在では私の考えは別なものになっているが、指揮者のいる声楽・器楽合奏団の演奏という、いわば整然とした要素の発揮されるなかで、日本の民俗的な旋律要素がやや異質な感じを私に与えたのであろう。のちに「日本音楽集

団による三木稔の音楽」というレコードアルバムのできた時、私の友人で、西ドイツで活躍している日本人のオペラ歌手に「古代舞曲によるパラフレーズ」の一節を聞かせたところ、私がこのとき「くるだんど」に感じたのとたいそう似た感想をのべたことがあった。日本の音階や旋律と、合奏によるオーケストラ効果との間にはもしかすると感覚面でかなり異質な開きがあるのかもしれないし、だとすればそこに生まれる一種のちぐはぐさに目をつぶることなく、生な感情は生な感情のままで提出して行くことこそが、かえって新しい芸術民俗派を作る道になるということを、今では私も信ずるのだが、「くるだんど」をはじめて聞いた印象では、合奏性が民俗性を弱め、また民俗性が合奏性を弱めるということによって、一種の甘さが生まれてしまっていると感じたのだった。

## きれいな音、きれいでない音

この民俗的な甘さの認識は、次のような点から来ると思う。すなわち、オーケストラ的合奏性はわれわれが西欧の知的整理術のひとつとして受け容れつつあるものであり、それに対して民俗的な要素は、西欧的な整理を拒む要素を残したまま われわれの血のなかに在る。オーケストラ性が音楽家の世界に向かって押し寄せて来るとき、そのオーケストラ性をむかえ打つような民俗的要因が作曲家なり音楽家の側にあれば、オーケストラ性との間に折り合いをつけて第三の立場を生むか、あるいは二つの要素を水と油のように対置したままで作品を提出するか、二つに一つの対応が要求されよう。日本の多くのすぐれた作曲家は、これまでのところ主として前者の方法を用いており、ただその協調の仕かたが安易な場合は駄作を生むであろうが、たとえば小山清茂の「木挽歌」のような、すぐれた緊張を保った傑作がこれまでも多数作られてきた。日本音楽集団が舞する二人のすぐれた作曲家のもう一方の一人である長沢勝俊の作品は「子どものための組曲」「人形風土記」にしてもその後の作品にしても、そうした二要素の緊張の上の調和ということが心がけられていて、そこでは理屈なしに「整えられた日本的感覚」を楽しむことができる。しかし三木の場合は、日本的な民俗要因をオーケストラ性のなかに消し去ってしまうことをいさぎよしとしない精神があって、その後の作品でも、たとえば比較的近作の「巨火」の場合に至るまで、民俗的要因はオーケストラ要因の縫い目をたどって熔岩のように噴き上げる。三木自身の作品で言えば、オーケストラ作品でない「佐保の曲・竜田の曲」のように、それが或る種の民俗的宗教感の深まりに達して静まって行く場合もあるが、しばしば作曲者の整理の指を漏れて、或る点では三木の望まないほどにまで強く突き上げて来る場合があるのである。「くるだんど」では、それが三木の整理的手法を超えて、解説されない生のものが顔を出していたのではなかろうか。それを一概に未処理の甘さとしてしりぞけるのは、西欧風の整理癖を上位と見る態度から生まれる文化的誤解にすぎないが、三木自身にも、そうした生さを拒まない正直さと、一方手法的に熟達し切らないものがあったのであろう。「パラフレーズ」までは、少なくともそうであった、と私は思う。

日本音楽集団の最初の外国演奏旅行の前であったろう、すでに集団結成から十年近くたっていたように思うが、霞ケ関ビルの一室でパーティがあって、突然スピーチを求められた時、私はとりあえず次のようなことを言った。――これまで現代音楽と称せられるものをいくつも聞いて来た。そのなかには無論すぐれた作品がたくさんあったが、たとえば現代の不条理とかいらだちとかいうことを含めて、われわれの民族自身の問題を表現したと思われる曲を聞くとき、「何だ、洋楽器じゃないか、きれいな音じゃないか」という不満を感じることがしばしばある。それは楽器の音がわれわれの民俗的体験を通って来ていないからで、われわれ固有の問題を表現しようとする時にわれわれは必ずわれわれの歴史の中に数百年の歴史を保って来た楽器を必要とする。その意味で、日本人が日本の楽器によって作曲した曲を日本人のグループが演奏する「日本音楽集団」の演奏旅行は、ヨーロッパ人に日本人の真の思想的基盤を知らしめるのに絶好の機会である。どうかヨーロッパ人の前で、西欧的な意味では「決してきれいな音ではない」日本の音を、披露して来てもらいたい――。」

ここで私が「きれいでない音」という考えを持ち出したのは、多分、かつて俳優座研究所主催の日本語講座で聞いた平井澄子のレクチュアが頭にあったものであろう。平井は主に日本の歌の発声について述べたのだが、そこで彼女は、ベル・カント唱法と日本的発音とのとけ合わないことを力説し、倍音効果などを含む日本の濁った発声を再認識することを求めた。俳優座劇場の客席には、澄んだ発声こそ世界共通といったような強烈な文化的誤解のしみ込んだ、何とも言えぬほど頭のかたい新劇研究生のグループなどがいて、平井の論旨と平行線上にある質問で講師を悩ませたりしたが、「くるだんど」に関して三木の言っている、「伝統楽器を荒々しく捉えた」（「伝統的なものへの回帰の道」・音楽芸術七〇・一）という主張は、かつての平井の講義内容とひとつになって、私のなかで発酵していた。そして、一九六三年の「くるだんど」よりはるかのち、七〇年安保の熱い季節がすでに頂点に近づいていた六八年に書かれた「はばたきの歌」は、そうした「荒々しさ」の激発として私をとらえ、

筑摩書房の「邦楽大系」別巻「現代邦楽」のための座談会（岸辺茂雄司会、中能島欣一、三木稔、長尾一雄）で、私は「はばたきの歌」ばかりを格別に推したので三木に変な顔をされた。今「はばたきの歌」をレコードで聞いてみると、そこにあるのは私のいう「きれいでない音」ばかりでなく、「きれいな音」「きれいでない音」を抱擁した一種の澄んだ音感が認められるのだが、秋浜悟史の作詞を含めて、日本の或る前衛が燃え上がったひとつの記念として記しておきたい曲であり演奏であった。

霞ケ関ビルでのパーティでもうひとつ思い出されるのは、NHKの柳沢ディレクターが立って、当時毎週日曜の音楽番組「現代日本の音楽」がまもなく終りになることを告げたことである。この番組は、現在FMの「現代の音楽」の毎月第四、五週分の放送として生き残っているが、毎週放送の番組としてはこのころ長広比登志ディレクターの手に移ってしばらくたったところで、日本音楽集団もたびたびこの番組ですぐれた演奏や作品の初演を行なっていた。或る意味ではいわゆる現代邦楽ブームの消長と時期を同じくして生まれかつ終ったこの番組を放れて、「現代邦楽」がひとり歩きをするべき時代が来たときに当たっていた。ちょうどその折の日本音楽集団の外遊であり、それは邦楽4人の会の外遊とも相前後して、この後海外での「現代邦楽」の評価を高める道筋を、歴史は歩むことになる。

## 洗練と再びの「荒々しさ」

ところで、海外での評価を得た前衛演劇のグループなどが、当の海外でのレパートリーで日本帰国公演を行なう時など、ふと、そこでしゃべられているのは「日本語」ではなく「世界語」なのではないかという印象を受けて何か味気ない気持ちになることがある。寺山修司の「天井桟敷」には一時そういう印象がかなり強かった時期があった。舞台のスケールは大きくなり、或る種の醍醐味のようなものさえ感じられるが、そこで演じられる細部や、あるいは大筋を主導して流れるものが、どことなく日本の風土を離れるのである。日本音楽集団にもその現象は起こって、それは野坂恵子の弾く二十絃の響きの魅惑などとも呼応しつつ、「日本音楽集団」の音は一方で西欧のオーケストラに比肩すべき内面性を得ると同時に、日本の「きれいでない音」から脱皮して行った。いわばこのグループの活動第二期とでも言うべき在りかたがこのの ち展開されることになるわけで、そのひとつのあらわれが、「日本音楽集団室内楽演奏会」というシリーズのなかで日本初演された、本来はアメリカ演奏旅行のために書かれた曲「わ」である。半円型に並んだ数人の演奏者による合奏とカデンツァののち、一同が小さめの声で「わ」と言って終るこの曲は、その「わ」が、「輪」でもあり「和」でもあり、びっくりの「ワァ」でもあるという説明の通り、一人一人すぐれた独奏者であるところの演奏者グループが、「わ」のひとことで、観客の笑いと共になごやかな小爆発を経験するという作品であった。「わ」による笑いは、多分日本でよりもアメリカでの方が大きかったことと思われるが、異国から来た合奏団のこの小さな挑発をアメリカの観客たちは喜んで受けとめたにちがいない。「アンサンブル・ニッポニア」という国際名をも持つに至った「日本音楽集団」は、「もはや邦楽ではない」と思われるほどに洗練され、一時期野坂恵子と横山勝也を二頂点に群雄割拠して、「アンサンブル」より「ゾリステン」だと私に思わせていたグループも、指揮者田村拓男のもとに安定した音色の魅力を示す文字通りの「アンサンブル」として成熟した。「クリスタル・サウンド」というキャッチ・フレーズがささやかれるようになったのは近年のことだが、私個人としては、「きれいでない音」「荒々しくとらえ」られた伝統というところから「クリスタル・サウンド」まで来てしまった「日本音楽集団」の歩みに、若干の「当初と違ってしまった」感を抱くのを許していただきたい。

最近の「日本音楽集団」は、発足期のメンバーの一部が去り、その後の新加入者を加えて、若々しい才能の溢れているのが感じられる。横山勝也は去ったが、宮田耕八朗、杉浦弘和、望月太八、野坂恵子、坂井とし子、田村拓男といったヴェテランたちは健在で、どのステージでもすぐれた演奏を聞かせてくれる。パートとしては尺八と打楽器が非常に充実していると思う。定期演奏会の他に室内楽演奏会や、この稿で触れることができなかったが、まことにユニークな古典邦楽の演奏会など、どれも充実した演奏会として、それぞれの歩みにゆるぎはない。講座をも含めて、多面的であると同時に一本なのである。そして、今おそらく、「日本音楽集団」は第三期の活動に入ろうとして居り、それは再び活気に満ちた「荒々しい」ものではないかという期待が私にはある。昨年夏に打楽器のパートの人々が独立したグループとして結成した「だだ」の演奏会、またヨーロッパ演奏旅行から帰ったあとの、宮田耕八朗の「さわらび会」での客演演奏、さらには野坂恵子が東京国立文化財研究所の講座に出席しての演奏など、そこには「日本音楽集団」の当初の精神が、むしろ今こそいきいきと息づきはじめているのが感じられ、古いファンの一人としては胸を湧き立たせられるようなものがあったのである。創立一六年目以後の活躍こそ、期して待たれる。

☆音楽之友社のPR誌「音楽の窓」購読ご希望の方は，300円切手（１年分〒共）同封の上，お申し込み下さい。

# アジア諸民族の民謡

**関鼎**　A5判・400頁・4000円

文献や資料の非常に少ないアジア各国の民謡を、国別に、旋律を中心に、民族、種族、言語、歌詞の訳、大意、民謡の背景をなす民族など、できるかぎり紹介する。アジアの民族音楽の正しい理解と研究のために役立つよう編集されている。

東洋音楽選書7

## 三味線とその音楽

■東洋音楽学会編　A5判・452頁・3800円

田辺尚雄、林謙三、町田佳聲、吉川英史、等東洋音楽学会員が、既に発表した三味線および三味線音楽に関する論文の中で、手に入れ難いものを選んで集めた。研究書としてだけでなく啓蒙書としても価値ある一冊。

## 音階の発生よりみた音楽起源論

■黒沢隆朝　A5判・352頁・3800円

東南アジア音楽研究の権威である著者が、台湾・高砂族の弓琴演奏の研究から、未だ世界学会に知られていなかった音階発生の起源につき、独特の発表をした。この世界学会から高く評価されている「黒沢学説」を紹介する。

東京都新宿区神楽坂6-30　音楽之友社　TEL：(03)268-6151　〒162

# 灯から巨火へ

## うちから見た日本音楽集団十五年の歩み

長沢勝俊

一九六四年十月、伊勢原の大山荘に合宿した集団の若き面々は、しし鍋をつつきながら一月後にせまった旗上げ公演に思いを馳せつつ大いに飲み食べ語りあっていた。丁度その日は東京オリンピックの閉会式。テレビでは祭典の終りをつげるファンファーレが鳴り響きスタジアムの灯が次々と消えていく美しい光景を画き出していた。

一方私達の胸の中では集団の灯が小さいながらも明るく燃え始めていた。それから十五年――集団のこの灯は今や大きな巨火（ほて）となって燃えさかっている。今、私は第一回演奏会以降のプログラム、チラシ、ポスター等の様々な資料を読みかえしながら、よくぞここまでという感慨で一杯である。十五年にわたる集団の歩みをこの小文でまとめることはとても出来ない。いくつかのイベントを中心として随想的に書いてみよう。

### 誕生と生い立ち

さて大山での合宿後、同年十一月十七日、第一生命ホールで日本音楽集団第一回演奏会が開かれた。曲目は「千鳥の曲」、清瀬保二の「尺八三重奏曲」、元橋康男の「京琴」、三木稔の「弦と日本楽器のための協奏曲」「くるだんど」、それに私の「子供のための組曲」であった。私達にとっては一生忘れることの出来ない演奏会であったが、情熱が空回りしたとでもいおうか満足な出来ではなかった。エネルギーの持続とスタミナの配分のむずかしさを痛切に感じた会であった。

明くる六五年十月に第二回定期、六六年からは年二回の定期演奏会を行なっている。六七年までの集団は内に激しい情熱を秘めつつしっかりと地に足をつけて力を蓄えていった時代とでもいえよう。現在創立以来のメンバーは尺八の宮田、三味線の杉浦、琵琶の山田、十七絃の宮本、指揮の田村、それに作曲の三木と私だが、この間に箏の白根、野坂、坂井、笛の望月の諸氏が加わっている。アンサンブルの陣容も整いその力量も大きくのび、また作曲面でも三木稔の傑作中の傑作といわれる「古代舞曲によるパラフレーズ」や「三群（のち四群）のための形象」が生れ、私もまた「組曲・人形風土記」「三味線協奏曲」を書いた。ソプラノの増田睦実さん、指揮の秋山和慶さん、コーラスの東京荒川少年少女合唱隊の皆さんとの出会いもこの頃のことだ。当時団員の誇りは高く理想は大きく掲げた集団だったが、物質面ではお金は無し、事務所は無し、稽古場は無しという無い無い尽しの状態であった。

一九六七年十一月、第六回定期演奏会に対し芸術祭奨励賞を受賞。これは私達の活動がたしかに手応えのある仕事だという実感と団員間の連帯をたしかめるためにも貴重なものとなった。この頃から集団の活動も急速にはずみがついてきた。NHK・FM放送の「現代の日本音楽」への出演回数も多くなり、電波を通じての集団のファンが全国的な広がりを持ち始める糸口ともなっていった。特に反応の早い学生の間では集団に対する関心が強く私達のレパートリーに対する挑戦が盛んに行なわれ出した。古道具屋で琵琶をさがして来て独学でさらったという話、びんざさらを工夫して作った話等々、そのバイタリティーを示す話題が私達の耳に伝わって来たのもこの頃からだ。

### 大きく広がる集団の輪

六九年より文化庁の創作助成を受けるようになる。同年六月の第九回定期で堀悦子さんに作品を委嘱、それ以降多くの作曲家に委嘱し集団のレパートリーを豊富にして頂いている。この年、三木稔と野坂恵子が協同で開発した二十絃箏が第十回定期の「序の曲」ではじめて集団の舞台にのった。また、この年の十二月、集団は初めての国内演奏旅行に出かけた。十三日京都、十四日大阪とささやかなものであったが、旅の新鮮さと初対面の聴衆を前にして楽しく充実した二日間であった。

これ以後国内各地での演奏はあいつぎ七三年以降は西日本、北海道・東北、瀬戸内、九州、中部・北陸・東北といったブロック別の演奏会を行なっている。現在の陣容をもってすればいくつかの班が国内のどこかで公演していられるはずなのだが、現実はなかなかきびしい。一つの演奏会を企画制作するまでには大変なエネルギーが必要とされる。団員演奏家のプロデュースといういわば手作りの味を生かしながらもっと組織的なオルグ活動の必要が語られている。

一九七〇年十二月、コロムビア・レコードによる「日本音楽集団による三木稔の音楽」が芸術祭大賞を受賞した。彼の卓越した作曲と指導性が演奏家集団のエネルギーと合体し高く昇華結実したもの

であり、集団の地位を決定づける快挙であった。

七一年八月、北軽井沢では全国から集まった約五十人の邦楽器愛好の人々が懸命にアンサンブルの練習にとりくんでいた。集団主催による第一回夏期合奏研究会である。開催間際になって借りた宿舎では音が出せないことがわかり急遽稽古場は近くの長野原小学校へと変更になった。受講者は団員の乗ってきた車に分乗して宿舎と稽古場を往復する。軽井沢としては異例の涼しさを通りこした寒さと雨。雄大な浅間山はついにその姿をあらわさなかったが受講者と団員とは夜おそくまで語り明かす熱っぽい集会となった。最終日には小学校の講堂で仕上の演奏会。小学校の児童も聴きに来てくれた。曲目は三木稔の「前奏曲」と私の「子供のための組曲」。冷えびえとする講堂で頬を紅潮させながら演奏する受講者の姿を見るとき、まさに生きている音楽の別の一面に接する思いがして強く胸をうたれた。それから毎年指揮の田村拓男がチーフとなりこの会は益々盛んに行なわれている。この活動のなかから友の会合奏団も生れた。

## 新しい仲間達

集団の灯は益々大きく燃えその輪は着実に広がりつつあった。尺八の坂田、琵琶の半田、打楽器の尾崎、高橋、堅田、藤舎、少しおくれて箏の砂崎という名うての腕達者を迎え入れたのもこの時期であり、より多彩なプログラムも組めるようになった。七二年四月、研究団員制度を発足させた。これはいわゆる学校ではなく演劇の世界でいうならば劇団研究生的な色彩の濃いものであり自主トレーニングに重きをおいている。このなかから多くの有望な若者達が育ってきた。尺八の三橋、福田、田嶋、藤崎、琵琶の田原、箏の吉村、池上、花岡、宮越、胡弓の畦地、指揮の稲田、作曲の内田、文芸の霜島の諸君である。今や集団の中堅としてその縦横無尽の活躍ぶりをみるにつけ将来が楽しみな個性豊かな人材ばかりである。

## 初めての海外公演

一九七二年九月十七日、日本音楽集団はベルギーの古都ゲントで海外における第一声を発した。四年にわたる準備を経て団の総力を結集してのヨーロッパ公演は、自らの音楽を創り出していく者にとっての喜びと厳しさを身をもって体験し得る貴重なものであった。四十日にも及ぶ海外での演奏旅行は単なる仲よし集団ではとてもまとまるものではない。演奏の喜び感激も大きいが、一つアクシデントにぶつかった場合一人一人の理性ある行動が特に要求される。この旅は演奏上の成果は勿論のこと団員の人間としての成長にも大きなプラスとなった。と同時に集団が同人意識は大切にしながらも、その円滑な運営のためにより前向きな姿勢でとりくんでいかねばならぬことを痛感させた。

## 事務所開設

ヨーロッパ公演で音楽面ではたっぷり栄養をつけてきた集団も経済的には相変らず苦しい状態であった。それでも何とかやりくりをして渋谷に事務所を持つことが出来た。楽器運搬の車も買った。七坪ほどの小さな事務所だが机と電話のみの閑散としたものだった。しかし今は委員会を開くのにも身動き一つ出来ない手狭な有様だ。全てはヨーロッパ・アメリカ公演が終るまでとがんばりぬいてきた訳だが、十五周年を迎えた今年こそ何とかしなければパンクしてしまうだろう。

## あいつぐ国際交流

七四年の十一月から十二月にかけて国際交流基金の企画による東南アジア公演、七五年二月から三月にかけて文化庁助成によるオーストラリア・ニュージーランド公演と海外公演があいついで行なわれた。七二年のヨーロッパ公演にくらべるとはるかに大らかな旅であった。東南アジアではインドネシアとベトナムの伝統音楽に、またオーストラリアではその広大な大自然と偏見のない自由のなかに、これからの交流の大きな可能性を見る思いがした。七六年二月から三月にかけて集団の六名のメンバーによるアメリカ公演が行なわれ、カーネギー・ホールで初なのりをあげ大成功をおさめている。

## そして今

話は前後するが、七五年九月からコンサート・シリーズが発足。このシリーズは年に定期、室内楽、伝統音楽、楽しい邦楽を各二回行なうもので演奏会は飛躍的に増大した。団員はフル回転、事務局も奈良が加わって三名となった。集団の広報部門で大きな役割を果たしている機関誌「邦楽現代」も七六年にスタート、多くの方々の投稿を頂き現代邦楽に新たな息吹きをまきおこす場となっている。

そして七八年秋。総勢二六名による五八日間の世界一周公演。十一月には音楽之友社賞の受賞。その昂奮さめやらぬなかで創立十五周年をむかえることになった。集団は今までに多くの種をまき育ててきた。これをいかに実らせ、私達の糧としていくかという課題が待っている。多くの人々との連帯の中で、初心をまげず常に外に向って開かれた集団としてその灯を激しく燃やしながら更に大きくはばたいていきたい。

祝

日本音楽集団

創立十五周年・定期コンサート五十回・第五次海外公演帰還

この秋、
カーネギーホールをはじめ
世界各地の聴衆を熱狂させた
日本音楽集団——
——脇役はもちろん
琴光堂の二十絃箏

箏

三絃

十七絃

十八絃

一見不必要と思われる細かな点にまで、改良と創造を重ねてみました。高い完成度を誇る低音楽器の最高級品

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都世田ヶ谷区赤堤2丁目25-7 TEL (328) 2802

日本の伝統芸術を創るビクターの純邦楽レコード!!

# 箏・尺八の楽しい練習曲集

◈箏・尺八を稽古している人の為に企画された練習曲レコード!!
箏を習っている人は、尺八と、尺八を習っている人は箏と合せる様にマイナス・ワン方式になっています。

**箏・尺八の楽しい練習曲集1《初級編》 ■SJL-177**

- 荒城の月
- 花嫁人形
- 浜千鳥
- ともしび
- ぶんぶんぶん
- 螢こい
- 姉こもさ
- 花笠音頭
- 五木の子守唄
- ティンサグの花

- 練習曲1番 春の脊
- 練習曲2番 冬の星
- 練習曲3番 雪の朝
- 練習曲4番 祭のあと
- 練習曲5番 かまくら
- 練習曲6番 お月見
- 練習曲7番 子守唄
- 練習曲8番 村芝居
- 練習曲9番 山路をいく
- 練習曲10番 海のおもいで
- 練習曲11番 線香花火

**箏・尺八の楽しい練習曲集2《中級編》 ■SJL-178**

- キラキラ星
- 赤とんぼ
- 出船
- 砂山
- 波浮の港
- メヌエット
- トロイカ
- 会津磐梯山

- 練習曲1番 さざ舟
- 練習曲2番 トンボの飛行
- 練習曲3番 かざぐるま
- 練習曲4番 とおい春の日
- 練習曲5番 かあさんの子守唄
- 練習曲6番 まわり道
- 練習曲7番 鷹
- 練習曲8番 あこがれ

■作曲・編曲：長沢勝俊
■演奏者：箏／野坂恵子、宮本幸子　尺八／宮田耕八朗
＊各30cmLP ¥2,200 好評発売中

Victor
ビクターレコード・音楽テープ

# ヨーロッパにおける邦楽

平野健次

江戸っ子の私は（池田弥三郎先生によると、東京生まれのインテリは、東京っ子というそうで、そうすると、江戸っ子とは、無教養な東京生まれのオッチョコチョイということになるが）、とにかく、最近の若い者で、河東節の味がわかるのは、私くらいなものさと、勝手に思いこんでいる。ところが、関西に十一年住んだおかげで、江戸っ子のくせに地歌の味がわかるのも、私くらいなものだと、これまた勝手にうぬぼれている。

ところで、一九七八年の一月から三月まで、西ドイツのケルンにいたが、これは、とてもとてもワグナーの味がわかるところには至らなかったのみならず、扱っていたのが日本音楽ばかりで、少しも異国にいた気分はなかった。帰国す前に、日本音楽の独日シンポジウムという、恐らくヨーロッパで初めての研究集会が開かれたが、参加者は、ケルン大学のロベルト・ギュンター教授を中心に、在ヨーロッパ日本人研究者と、ドイツ人の日本音楽研究者とを糾合した状態となった。

そのシンポジウムを通じて痛感したことは、味がわかろうとわかるまいと、とにかくヨーロッパにおける日本音楽研究熱が、にわかに高まってきているということである。たしかに、外国人に、邦楽の味が理解できるかどうかは、大きな問題ではあるが、しかし、彼らの研究熱はすさまじい。

そして、ある程度のことを教えてやりさえすれば、なまじな日本人よりは、よく理解してくれそうな可能性が十分にあるのである。そして、真の理解は、その土地に住んでみなければわかるはずがないという主張に対して、極めて柔順であって、このところ、続々と日本へやってくる外国人が急増している。おかげで、私の芸大における講義などは、本来受講していなければならないはずの邦楽科の学生は、小さくなっていて、ヘンな外人が、米独とりまぜて、大きな顔でがんばっているありさまである。

それでも、河東節の味も、地歌の味も、これをわかるまでに至るのは、なかなかであろうとは思うが、しかし、それよりも、これらのヘンな外人よりも、日本人の方が、もっとわからないことも事実であるから、私としては、これらの外人どもへのサービスに追いまくられても、これも宿命とあきらめざるをえない。

『季刊邦楽』第16号で、横道万里雄先生が、こんど生まれかわった時には、「箏曲・尺八等に至っては、演奏会の中心が創作曲に移り、古典芸能としての支持がますます薄れて行くでしょうから、来世のわたくしの研究目標の範囲からは、遠ざかって行く気がいたします。」と述べておられるが、そうだとしたら、日本音楽集団あたりの罪であろうかとも思えなくもないが、それよりも、横道先生をして、そうした誤解に至らしめた最大の原因は、やはり、日本の中での邦楽が、ヨーロッパにおける邦楽よりも、その社会的評価において落つるところがあることにあるのではなかろうか。

（独協大学教授・東京芸大講師）

# 日本民族のモダン・ダンスを作るために

藤井　公

五、六年前になりますが約一年間欧米をまわり、昼は舞踊の学校やスタジオを、夜は舞踊公演や音楽会に足を運ぶ毎日を過していました。

街路樹が秋を染めた九月の頃だったと思いますがパリに住んでいた私は日本音楽集団がドイツのケルンで演奏会を開催する事を知り、久しぶりで三木稔氏と会えるという喜こびもあって早速出掛けて行きました。三木氏との出合いの喜こびもさることながら私は当夜の久しぶりに聞く日本音楽集団の邦楽演奏にすっかり感激してしまいました。殆んど毎日洋楽洋舞にばかりふれていた異国ということもあるかもしれませんが、その時の感動はそれ迄にない何か別の感動であったのです。私の舞踊生活の中の音楽はそれ迄何故か洋楽を追いつづけての創作活動でした。その都度共感したり愛して来ました。がこの日の日本音楽に自分が日本人であるという時点に引きもどされた強いショックを受けた事を忘れられません。私にはおくればせながら新らしい音楽との出合いとして受けとめずにはいられませんでした。日本の風土に生きて来た私の体質、五感から突き上げて求める音を

感じたのです。音の一ツ一ツが、そして日本音楽独特のリズム、呼吸、間が、民族性豊かにじかに生々と心にふれてきます。私は限りなくイメージを湧かせては再感受していました。モダンダンスも独自のこうした日本を体質として持たなければいつまでたっても西洋ダンスだなと思い知らされたのでした。ここに日本民族が持つモダンダンスがあると思いました。

帰国後、ケルンで演奏された三木稔氏の「天如」をダンサー加藤みや子の一時間のソロ作品でダンサーと演奏者野坂恵子の熱い交流で展開、モダンダンスの独自な世界を創りえたのではないかと思っています。その後長沢勝俊氏の「廻河」を半田綾子の生演奏とダンサー五井輝、本間祥公が同時に舞台空間を独自な世界へひきこんで行く作品に、他津軽三味線をバックボーンに創ったダンサー小黒美樹子のソロ「紅い花」、三木氏の箏曲の間を本間祥公、神雄二の二人のダンサーのかけ合いに象徴させた谷崎潤一郎原作の「剣青」等、私の作品の一脈となっています。様々な手法やアイデアを目まぐるしくあれこれやってみた時代から、ほとんどやりつくされてフト立ち止って何が今なくてはならない事なのか各々混迷期を迎えている舞踊界ですが、過渡的平和な作品群に切り込んで日本人のモダンダンスはどう展開すべきか、日本民族としてのモダンダンスの課題を追及しなければいけないのではないかと思っています。時の流れを寛容に受けいれながら、かつ時を生きる生きた作品を創るために、又国際的に通用する日本のモダンダンスを創るために、今後も苦しんで行く事になると思っていますが、私のそうした開眼の出合いであった集団の今後の発展を私は心から期待しています。（舞踊家）

# 邦楽器——この魔術師たち

佐藤敏直

昨年はへんな年だった。集団の音楽評を二度も続けて書くことになってしまったのだから。そういえば、現代邦楽の批評は今までついぞ書いたことがなかった。

大体、批評を書くということを好まない。拙い筆では音楽の感想を、これぞ直観そのもの、という具合には書けないからだ。そして八方に気をつかう。するとまわりくどくなり、あげくのはてに自分でも何を言っているのかわからなくなって少からず消耗してしまう。

しかし、ちょっと衝撃的だったのは、日本の楽器による音楽が、こうも感想の述べにくいものであることを知らなかったことである。それが、存在するだけで高い表出濃度を秘めた音たちによる幻惑のなせる業らしいと思ったのはごく最近のことであるが、ともかくあまりにも親しげに胸の中に入ってくるからなのだ。こちらが聴く気にならなくとも向うから勝手に入ってくる。聴く方にも拒否する権利があるのだなどと言っても、するりと滑りこんでくるのだから、もはや拒みようがない。そんならもう勝手にしろと、半眼の構えに入る頃には、一曲が終ってしまう。さあどうだったかと慌てても後のまつりである。

そうした、私と楽器との、いわば同質的な関係は、一見コンクリートの中の生活に馴れた現代人が、木の肌合に触れたときの間柄と似ている。木は多くの塗料を使わなくても、その自然な様はいつもみずみずしく、秘められた容量を気づかせない。例の右の脳か左の脳かという、あの角田理論をまつまでもないことだ。

けれどもふと思う。この楽器たちの魔の広い手のひらから遠れて、木肌にふさわしい、新しい彩色をほどこすことのできた作曲家は何人いるのだろうかと。

現代的な装いはできる。ナウな効果も、その気になれば簡単だ。だが多くの作品は、そのあまりにも雄弁なことに自然なこの楽器たちにふりまわされて、内面の深さが自ずと新しい色つやを醸しだすのを待とうとしない傾向があるのではないか。

そして一方で、非常に巧みにこの自然を操る演奏家が、当然のことながら、常に作曲家よりはるかに具体的にその仕掛けに精通している、という武器を駆使して、どんな作品でも恰好つけてみせる、という二重の混乱を引き起させているようにみえないこともない。

あのひと鳴りは、作曲家のものなのか、奏者のものなのか、それとも楽器そのものなのか、それらをはっきり知らせてくれる音楽は意外と少ない、と遅まきながら気がついたのである。感想が述べにくいことを、多少強引に分析すると、私の中ではこうなる。

さらに、聴き手が、忘れかけていた木肌に酔って、たとえば桧木造りの新築の家を建てたときのような、ただそれだけのことに陶然する、という場合だってあり得ることではないか。

だから、またしても挑戦してみたいと思っている私は、——過去の作品にも想いを馳せながら——、この罠を大いに警戒しているのである。（作曲家）

## 半田綾子「日本琵琶楽協会主催コンクール」で文部大臣賞を受賞

当団の団員、薩摩琵琶の半田が「日本琵琶楽協会主催コンクール」で、文部大臣賞、日本放送協会賞、日本琵琶楽協会賞を受賞した。このコンクールはすべての流派の琵琶演奏家を対象に行われるもので、今年は十五回目、応募者は三十四名であった。演奏したのは「敦盛」、賞状、盾、賞品としてつげのバチが受与された。受賞の感想を簡単に述べてもらいました。

「私は歌があまり得意でないので、このコンクールを受けるにもすごく覚悟がいりました。今年でちょうど芸歴十年になり、漠然と二、三年前から、十年経ったらコンクールを受けてみようと思っていたんです。しかし、今度は体の調子が悪くて、無理はしないよう先生に言われていましたが、賞をとるとらないでなく、十年のひとつのけじめということでよしやってみようと思ったわけです。そうしたら賞をいただいて……、とてもうれしかったです。

琵琶は語り物と切り離せませんから、これからは語り物の勉強にも力を入れて、古典の奏法を身につけてゆきたいと思っています。」


# 琵琶　現代音楽演奏会

出演――半田綾子・田中之雄・三宅博・瀬戸龍介　ほか
曲目未定
主催　鶴翔会

■日時　一九七九年五月二十三日（水）
■場所　青山タワーホール
■お問い合せ・電話予約　半田方――〇四九二―五一―二七〇九



# MRI RECORDING

演奏会・発表会の記録・録音
舞台音響・音楽・効果音の編集・再生

東京都世田ケ谷区赤堤3の34の22（〒156）
日本中継録音株式会社
TEL 03―321―9629



四つの個による
楽（がく）コンサートNo・1（東京）　No・2（大阪）

茉莉花／牧野由多可　雪綾／広瀬量平
曲名未定（委嘱・初演）／長沢勝俊　四大（委嘱・初演）／入野義朗
出演＝三橋貴風（尺八・篠笛）　吉村七重（箏・二十絃）　大熊和久（箏・十七絃）　宮越圭子（箏・三味線・十七絃）

東京――一九七九年四月十二日（金）　芝ABC会館ホール　■チケット取扱い　渋谷東急観光プレイガイド・新宿チケットビューロ・銀座鳩居堂　■お問合せ・電話予約　楽事務所　〇四五―五四一―五一二二　三橋方
大阪――一九七九年四月十三日（土）　テイジンホール　■チケット取扱い　阪急プレイガイド　■お問い合せ・電話予約　〇六―七八八―四二六七　大厳方

歌楽帖 2

# 秋の欧米巡礼

三木 稔

巨きな祭りは終った。
女形が、女を女以上に表現するように
それは祭り以上の祭りだった。
といったある聴衆のことばは
祭りのあとの淋しさと虚しさの中の
私たちを
次の祭りに涯しなく向わせる。

◇

四年に近い準備期間の後、二十六人の団員により、欧米八ヶ国を巡る二ヶ月に近い第五次日本音楽集団海外公演が昨秋行われた。

全員が無事帰国してくれたのだ、というのが、プロデューサーとしての私の最大の感慨である。七二年の第一次ヨーロッパ公演では、四十日の旅のあと、DC8が羽田の大地にバウンドした瞬間、機内の団員たちから、期せずして拍手と歓声が上った。長く苦しかった旅を今終えて、母国に帰った彼らの気持が、そこに集約されていた。続く七四年東南アジア、七五年オーストラリア・ニュージーランド、七六年アメリカ・カナダと、次々に海外公演を世話してきた私の目には、団員たちの逞ましい成長ぶりが驚異ですらある。作品、演奏、演出、組織力といったものも、もちろん強化されているけれども、団員たちが海外を歩く姿勢や行動力そのものが、日常的になり自然な風化を見せはじめている。変な気負いなどさらさらなく、演奏機会に全力を集中して、あとは東京の街中にいる時とさして変らぬ時間を旺歌する。それぞれ自分の方式で充分に喰べ、安い土産を漁り、他国の文化をあくなく吸収する。

◇

私たちは、極限までに開放を進める。かちとった解放も、リスクを賭して開き続けなければ、再び簡単に閉鎖社会に戻る。

外国での行動は、旅行社のツアー並に、ガイド付きにして、日常生活までも管理するのが安全であり、楽であろう。しかし私たちの集合場所は、ぎりぎりの最後である。団員たちは、常に自分一人で自分の芸を他者に伝える気迫を持つべきだ。海外にだって、いつ自分一人で行っても大丈夫なように鍛えてもらわねばならぬ。私たちの用意する旅は、その鍛練の場でもあるわけだ。

二割以上いた海外初体験の団員たちも、何日か経ると、大手を振って街を歩くようになる。演奏も次第に自信に満ち、古参団員にからかわれながら、いつかしっかりと自分を確立していく者も出てくる。日本に生れ日本の楽器の奏者でありながら、特殊な楽器と差別されてスタートせざるを得なかった彼等の使命感と負けん気が、異郷での生活の不便と寂寞感を、ともかく克服していく姿は美しい。

◇

もちろん、難しい問題もある。八百キロ、二十一個の重い楽器ケースは、人間とは別に、空港から直接舞台横まで主宰者側で運んで欲しいと厳重に申し入れておいても、海外では仲々万全にはいかない。演奏者たちは予定が狂って、重い荷物が目の前に積まれているようなとき、ケースを上げたり下げたり、本番に差支えるほどの重労働にも、殆んど不平なく協力してくれる。興方日の丸のオーケストラなどは、そんなときも絶対にメンバーは手を出さないという。友愛も、あるいは楽衆の存在さえも、あの社会では無縁のことで、自分の権利だけが生きて歩いている。一方、伝統演劇以外の演劇者たちは、劇団行動の全てが芸術的欲求と直接結び付いているように思われる。新しい劇団ほどそれは必須のことであり、大道具製作まで演技者の持ち分とならざるを得ない。

一体どちらが正しいのだろうか。日本音楽集団の中にも、よし悪しを別にヒエラルキーは強固に芽生えはじめている。自由時間になり、皆んな一斉に買物に散っていく横で、楽器の係りが税関の手続きに出掛けなくてはならない、といったとき、仕事だから当然、といった発言も出てくる。あるいは、演奏者は演奏がビジネスだから、それを果しさえすればいいのであって、他のことはカンベンしてくれ、という本音も次第に顕在してくる。息詰まる演奏を続ける彼らにとって、当然のことであろう。

それには私たちも負ける。集団に所属する程の人たちは、いずれ自分がキャップとして、そのようなことに心を配るべき時を迎えるだろう。今は、大切な秋の稼ぎ時を棒にふって、この長い旅に献身する優れた演奏者たちに、毎日を思う存分過してもらうことが必要なのだ、と自分に言い聞かせる。

日本音楽集団が既存の秩序を破って十五年前に誕生したとき、もちろん何の組織もなかった。組織化が、カオスのエネルギーを失うことを秘かに怖れもした。私たちの中には、演奏者も作曲者も、他のスタッフもない、全て同人といった快

い参加の実体だけがあった。しかし運動の底辺強化と、演奏家たちの生活を少しでも保証するためには、組織化と後継者養成に目をつぶるわけにはいかなかった。団は歴史を重ね、村が大きくなるにつれ、私たちには、当然そこからヒエラルキーの形成という問題が生れてくるのを避けられないのだ。

目立った事故もなく、想像以上の拍手を浴びながらも、そうした何十日を経てくると、代表の重い重い責任につきまとわれた長沢や、ジャパン・アーツからの随行マネージャー久保さん、それに舞台、楽器の係りの奈良、中島たちにも、どこか篭った苦痛のかげりを見るようになる。スタッフにとって国際交流はきついものだ。本当にご苦労さまでした。

◇

シカゴのコンサートが〈巨火〉で終ったとき、一人の白人女性が私に近づいて、上手な日本語でいった。「歌舞伎では女形が、本当の女が表現する以上に女性を表現するといいますね。三木さんは〈巨火〉で祭りに参加するとこのパンフレットに書いていますが、〈巨火〉は祭り以上に真の祭りを表現しました。」

この一言は、旅の終り近く、極度に疲労していた私の心を一挙に回復させる力があった。この人はノースウェスタン大学で日本文学を教え、日本の古典や大宰治に詳しいLyons教授であった。次の日のレクチュアでも、熱心にメモを取っておられたが、私と〈春琴抄〉の話になったとき「三木さんは、春琴の顔に熱湯をかけたのは誰だと思いますか」という難問を出されたのにはまたまた驚かされた。

七二年の第一次海外公演では、コンサートのトリは長沢の〈子供のための組曲〉か私の〈凸〉であった。十人前後の編成がスタンダードだったので、それはとても自然な盛り上りを伴った閉じ方であったが、今回は上達した二十人以上の演奏者に、全力を発揮してもらう必要があった。〈巨火〉は、一昨年の〈かぐら〉一九七六〉で、私のかぐら的表現の極限を望み、創るもの、演ずるもの、聞くものの全ての一体を夢みて書かれた。祀りから、道行を経て祭りまで、私たち日本人の肉体と心の祖型からの忠実な創造物としか私には表現しようがない。三十分を要するこの作品は、十六人の管楽を四人の打楽器が囲み、うち一人が指揮というより音頭取りを兼ねるという、つきつめた様式で、極く自然に今回の演奏旅行の多くの場所で、最終曲目となった。

相当強引な私の暗譜要請であったが、演奏者たちは、それを果し、当初落ちつかなかった目線の問題なども次第に克服し、技術を超えて音楽に没頭する姿は、私には神々しくも見えた。Lyons教授のことばは、正に私の夢をいい当ててくれたものである。

曲の三分の二を過ぎて、秩父囃子のリズムが出現する瞬間、打楽器の四人は、早業でたすき掛けを行う。三秒そこそこでやれる奏者もいる。しかしこれはショウではない。音楽が祀りから、野外に出て祭りに移るために絶対に必要な儀礼でありアインザッツであった。

最終のミネアポリスでは、笛、尺八もこの様式転換に参画した。精神の高揚がもたらした即興の発露と私には快く映った。

◇

西欧の一部知識人の間では、明治維新の裏返しが進行中である。百年前の日本人が、リチュアルであることを失し、冠婚葬祭的に辛気臭くなってしまった邦楽を捨てて、合理的で、歌い易い洋楽に憧れたと全く逆に、彼らは西欧近代に倦きて、ファー・イーストの禅的静寂に指向する。だが、団員たちと合意の下に意図した今回の作品・演奏の様式は、前項に述べた通りだし、長沢作品は、私のものと技術や作風は違っているが、日本国内で十数年に亘り沢山の支持を集めている彼の代表作を選んでいる。日本音楽像に禅のヘゲモニーは不要である。

ともあれ、日本からの音楽のくせに、禅的ポーズをしない活きのよすぎる日本音楽集団は、わび・さびのジャパンを期待する一部批評家をとまどわさせ、排斥の筆を取らせることもある。

昨年十月は、ニューヨークでは新聞ストが続行中で、一般紙の批評を入手していない。あるミニ・コミ紙のTom Johnson氏の批評を紹介しよう。彼は集団の音楽が気にくわなかった。そこで日本に住んだことのある米人作曲家に電話し、「三木・長沢というのは大変旧式な作曲家だし、集団は日本で保守反動の代表だ」と聞く。その言葉は、近頃は聞かないが、かつて日本の同業者から、中傷と羨みで言われたことがある。Johnson氏の文中にあるポスト・ウェーベルン、一九七〇年代、といった流行を拒絶したところにいる私、あるいは長沢、さらに日本音楽集団を、そういう風にカテゴライズすれば、彼らは気がすむのだろうか？

だが私たちは、作曲家個人の趣味的な志向を超え、日本音楽集団という生身の演奏者たちや、彼らがそれによってしか生きられない楽器を通して、より多くの内外の人のコンセンサスを求めつづけている。Tom Johnson氏に代表される一部欧米人たちの狭い概念としての日本音楽像に、日本音楽集団が該当しなかったといって、八ツ当りされるのは、甚だ迷惑なことである。

手紙だけで理解を求めても無理だ。テープやレコードでも難しい。一回程度の生演奏では、既成の反対概念を持った人は、この例のように説得させ得ない。あのカーネギー・ホールで歓喜した客の中に、このように冷たい意見の持主がいたとは信じられない。しかしそれも現実ではあるし、私たちは、あの心から祭りを享受してくれた二千の聴衆との繋りや、

他の好意に満ちた批評で暖をとりつつ、巡礼を続けるしかない。

◇

私たち、と私は書くけれども、集団を構成する各人は、それぞれ異った意見や目的を持つだろう。私の場合は、将来、理想の一つを〈歌楽〉として完成させたい。そこでは作曲者と演奏者は同一であり、器楽と声楽を共有し、時には自ら大道具であったり、聴衆自身であったりする。行為は常に今日の瞬間のためにあり、過去と未来は共に結果でしかない。伝統に縛られ過ぎることもないし、残すことは想定するのさえ拒否する。組織や後継者は不要である。一つの表現のために、有志が集っては散る。美を憧れつつ、真の幸福のために社会批判を貫き通す。芸能の原点を指向するのだ。

◇

その私なりの純粋理想とは遠く異った形で、今、集団はある。例えば、最近各社から出るレコード、発注される企画のような、洋種のアレンジ物を、生々しい文化の反映と気楽に肯定するには、自分のピューリタニズムが許さない。そういう、まかり間違えばグロテスクといわれかねない行為、あるいは、伝統という名の怪物との距離、コマーシャリズムや権力との関わり具合までも包含し、組織は成熟しつつある。後継者は各部門で目白押しとなり、その結果のヒエラルキーも避けられない。

第二回〈音楽之友社賞〉を受けて、日本音楽集団はまことに光栄である。今は、集団の歴史の中で、二度目のピークかも知れない。しかし私たちは、当然現実の社会の一員であり、述べ来ったように内外に問題は山積みしている。その抵抗による発火の連鎖を有効に制御して、永遠の動力は得られるのであろうか。

◇

ミネアポリスから成田に到着したジャンボ機の中では、拍手も歓声も起らなかった。まるで今夜またコンサートがあり、明日は次の飛行機で、といった余裕ある団員たちを見て、私の胸中は複雑であった。次の世代はもっと日常的であろう。更に確立している分業社会の中で、更に活達になっているに違いない技術を駆使して、隣の町に行く気楽さで海外に出るだろう。

そうなったら、次の祭りに遅しなく向わせる、なんていうロマンティックな音楽監督は、笑い者となるに違いない。案外 Tom Johnson 氏に、好評を書かせる集団に生れ変っているかもしれない。

# 心に残ったものから

## 一九七八年度前期・現代邦楽作品と演奏

### 石田一志

日本音楽集団の春の定期演奏会、鯉沼広行の横笛の会、野坂恵子二十絃エコール、カメラータ・トウキョウの邦楽器との夕べ、日本音楽集団室内楽演奏会、後藤すみ子と現代箏曲研究会等々……上半期に限ってのことでも、手帳をくってみるとずいぶんたくさんの演奏会が、それもいろいろと性格のちがう演奏会がつづいたものだとびっくりする。ジャーナリスティックな話題には、かならずしも一時程、現代邦楽がのぼるということは少くなってきたようだが、逆にいえば、その順当な定着ぶりは著しいのだと考えられるだろう。とくに、この上半期では、集団の定期演奏会は別格としても、鯉沼の横笛の会の二回目、野坂の二十絃エコールが三回目、現代箏曲研究会が六回目と、着実な会としての継続性と前進性を感じさせるものが多かったことは印象的だった。

そのなかで、八月十七日草月ホールでデビュー公演を催した、新発足の演奏集団『ぐるーぷ・だだ』は、新鮮さという点に観点を絞れば、今期唯一の収穫であったといっても過言ではないだろう。

笛の望月太八と打楽器の尾崎太一・堅田啓輝・高橋明邦・藤舎成敏の五名を構成員とするこの「だだ」の特徴は、いうまでもなく笛と打楽器アンサンブルからなる編成のめずらしさであるが、このユニークな編成のほかに、構成員が純粋な伝統邦楽出身者から、ジャズのプロドラマーとしてならしたことのあるもの、或いは現在もオーケストラのティンパニー奏者を兼ねているものまで実に多彩なキャリアの持ち主たちの寄合いであるという点もあげられる。グループとしての演奏活動の基本的な主旨は、全員が属している「集団」に学んだものとはいえるだろうが、この編成のユニークさと構成員のキャリアの豊富さがよい意味で反映したのだろう。このデビュー公演を聴いた限りでは、プログラムの選曲など「集団」より幅広い傾向、作風を含み、また朝倉摂の美術・北寄崎嵩の照明も効いてスマートなステージになっていた。

演奏は中堅の仕事慣れした人達のあつまりだから概して上手にまとめられていたが、作品との兼ねあいということでは委嘱初演作の池辺晋一郎の「雨の向うがわで」という、歯の擦音や、母音の声、木魚の音などを活用した文字通り、雨音のリズムと音色のかもしだす不思議な飛躍と柔軟性に富んだ作品で示された演奏のセンスの良さや、日本音楽集団の共演を得た三木稔の「巨火」の熱気に満ちた演奏、とくにカデンツァのすばらしさは、このグループの今後の活躍を充分期待させるものだったといえよう。

### 木村重雄

■名フィルと邦楽器の名手たち――東京公演（3月2日・教育会館虎ノ門ホール）

地元・名古屋で過去三回にわたって試みられてきた「名フィルと邦楽器の名手たち」が、日本交響楽振興財団による第二回「現代日本のオーケストラ音楽」として東京でとり上げられた。目的のひとつは、創作に関してともすれば冷淡な地方オーケストラが、きわめて積極的な姿勢により、しかも邦楽器によるコンチェルタントな作品を通じて、このところ各領域に意欲的な活動をみせている演奏家たちの名技をもあわせて紹介するという試みを、改めて東京でとり上げることにより社会的な関心をたかめ、同時に昨今輩出しつつあるこの分野の秀作を一括して広く公衆に披露するところにあった。

まず、そうした目的はここに蒐められた四曲と、それぞれをみごとに再現した五人の、今日の日本のおける現代邦楽を代表する独奏者（鶴田錦史、横山勝也、山本邦山、沢井忠夫、野坂恵子）によって果たされ、荒谷俊治指揮の名古屋フィルハーモニー交響楽団も入念な協演により、水準の高さをしめしたのであった。

■二つの〈タロウ〉

昨秋NHKのために書き下ろした三木稔の独唱・児童合唱と邦楽器のためのお伽草子〈タロウ〉（蓬莱泰三・作）が、二つの合唱団によりあいついで舞台にかけられた（演出はいずれも山田卓）。まず放送初演した東京放送児童合唱団第六回定期演奏会（4月16日・虎ノ門ホール）で、古橋富士雄の指揮によりいかにも初

めての紹介者にふさわしい手堅いよくまとまった演奏と簡潔な舞台により作品のイメージを爽やかに伝えた。つづいて、東京荒川少年少女合唱団が〈三木稔の音楽をたずねて・その2〉と名づけた第30回定期演奏会（4月23日・荒川区民会館大ホール）が再演。渡辺顯暦の指揮による演奏は音楽と言葉のもつ意味を細かくさぐり出し、むしろこちらはシアトリカルな再現で楽しませたのはスタッフともどもすでに作品全体のイメージを把握した強みとでもいうのだろうか。とも角、ふたつながらに作品のもち味を生かした、得心させられる表現であり、出演者たちもそれぞれの役割を正しくはたしおえていた。

■「ぐるーぷ・だだ」公演（8月17日・草月会館）

尾崎太一・堅田啓輝・高橋明邦・藤舎成敏の四人の邦楽打楽器奏者に望月太八（笛）を加えたこの意欲的なグループのデビューはきわめて鮮烈だった。

スペースの関係で、詳述することは割愛せざるをえなかったが、この期間における野坂恵子（二十絃）の前記名フィルとの〈破の曲〉をはじめとするオーケストラとの三木作品の協演（東響との〈序曲と春駕囃〉、新日本フィルとの〈序の曲〉）と、いくつかのドラマ（新劇）公演での日本音楽集団メンバーの好演が注目された。

## 小宮多美江

次の三曲をあげながら、私は、いわゆる洋楽作曲家たちがようやく、邦楽器へのことさらあらたまった態度をのりこえて、ただ自分が今表現したいものをそのままに表現するために、そのことのために選んだ楽器によって作曲しはじめている、ということを感じています。

●中山義徳作曲「夕薫川変奏」（合奏）

●岡田京子作曲「貧しきものの唄」（二十絃独奏曲）

●長沢勝俊作曲「尺八協奏曲」

中山作品は、日本音楽舞踊会議と日本音楽集団の合同演奏会（2月15日・青山タワーホール）で初演されました。作品の提供と演奏の協力で現代邦楽作品を運動として生みだしていくという試みでこれは第二回目。中山氏は再度の出品で、経験を積んだことが十分生きています。

夕薫川とは九州・八代海に注ぐ球磨川の別名、作曲者の故郷の川です。打楽器の静かな導入に忘れ得ぬ笛の音がダブります。流れの第二部は自然を写し、躍動の第三部には人びとの生活があります。大太鼓の連打のコーダも印象的です。

変奏といっても洋楽曲のそれとは違う序破急の形式です。今、私はテープをきき返していますが、演奏会当日も、音の流れにつれて、きくものがそれぞれに心のうちに形象を結ばずにいられない感じで、初演でのこのような充実感は珍しいことだと思われました。

岡田作品は、二十絃箏皐月の会、野坂恵子二十絃エコール第三回公演で初演されました（5月29日・ABCホール）。「ふるさとのお月さん」「眠りの唄」「いつもロずさむ唄」「遠い道」の四曲。当日は、それぞれ違う奏者が演奏しましたが、短いがしかし、それぞれに表情ゆたかな趣きをたたえた作品で、一人の奏者がそれをひきわけるのもおもしろいのではないかと思われました。

作曲者は、作曲に当っての「こくやさしくて短い曲」という注文を、二十絃エコールの方向とも解釈したと書いていますが、私にもこれらの曲は、二十絃箏の普及発展に一番必要なものを充たしていると思われました。それは、この演奏会でのラヴェルの「マ・メール・ロワ」の二十絃と十七絃による演奏の試みからも察せられることでした。

どちらの曲も演奏の改善の余地はまだまだ残されていますが、演奏するものが曲に託していくらでも気持ちをふくらますことができるということ、それなしには聴く人の気持ちをさそうことはできないでしょうし、それがあればこそ技術的な困難もたやすくのりこえていくことができるのですから。

長沢作品については、他誌（「音楽の世界」9月号）に書いたので略させて頂きます。

## 土田貞夫

### 土俗的なもの

土俗的なものといえば、ことに西洋音楽などを好んでいる文化人たちは軽蔑の眼差しを隠そうともしなかった。近頃では必ずしもそうではなくなってきたにしても、土俗的なものが持つ歴史的文化的意義の重大さにはまだ広く理解が及んでいないようだ。そんな中にあって、かつてビクターの懸賞に応募して受賞した伊福部昭の「交響譚詩」は北海道の原野を思わせる原始的な響きを響かせて人々の耳をそばだてさせた。彼の制作は学究的な極めて慎重な態度でなされるので作品の数は多くなく、「ギリヤークの歌」や今度編集者が限定してきた期日内に演奏された「郢曲饗多々良」ぐらいしか私は聴いていないが、大地に根ざした土俗的な響きを勝れて力強く音形象化しているのが心を捉える。都会文化に仇花を咲かせている作曲家とは異質の存在だ。彼が自信強さをもっているのは、大地にそしてそこで営まれる土俗的な行為や考えに

しっかり根を下しているところからくるものと思う。このような彼のことをとり上げたのは近代文化の終末を迎えて了った現代では始源的なものに立ち返る以外に進展の契機をつかむことが出来ないからである。日本音楽集団が西欧で迎えられるのも禅やヒンズー教などが基督教国で行われるようになったのも、西域の文物が世界の関心を集めているのも以上書いてきたことと無関係ではない。いわゆる近代意識からの大転換が問われている現代なのである。

### 音楽は孤独でない

三木稔が国立劇場で披露された二代目西崎緑の舞踊劇『鶴』のために声楽入りの附帯音楽を作った。野坂恵子の会では声楽も含む語りとして演奏したが、もともと日本音楽は能楽のように舞と仕草と謡とお囃子の掛合によって成立している場合が多く、土俗的な音楽もそういうものであったのだから、器楽一辺倒を少し考え直してみる必要もあるのではなかろうか。邦楽器による演奏団体というのが日本音楽集団のたてまえであって、その点では、いつぞや第一生命ホールでやった「凸」のように最高度に充実した演奏を聴かせてくれたのだから、あれ以上のことを望むのは至難のことに思われる。しかし聴衆の飽くなき期待は勝れた演奏に堪能しながらも常に新たなものを求める。手取早くそれに応えるには声楽をとり入れることであろう。それに滝沢修演出の「その妹」に協力するといったことがもっと試みられてもよいのではないか。そのようにしながら他芸術をも音楽にとりこんで了うなんて考えるだけでも愉快ではないか。音楽を厳しく愛する者は音楽を孤立化させることはしない筈だ。

## 富樫康

最近、現代邦楽の演奏会が頻繁に行なわれるようになったので、ほかの会と重なったりして、それに関心の深いつもりの私も、三回に一度は欠席するような結果になる。従ってここではもちろん網羅的にふれることはできないので、二、三の作品について記述することでお許しいただきたい。

「邦楽4人の会」(3月9日・イイノホール)での野田暉行作曲〈レジェンド〉は久々に名品をきくような感懐をおぼえた。これはあくまでも尺八に主体がおかれた曲であるが、そうかといって諸井誠の〈竹籟五章〉のように尺八が獅子奮迅するわけではなく、長い曲にもかかわらず、あまり起伏の少ない、どちらかといえば平面的な曲である。しかしその平面が浅薄な平面でなく、底の深い湖水の静かさとでもいうか、悠久不変な深淵を思わせる。五年前の作品だから既に一、二回きいているわけだが、今回特に感銘を憶えたのは、尺八の北原富山をはじめ他の箏の三人(後藤すみ子、高橋美登子、角井節子)も、この地味な音楽の曲想を会得して表現することができたからであろう。

「二十絃箏皐月の会」(5月29日・芝ABC会館ホール)で初演された岡田京子作曲〈貧しきものの唄〉は短かい曲が四つ組まれた作品で、その一つずつを中丸春美、鈴本和子、池上早苗、吉村七重の四人が弾いたのだが、これはモダニズムからはなれて、箏の本来あるがままの姿を、無理をせず、自然な奏法で作ってあった。しかしそれでいて伝統にとらわれた古めかしさを感じさせず、自由に伸び伸びとした音として捉えられ、しかも肌理の細かな音の配色はなかなか感心させられるものがあった。難しくない技法で作られたそうなので、その道の名人でなくてもできるのであろう。箏をする人のたしなみに大いに弾いてもらいたい曲である。

ほかに「名フィルと邦楽器の名手たち」というサブタイトルで第二回現代日本のオーケストラ音楽演奏会が三月二日に虎ノ門ホールで開かれた。そのときのプログラムは肥後一郎の〈箏と弦楽合奏のための一章〉、広瀬量平の〈尺八とオーケストラのための協奏曲〉、三木稔の〈破の曲〉、武満徹の〈ノヴェンバー・ステップス〉といった既に高い評価をえた作品ばかりなので、改めてここで批評するつもりはないが、こうした音楽会が企画されたのは始めてだし、主催者側の日本交響楽振興財団は冒険のつもりだったかもしれないが、ホールは超満員の盛況であった。日本の作品を入れると客足が遠のくことを心配している交響楽団の方々には、一考を促したい一夜であった。

そのほかパンムジーク・フェスティヴァル(6月10日、11日・ABC会館ホール)での諸井誠作曲〈小懺悔1968〉(尺八、三橋貴風、古屋照夫とテープ音楽)及び石井真木作曲〈面〉(能役者(喜多長也)、打楽器(吉原すみれ)、電子音響のための——は何れもシアタービースとして上演されたものだが、定形を打ち破った、新風を送りこんだ作品として、強く印象に残る作品であった。

## 長尾一雄

カメラータ・トウキョウが『邦楽器とのタベ』として企画した六月十九日の演奏会(ABCホール)が、与えられた期間中私にとって最高の現代邦楽演奏会だった。第一級の演奏者たちによって、現代邦楽の美的な側面が充分に楽しめた。

矢崎・菊地・坂井・羽賀という、ふだんあまりない組み合わせの間宮芳生「四面の箏のための音楽」や、矢崎・野坂・菊地の三木稔「文様Ⅰ・Ⅱ」がすぐれた演奏だったが、中川いずみの新曲「フルートと二十絃のためのLied」の感銘は新鮮そのものと言ってよい。最近の現代邦楽が忘れかけているのはこの新鮮という特性であることを、この曲と演奏とは改めて思い出させた。曲は完成度が高度というわけではない。ただフルートと二十絃とに対して、自分の内面から出た音とぜひとも共鳴してほしいという願いが作曲者にあって、それが見事に楽器のなかで鳴ったという、真に音楽的な時間がそこに在ったのである。野坂恵子の演奏は、私は近年技巧に対する自信がありすぎてか、内面の鳴ることの少ないのを感じていたのだが、ここでは確実に彼女の肺腑が鳴っていて、一本の太い線がそこに感じられた。フルートの野口竜ともども、私の魂を翔けさせた演奏だった。

暑い八月十七日、打楽器奏者四人と笛の奏者で作った『ぐるーぷ・だだ』の第一回公演があった（草月会館ホール）。私の第二位はこれである。メンバーは打楽器が尾崎太一、藤舎成敏、堅田啓輝、高橋明邦で笛は望月太八。これはフィナーレの三木稔の「巨火」に圧倒された。かつて「かぐら一九七六」でこの曲が初演された時には格別の感銘がなかったのだが、今回は「かぐら」なり「祭り」なりというイメージが出演者全体のなかに張りつめて、曲そのものの美点や力強さが充分に前面に出された。日本音楽集団員のアンサンブルもよく、この曲の本当の意味での初演はこの晩ではないかという印象さえ受けた。

第三位は、四月十八日の『鶴田琵琶の会』（国立劇場小劇場）の『十段』である。これは武満徹の「ノヴェンバー・ステップス」第十段のカデンツァだけを演奏するもので、演奏者は鶴田錦史と横山勝也。三月に名古屋フィルハーモニーと共演した時の演奏よりはるかに引き締まり、すこやかで、ダイナミックで、しかも東洋的な濃りがあった。

他に日本音楽集団の室内楽演奏会での若手尺八三人による『轟』（七月）と、森の会定期での砂崎知子の『ロンドンの夜の雨・衝兵の交替』（六月）を推す。

地球の遺産‥石油を
大切に使いましょう。

われわれの住む地球は、はかりしれない神秘な営みを繰返してきた。その長い生いたちの中で、さまざまな微生物は降る雪の如く堆積し、生まれかわる日を待ちながら、海の底深く眠り続けた……。
そして数億年、それは石油に姿をかえた。石油を求めて人類がたどってきた長い道のり。われわれは、この地球からの恩恵である石油を大切に使わなければならない。

出光
出光興産株式会社

# 地方邦楽グループの課題

秋田邦楽の会〈つばら〉同人　萱森真雄

依頼のテーマは「東北地方の現代邦楽の動き」ということですが、残念ながら他地方との交流もありませんし、認識不足故断定的に申し上げるとお叱りを受けかねませんので、論旨のアングルを秋田に固定し、当地方の現代邦楽の現状と、その問題点などに対して、若干私見を述べたいと思います。

以前の邦楽界については、他の地方と比べても特別盛んだとは思えませんでしたが、この数年間に様相が一変し、おもしろい現象ですが、邦楽演奏グループがいくつも誕生しています。質の如何を問わず他地方に比べても自負すべき点でしょう。この理由にはいくつかの要因が考えられますが、その外的要因として、最近とみに中央の一線で活躍されている演奏家がぞくぞく来秋され、本格的な演奏を聞くことにより、我々大衆の耳が肥えて来ているし、在来の演奏では何かものたりなさを感じ出していることです。又より現実的には、内的要因として、演奏家自身の質的変化が表われているようです。「このままではいけない」といった危機感がセクトを超えさせ、合理的に刺激を求め合う場を欲求していることです。その他全般的に表現するなら、遅蒔ながら秋田にも時代の流れが押し寄せて来たと言うべきでしょうか。

いずれどんな理由にしても、数多くのグループが誕生し、色々な機会を通じて我々に音楽を聞く場を提供してくれることは、幸せなことだと思っております。

しかし、こうした現代邦楽の動きの中で、あえて苦言を呈するなら、このグループ達がこれから何を求め、何をするのだろうというより基本的な問題であります。こうグループが増しても、なかなかその特色を理解することが困難であり、ましてその音楽に対する姿勢に時々疑問を抱くことが、少なくない現状において、地方グループの存在理由とは何だろうか真剣に考える時期に来ているようだと感じます。確かに活動の側面として、中央のすぐれた音楽と技術を勉強し、伝達する責務を忘れてはいけないが、それだけが目的であってよいでしょうか。私には、何の思想の裏付けもなく、すべての音楽を受け入れ、消化して行こうとする態度には、どうしても抵抗を感じてなりません。何かが足りないと常に思うのです。

地方のアマチュア邦楽グループが、息永くその地方文化に影響を与えうるのは、演奏の出来映えもさることながら、その活動に内在する思想、姿勢が本物かどうかに関っているのではないでしょうか。そして、如何にこの風土を意識し、自分のものとするかが、その思想の原点のようです。

かく考えて行くと、地方文化という限りにおいて、風土と邦楽グループ活動とは、表裏をなす大切な問題であります。グループが存続する上で、幾多の曲折も甘受しなければいけませんが、その試行錯誤の中にも、この風土の持つ意味を忘れないようにしたい。風土なくして思想なく、思想なくして活動はないとは言い過ぎでしょうか？

ともすると、中央志向の多い邦楽グループに、もう一度、自分達の足許を再認識していただき、息の永い、その地方、その風土の特色ある活動を願望するあまり、一つの邦楽グループのあり方として、提言しました。

＜つばら＞第2回定期演奏会，演奏風景（1978年9月1日）

## 日本音楽集団第四回、第五回作曲公募について

伝統楽器に関心のあるすべての作曲者に対して公募される作曲公募の第四回は昨年十二月に締切られ、今までで最も多い十一の力作が寄せられました。一月半ばに入賞作が選ばれ、第一位作品は五月八日の春の総合定期演奏会で初演されます。詳しい結果は来号、七号で報告いたします。

尚、次回第五回の作曲公募も今年募集され、締切は十二月十五日（土）です。詳しい応募要項は七号に掲載します。入賞作品には多額の賞金が出ますので、奮ってご応募下さい。

1978年第三回作曲公募「日本音楽集団作曲賞」，長沢より表彰状を受ける中村滋延氏（1978年5月）

二十絃箏は今年（一九七九年）製作十年目を迎えさまざまな行事があります。

＊一月十三日（土）　KCAファミリーコンサート・華やぎ——ことは語る　兵庫県民小劇場
　野坂恵子（二十絃箏）十三木枕（お話）
＊三月十日（土）　野坂二十絃箏エコール松本の会　松本才能教育会館
＊六月十八日（月）　二十絃箏みなづきの会（日本各地から二十絃箏を弾く方々を招待して）　芝ABC会館ホール
＊九月十七日（月）　吉村七重第一回箏リサイタル　芝ABC会館ホール
＊十二月十日（月）　野坂恵子第八回箏リサイタル
＊他、各種レコーディング

■お問い合せ・電話予約　野坂方＝四六三—三八二四
日本音楽集団＝四〇九—五三七四


琴造り
くらもち
十三絃
十七絃
二十絃
龍勝
いとしめも致します
千葉県柏市豊住五ノ二ノ二十一
電話〇四七一・六三・三八六四



Happoen
Green
and
Wedding

（案内書送呈）
緑の中の結婚式場
HAPPO-EN
八芳園
東京都港区白金台 電話443-3111(代)
＊緑の木陰に素適な「チャペル」もございます。

## 春 勧進帳／芸術祭

53年3月発行

邦楽界の新しい七団体

両学会沖縄でドッキング
日本歌謡学会　臼田甚五郎
東洋音楽学会　片岡　義道

正派音楽院（箏曲学校）訪問記

吹いて行く　横山勝也　音楽　遠山静雄

## 夏 六段/邦楽家死の謎

53年6月発行

生まれ変わったらどうする？（演奏家の巻）

カラーページ　世阿弥の遺跡
六段の解明と鑑賞の夕べ

尺八の実用理論

ドイツで開かれた日本音楽のシンポジウム

江戸時代の邦楽批評の一例「素人歌三味線評林」

芸大・正派・育成会〔試験問題と募集要項〕

## 秋 現代邦楽

53年9月発行

生まれ変わったらどうする？（邦楽研究家の巻）

青少年芸術劇場の邦楽

箏・三味線の絃—糸引きの里を訪ねて—

義太夫節についての《座談会》

人間国宝シリーズ　杵屋栄左衛門氏

関西邦楽だより　井野辺　潔

## 冬 道成寺もの—名曲のルーツ—

53年12月発行

戸部銀作／平野健次／星　旭／
矢野輝雄／横道萬里雄

小説に現れた尺八　岡部直裕

正月と邦楽　竹内道敬／富田　宏

邦楽コンクール便り

邦楽放送についての《座談会》

## 連載

田辺尚雄思い出ばなし　田辺尚雄
日本音楽の歴史をたどる　吉川英史
邦楽用語辞典　蒲生郷昭
私の選んだ本とレコード　小島美子　長尾一雄　星　旭
松の葉（三味線組歌注解）　國學院大學歌謡研究会
稽古場めぐり　—16号より新連載—

# 季刊邦楽

B5判／一五六頁／定価九八〇円

年間購読ご希望の方は
何号よりと明記の上、
四五〇〇円（送料共）を
下記へお送りください。

〒105 東京都港区
虎ノ門1丁目19番14号
邦楽ビル2F
株式会社邦楽社
Tel. 03(591)7271(代)

# 49 総合定期演奏会

Regular Concert: works for solo, small ensemble and large ensemble.

日本音楽集団では、創立十五周年と、定期演奏会（コンサート・シリーズ）五十回を記念して、四十九・五十回を連続して行います。そういった記念の会ですから、過去の歴史の中でさまざまに話題になった作品を含めました。しかし、合奏だけをとっても、年代順にいって〈古代舞曲によるパラフレーズ〉〈凸〉〈ディヴェルティメント〉〈シャコンヌ〉〈みち〉〈邪曲鬢多々良〉〈ダンス・コンセルタントⅠ――四季〉〈三味線協奏曲〉〈新八千代獅子〉など、集団史上欠かすことのできない作品でも、最近の定期で上演したり、すぐ上演予定のあるものは除外いたしました。尚、長期にわたる海外公演があったので、後期コンサート・シリーズは一九七九年にずれこんでいますのでご了承下さい。

## 創立十五周年・定期コンサート五十回記念

――その歴史からさまざまな話題の曲を集めて――（№49・50連続）

■一九七九年一月二十二日（月）午後七時開演■都市センターホール

一、序と四つの子供のうた――和楽器合奏のために（初演）　小宮傑作曲

一九七八年日本音楽集団第三回作曲公募第二位入選作

〔笛〕藤崎重康　〔尺八〕Ⅰ・三橋貴風　Ⅱ・福田輝久

〔三味線〕太田幸子　〔琵琶〕半田綾子

〔箏〕Ⅰ・砂崎知子　Ⅱ・田嶋恵美子　〔二十絃箏〕吉村七重

〔十七絃〕Ⅰ・木村玲子　Ⅱ・本巣嬉志子

〔打楽器〕黒坂　昇　〔指揮〕荒谷俊治

二、飛騨によせる三つのバラード　長沢勝俊作曲

〈夢荷〉〈立円〉〈杉玉〉

〔尺八〕坂田誠山

〔箏〕Ⅰ・砂崎知子　Ⅱ・吉村七重　Ⅲ・花房はるえ　〔十七絃〕宮越圭子

三、夢十夜　広瀬量平作曲

〔笛〕望月太八　〔尺八〕Ⅰ・宮田耕八朗　Ⅱ・福田輝久　Ⅲ・田嶋直士

〔細棹三味線〕杉浦弘和　〔太棹三味線〕花房はるえ　〔琵琶〕田原順子

〔箏〕Ⅰ・吉村七重　Ⅱ・宮越圭子　〔十七絃〕木村玲子

〔打楽器〕尾崎太一・藤舎成敏・堅田啓輝・黒坂昇

〔指揮〕荒谷俊治

四、くるだんど――奄美の旋律による混声合唱と日本楽器のためのカンタータ　三木　稔作曲

〔笛〕望月太八・藤崎重康

〔尺八〕Ⅰ・宮田耕八朗・竹井誠　Ⅱ・三橋貴風・福田輝久

Ⅲ・坂田誠山・田嶋直士

〔三味線〕細棹・杉浦弘和・太田幸子　中棹・砂崎知子・宮越圭子

太棹・花房はるえ・低音・冀田司郎

〔打楽器〕尾崎太一・藤舎成敏・堅田啓輝

〔合唱〕TCF合唱団・男声合唱団東京リーダーターフェル有志（客演）

〔指揮〕荒谷俊治

五、二つの舞曲　長沢勝俊

〔笛〕望月太八・藤崎重康

〔尺八〕Ⅰ・宮田耕八朗・福田輝久　Ⅱ・三橋貴風・米沢浩

Ⅲ・坂田誠山・田嶋直士

〔三味線〕杉浦弘和・太田幸子　〔琵琶〕半田綾子・田原順子

〔箏〕Ⅰ・砂崎知子・小室圭子・熊沢栄利子　Ⅱ・花房はるえ・田嶋恵美子

花岡由記子　Ⅲ・吉村七重・滝田美智子

〔十七絃〕宮越圭子・本巣嬉志子・木村玲子

〔打楽器〕堅田啓輝・藤舎成敏・黒坂昇　〔指揮〕荒谷俊治

**序と四つの子供のうた**

厳しい冬から爽やかな春への変遷。草木の芽生えと共に、子供達の心にも暖かさがよみがえる……、私の子供時代のある春の一日を思い出の中に綴った五つの小品集である。

序（冬の名残と静かな春の訪れ）――琵琶にわずかな冬の名残を、箏と鈴に春の訪れを託した。季節の移り変わりを、やや揺れ動くテンポに乗せて自然に……。

一、石けり――午前の遊び。戸外への開放感と躍動感。「ケン・ケン・パッ」のリズムが、軽やかに全体を貫ぬいている。

二、おひるね――待、快い疲労を感じつつ、午後の再会を約して別れた後の「おひるね」は、琵琶・二十絃箏の調べに乗せて、尺八が静かに母の子守唄を謳い上げる三重奏である。

三、かくれんぼ――午後の遊び。また子供達が元気に集まって来た。「かくれんぼする者この指止まれ」の導入から鬼が決まり、「もういいかい」「まあだだよ」「もういいよ」「みーつけた」を折り込み、新しい鬼が決まって、他の子供達がかくれるまでを描いている。

四、夕焼けに、また明日……――夕暮れ迫る西の空には真赤な夕焼け。子供達の心には満足感。誰かが「蛙が鳴くから帰ろ」と別れを告げた。また明日……ね。

（小宮　傑）

作曲年＝一九七七年　演奏時間＝十分

**飛騨に響せる三つのバラード**

飛騨はかつて幕府の天領として栄えた所ですが、ここには今もまだ当時の手づくりの文化が豊富に残っており、私たちがいつのまにか手放してしまったいろいろなものを、再び見ることができます。この曲は飛騨に残る数多くのものの中から、私が特に強く心ひかれたものを素材としてとりあげ、組曲風にまとめたものです。

一、歩荷　山を越えて物を運搬する人のことを言います。きしむわだちの音、しっかりと大地をふみしめて歩く力強い足どり。厳しい山国の自然と、飛騨に生きる人たちの生活がそこにあります。

二、立円　今で言うベビーサークルのことです。おそらく飛騨のたくみたちが作ったかもしれないこの木製の立円に、親の子供に対する愛情と生活の知恵を感じさせます。

三、杉玉　杉の葉をたばねて作った大きな玉が、造り酒屋の店先にぶらさがっています。これを杉玉、又は杉林とも言います。酒といえば祭、はれの日の祭の哀感をえがいたものです。

（長沢勝俊）

作曲年＝一九七七年　委嘱者・初演＝桐朋会・同年　演奏時間＝十六分

**夢十夜**

集団では創立以来洋楽系の作曲家に作品を委嘱し、現代邦楽のレパートリィとして定着した新作をいくつか世に送り出してきました。そうした中で、この作品は邦楽器に精通した作曲者の作曲技法を駆使した逸品として、集団の大編成の代表的レパートリィのひとつとなっています。次に五年前、初演時のプログラムより作曲者の言葉を引用します。

夏目漱石に「夢十夜」という作品がある。十の不思議な夢を綴ったものだけれど、ヨーロッパというものの本質をいやという程知った漱石が、かえって盲目的に近代化する日本の中で孤立していったということの上で、この夢は只単に彼自身の心象風景ではない何かであると思う。この私の作品はこれを音楽化したものでなく、全く私自身の夢十夜のつもりであり、曲が十の部分に分れているわけでもない。この曲についてたとえていうならば、肖像画であるよりは壁画の群像を、対話の劇であるよりは、交誦し同時進行する無数のドラマを、そしてそれらを呑み込んで流れる河、様々な歪や亀裂をも呑み込んで流れる河……を、このユニークな団体のために展開したいと思った。一つの音あるいは一つの楽句は、それぞれ独立したドラマのつもりであり、楽器たちが同じリズムで動くことはほとんどない。

（初演のプログラムより、作曲者）

作曲年＝一九七三年　初演＝同年第十九回定期　演奏時間＝二十分

**くるだんど**

今から十六年前になるのでしょうか、あんまり昔で記憶がはっきりしませんが、あの尺八の村岡実さんからの話で、三木稔作曲の「くるだんど」の三味線を頼まれたのが発端なのです。勿論まだ音楽集団も出来ていない時です。そう、メンバーは私と十七絃の宮本幸子さん、尺八では宮田耕八朗君、横山勝也君、そして村岡実さん、今、指揮者の田村さんが打楽器で来ていました。御存知かもしれませんが、この曲は三味線がかなり重要なパートを受けもっているので、そのむずかしさも、かなりのものでした。初演は放送の為の録音でその時に初めて沖縄の三線を弾かされました。しかしステージ初演の時です。なにしろ調絃の違う三つの三味線をワキに

おいて、取っ替え、ひっ替え演奏するのです。ある部分で私は間違って違った調絃の三味線を持ってしまいました。弾き始めたら調絃が違うのです。しかもその部分はソロです。ああ……。そんな記憶が鮮烈な曲です。〈くるだんど〉黒い雲がやってくる、それが段々と大きくなってせまってくる〈くるだんど〉は、そんな意味も含んでいるのでしょうか。私達のそれまでのモヤモヤした何だかわからない鬱積した不満が爆発した感動的な演奏でした。そしてすでにその時に今日ある音楽集団のエネルギーは充満していたかもしれません。私にとっても又音楽集団にとっても記念すべき曲なのです。私はこの曲から変ってしまいました。（杉浦弘和）

※この曲は長年薩摩藩と琉球国の谷間にあって、圧政を強いられた奄美の農民たちの苦役と、抵抗の強靭をうたう次の三つの章より成っていますが、間をおかず続けて演奏されます。(1)くるだんどと掛声（いとう）　(2)舟歌　(3)八月踊

**作曲年**＝一九六三年　**初演**＝初録音＝一九六三年南日本放送　舞台初演＝同年東京尺八三重奏団（尚、日本音楽集団第一回定期の最終曲目として演奏されましたが、以後定期としては第十二回に続き三度目です）　**楽器編成**＝今回の編成はダブルです。

**二つの舞曲**

一九七〇年当時、質量共に大きな飛躍を遂げつつあった集団のアンサンブルのために書かれたこの曲は、邦楽器オーケストラの魅力を存分に楽しませてくれるものである。

第一章。深い悲しみを湛えた旋律が、尺八によってゆっくりと始められる。そして次第に緊迫感が高まり、速いテンポの掛け合いを経て、ついに力強い総奏に達する。このあたりは、集団のアンサンブルの本領が大いに発揮されるところだ。やがて、鈴の音に導かれて、ゆっくりと消えるように終る。

第二章。拍子木が開始を告げると、一章とは対照的に、激しいリズムが重ねられていく。各楽器が畳みかけるように腕をふるう。「群舞の饗宴」。最後は溌剌としたリズムが曲をしめくくる。

作曲者は、初演の時、次のように語った。「民族芸能の中にある『舞い』や『踊り』を素材とした自由な舞曲であり、民衆のもつ、たくましいエネルギーを表現したいと希った。」（初演時のプログラムより、作曲者）　（松岡美江）

**作曲年**＝一九七〇年　**初演**＝同年第十二回定期　**演奏時間**＝約十三分
**楽器編成**＝今回の編成は笛がトリプル、他はダブルです。

■客演者紹介

荒谷俊治（指揮）

九州大学法学部と文学部卒業。在学中より指揮を石丸寛、作曲を高田三郎に師事。昭和33年上京、43年に東京フィルハーモニー交響楽団の指揮者に就任。44年文化庁在外芸術家研修員に選ばれ、故ジョージ・セルに師事。クリーブランド管絃楽団をはじめ、モスクワ、レニングラード、パリ、ルクセンブルクなどの各都市でそれぞれの楽団を指揮して帰国。昭和49年から現在まで、名古屋フィルハーモニー交響楽団常任指揮者として名古屋を中心に定期演奏会の他「名フィルと邦楽器の名手たち」のシリーズは昨年三月の東京公演でも大好評であった。

日本音楽集団の団友であり、定期演奏会での共演は三回目である。

**TCF合唱団**（辻コーラス・ファミリー）

辻正行を常任指揮者とする合唱団、十数団体の総称。十数年前日本フィルの「第九」公演に出演して以来、毎年読響を中心とする都内の殆んどのオーケストラと「第九」協演、他に「カルミナ・ブラーナ」、モーツァルトの「レクイエム」、清瀬保二の「無名戦士」などを各団体と協演。合唱の真髄ともいうべき小、中編成のアンサンブルと、音楽の深奥に迫るオーケストラ付き大合唱を第一の目標として活動している。

**友の会合奏団会員募集中**（入会方法などは31ページ参照）

**東京**――毎週土曜日には三十余名の方が午後四時から六時まで（グループ名＝星組）、毎週火曜日には二十数名の方が午後六時から八時まで（グループ名＝〝たあく〟）合奏を楽しんでいます。ご希望の方は集団事務局までお問い合せ下さい。練習場習は池袋の近所です。

**関西**――関西方面では十二月二十三日、集団の京都公演の次の日に合奏団が発足し、今年の一月から活動を始めました。すでに三十名の会員がおり、練習日は土曜あるいは日曜の午後で、練習場は阪急電車十三駅から歩いて五分ほどの長安寺です。詳細のお問い合せは、大崎じゅん電話〇七七四九―四―三〇三四まで。

**名古屋**――名古屋方面でも結成の動きがあります。お問い合せは、池上早苗〇五九六―二三―四九六三まで。

# 50 総合定期演奏会

Regular Concert; works for solo, small ensemble and large ensemble.

## 創立十五周年・定期コンサート五十回記念

### ——その歴史からさまざまな話題の曲を集めて（No49・50連続）

■一九七九年一月二十三日（火）午後七時開演■都市センターホール

一、鹿の遠音——八本の尺八による　宮田耕八朗編曲

〔尺八〕宮田耕八朗・坂田誠山・三橋貴風・福田輝久・田嶋直士・藤崎重康
米沢浩・竹井誠

二、史魂（委嘱・初演）　芹屋正邦作曲

〔笛〕望月太八　〔尺八〕Ⅰ・宮田耕八朗　Ⅱ・坂田誠山
〔三味線〕杉浦弘和　〔琵琶〕半田綾子　〔胡弓〕畦地慶司
〔箏〕Ⅰ・坂井敏子・田嶋恵美子　Ⅱ・吉村七重・本巣旋志子
〔十七絃〕宮越圭子・滝田美智子
〔打楽器〕藤舎成敏・堅田啓輝　〔指揮〕田村拓男

三、ファンタスマゴリア　長沢勝俊作曲

〔笛〕望月太八　〔尺八〕宮田耕八朗・坂田誠山・三橋貴風・藤崎重康
〔三味線〕細棹・杉浦弘和　太棹・坂井敏子　〔琵琶〕半田綾子・田原順子
〔箏〕Ⅰ・砂崎知子・吉村七重・田嶋恵美子　Ⅱ・花房はるえ・木村玲子・
花岡由紀子
〔十七絃〕Ⅰ・宮越圭子・滝田美智子・熊沢栄利子
〔打楽器〕尾崎太一・高橋明邦　〔指揮〕田村拓男

四、華やぎ　三木稔作曲

〔二十絃箏〕野坂恵子

五、巨火（おほ）　三木稔作曲

〔笛〕Ⅰ・望月太八　Ⅱ・藤崎重康
〔尺八〕Ⅰ・宮田耕八朗・田嶋直士　Ⅱ・三橋貴風・米沢浩　Ⅲ・坂田誠山
福田輝久
〔三味線〕細棹・杉浦弘和・太田章子　太棹・坂井敏子
〔琵琶〕半田綾子・田原順子　〔胡弓〕畦地慶司
〔箏〕砂崎知子・花房はるえ　〔二十絃〕野坂恵子・吉村七重
〔十七絃〕宮越圭子・木村玲子
〔打楽器〕Ⅰ・堅田啓輝　Ⅱ・藤舎成敏　Ⅲ・尾崎太一
Ⅳ・田村拓男（兼指揮）

**鹿の遠音——八本の尺八による**

古典本曲の数ある中で、「鶴の巣ごもり」が親子の愛を謳い「鹿の遠音」は男女の愛を謳い、ともに愛の讃歌、生命への讃歌としてずばぬけて劇的な作品であり、それ故に演奏されることの最も多い本曲だと思います。

「鹿の遠音」は古伝によると他の本曲同様に独奏なのですが、いつの頃からか雌雄の二管によって演奏され、これが現在では定形となっています。この二管のどちらが雌で、どちらが雄なのかは私にもわかりませんが、雌雄の鹿のありさまを音楽にした作品ですから、二管による演奏が最もふさわしいように思われます。

しかし二管つまり二人による演奏が、しばしば行われるうちには、愛の讃歌どころか二人の奏者の技の競い合いのような殺伐とした演奏に出会って驚かれた方もおられるでしょう。

さて、これを八人でやったらどういうことになるのか……というわけですが、生命への讃歌を生命の群（社会）への讃歌と発展させて、日本音楽集団の八人の奏者によってかもし出される、なごやかな和の世界を今宵のお客様へのおくりものにしたいと思います。

（宮田耕八朗）

**史魂――温古知新**

甲斐の雄将武田信玄の旗印〝風林火山〟に想を発した、動、静、動、静、四つの部分から成る合奏曲です。随所に歌舞伎の外座音楽に用いられる、遠寄せ、早舞い、横笛（おうてき）等の音型が配置され、それぞれに一応重要な役割を担っている点からすれば、伝統邦楽の延長線上に位置する作品ということも出来ようかと思います。

曲名の「史魂」は、日本音楽の歴史の過程における一作品ということと、それを書いた作曲者の心の叫びのようなものと、作品の発想、内容、委嘱者日本音楽集団の様体等々に関連づけられる言葉を求め、苦吟の末に辿り得たものです。

（杵屋正邦）

**ファンタスマゴリア**

「ファンタスマゴリア」とは次から次へと変っていく光景といった意味です。

この曲は私が作曲した「子供のための組曲」と「組曲・人形風土記」の中より数曲を選び組曲風に構成するものです。この両曲ともが子供と人形の世界を画いたものであり、長年にわたりたずさわってきた人形劇活動の中から私が肌で感じ共感したものをモティーフとしたものです。従ってこの両者がどのようにまじり合っても不自然ではなくその時々に応じたさまざまな組合せが考えられます。

幸せなことにこの両曲は多くの団体により演奏され、集団自身でも優に百回をこす演奏を行なってきました。

今回は「子供のための組曲」より第一章と第五章及び「組曲・人形風土記」より（ニポポ、のろま人形）が演奏されます。今から十五年前（一九六四年）、集団結成の旗上げ公演で初演された「子供のための組曲」と二年後（一九六六年）につくられた「組曲・人形風土記」が今回「ファンタスマゴリア」というタイトルで集団創立十五周年定期コンサート五十回記念公演で演奏されることに、作曲者として限りない喜びを感じます。

（長沢勝俊）

**演奏時間**＝十八分　**楽器編成**＝今回の編成は箏と琵琶のみダブルです。

**華やぎ**

同じ作曲者の二十絃箏ソロでも、十年前に書かれた厳しい「天如」とは全く別の音楽です。「華やぎ」は、その親しみ安さの故に、すでに何人かがアプローチしていますが、箏を鳴らすという意味では、この右に出る曲はないでしょう。ともすれば、使命感に燃える私たちですが、箏譜詩集第一集と同じに「今日の日常的な音の中から――」と作曲者が言われるように、気負わずに楽しい音で綴る作品を、二十絃箏に得たのは嬉しいことです。

「華やぎ」は、箏譜詩集第二集の第五曲目ですが、この曲のみを演奏する時の為に、昨年秋に〝序〟の部分が加えられましたし、終りの部分で、一分少々カデンツァの部分があり、好きなことを弾かせていただいていますが、十分間で、静から動に、一息でヴァイタルな強さを表現するのは、かなり大変です。もし、この曲をお聴きになって、技巧ばかりが目につくようでしたら、それは全く私の至らなさの故なのです。〝The Greening〟というタイトルに似合った、初夏の逞しさと、華やいだ若々しさをこそ表現したいものです。

（野坂恵子）

**演奏時間**＝八分　**作曲年**＝一九七六年（箏譜詩集第二集の五曲目として）　**初演**＝同年

**巨火（ほて）**

〈巨火〉この名は、巨大な焔といった意味です。

盆の虫送りの道行のときに、沢山の人が捧げもつものを、私一人で〝ほて〟と呼んでいました。私のイメージの中では、巨火という字と、この呼び名が何十年も結びついてあり、いつか作品名に使いたいと考えてきました。たまたま私の企画した〈かぐら一九七六〉のとりの曲として、集団の最も大きな編成の曲を書くチャンスがあって実現しました。

十六人の管絃奏者を、四人の打楽器奏者が囲んで演ずる、三十分近い曲ですが、おおよそ三つの部分に分けて考えられます。第一の部分は〝祀り〟すなわちリチュアルな、幾分厳粛な雰囲気を望んでいます。第二の部分は〝遊び〟というか、スケルツァンドな部分です。最後は、それが徹底し〝祭り〟フェスティバルですが、秩父屋台囃子が、笛・打楽器に徹底して援用されています。もっとも、作品に民俗音楽を利用するという気持でなく、日本のすべての楽器で、この素晴しい〈秩父屋台囃子への参加〉を果したいのです。（今夜の管絃には四人多く参加しています。）

通常な形での指揮者でなく〈凸〉での様式を推し進めて、上手手前の打楽器奏者に、音頭取りを兼ねてもらえるよう作曲されています。日本音楽集団第五次海外公演では、数多くの場所でこの〈巨火〉はとりの役を果しました。

なお、二十絃箏もしくは三味線あるいは打楽器が、上演時の状況に応じてソロ的に大活躍できるようにヴァージョンを別けてあります。

（三木稔）

**作曲年**＝一九七六年　**初演**＝同年六・37定期演奏会〈かぐら1976〉

二十八～三十分　**楽器編成**＝今回の編成はダブルです。

# 51 定期演奏会 日本の四季・西洋の四季

Regular Concert – The four seasons in music, in Japan and in the West.

三月二日（金）　午後七時開演　朝日生命ホール

構成　砂崎知子

四季　ヴィヴァルディ作曲・角田圭伊悟編曲

ダンス・コンセルタント第一番〈四季〉　三木稔作曲

指揮・福村芳一（客演）

今回とり上げたヴィヴァルディの〈四季〉は洋楽ファンならもちろんのこと、そうでない人々にも大変愛好され、レコードも各社から、指揮者も演奏者も実にさまざまな人が手がけている名曲です。昭和五十年の秋には、一連の琴ニューアンサンブルのレコードの第一作「琴ヴィヴァルディ」として発売されました。幸いにも評判が良くてあれよあれよという間に売上げ一万枚を突破し、レコード会社からごほうびを頂くヒット版となりました。ヴィヴァルディを箏で弾くという企画性が当ったといってしまえばそれまでですが、私は箏で演奏されたことによって「四季」の持っている多面性が再確認されたといっても過言ではないと思います。又、レコードのジャケットの解説に三木稔氏が書かれているように〝箏にもこういう楽しみがある〟というのも本当でしょう。ただ、洋楽につきものの転調という問題が箏で弾く場合大変難しく、なかなか舞台での演奏に至りませんでした。今回は二十絃箏も使用してできるだけ原曲に忠実にやってみようと思っております。

曲の全体は春、夏、秋、冬、の四つからできており、それぞれの季節が三楽章に別れています。そして各章には四季を旺歌するソネットが音でみごとに表現されてゆきます。

二曲目は集団のオリジナル・レパートリィ〈ダンス・コンセルタント第一番・四季〉。四季を表現する各章は、文字通り「踊る春」、抒情的な「水巡る」、「秋、そして」穫り入れの踊りを経て、クールな「風の花」、そして「エピローグ」で閉じられます。

指揮には前記のレコード・シリーズでおなじみになった福村芳一氏をお招きして、レコードとは又ひと味違った〈四季〉ができるのではないかと期待しています。〈ダンス・コンセルタント〉も福村氏の指揮で、どのような〝日本の四季〟になりますか、ご期待下さい。（尚、福村氏については当演奏会のプログラムで詳しくご紹介いたします。）

（砂崎知子）

入場料　●自由席　一八〇〇円（連続定期二夜二五〇〇円）
●団体割引　一三〇〇円（十人以上の団体）
●特別に座席の指定をお求めの方には一〇〇〇円の追加で確保をします。

チケット取扱い＝渋谷東急観光プレイガイド・新橋チケットビューロ・鳩居堂

お問い合せ・電話予約＝〇三・四〇九・五三七四（日本音楽集団）

※団体割引・特別指定席は集団事務局でのみ扱います。

〈友の会会員募集〉

日本音楽集団では、演奏会などの催しのお知らせや（B会員）、定期コンサート・シリーズを一括して割引値で予約できるA会員を設けております。入会は随時ですので、ご希望の方は次の要領でお申し込み下さい。

**A会員**・定期コンサート・シリーズ半年の三公演、又は一年の六公演のチケット割引と座席確保、その他の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」（年二回刊、定価三〇〇円）、広報誌「邦楽現代ニュース」（年四回刊、定価五十円）の無料進呈。会費は三公演のチケット代を含み半年で五〇〇〇円、または六公演のチケット代含み一年で一〇〇〇〇円。

**B会員**・定期コンサート・シリーズ及びそれ以外の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」、広報誌「邦楽現代ニュース」の無料進呈。会費は一年二〇〇〇円。

**申し込み方法**　(1)各演奏会場で。

(2)現金書留＝住所、氏名、電話を明記し、会費を添えて日本音楽集団へ。

(3)銀行振込＝東京銀行渋谷支店普通預金 036－074543 日本音楽集団友の会宛。住所、氏名、電話、会費を銀行振込したことを明記して別便にて事務局へ郵送。

(4)郵便振替＝振込番号、東京 8－73559 日本音楽集団宛。友の会入会希望と明記。

■**「友の会合奏団」**――日本の楽器を演奏するアマチュアの方々へ――毎週一回集まって合奏を楽しむグループです。友の会A会員（東京）、又はB会員（東京以遠）になればどなたでもこの合奏団に加われます。流派などは問いません。すでに活動している東京、関西、動きのある名古屋については28ページをご覧下さい。

■**地方で集中的な講習会をお持ちになりたい方**――現代邦楽、邦楽に関する（特に、演奏指導や新しいやさしい曲の紹介）あらゆるテーマで講習会を開きたいという希望をお持ちの方、講師を派遣したり、共催に応じる準備もあります。

新しい邦楽を担う人たち

# 坂田誠山

坂田誠山。花の中年を迎え、長管尺八を構える堂々とした姿は奏者として油が乗ってきていることを示す。又、その恰幅の良さは、日本音楽集団をひっぱる中堅の中心人物になりつつある頼もしさを示す。

一九七一年、入団早々七十枚ものチケットをさばいて皆をアッと言わせたことは今でも語り草になっている。

坂田――僕の大学（電機大）のころは学生三曲の走りの時代でしてね。その頃、「尺八三本会」を聞きにいって感動したのがきっかけとなって、クラブの主将として流派を越えたオープンな演奏会を主催したりしてきました。

集団に入るきっかけになったのは、大阪への演奏旅行のとき横山勝也さんの替りを頼まれて、その時「入ってやってみないか」と言われ入団しました。

坂田さんは趣味が広くて、音楽以外の話題も豊富。集団の中では、異色ある視野の持ち主というイメージなのですが。

坂田――僕は昔から数学が好きで、特に勉強しなくても試験の問題などほとんど解けちゃうんですね。数学が体にしみこんでいるというか。そのせいか、いろんな意味で、数学的な見方をしちゃうんです。弟子たちにいわせるとすごく変ったところもあるようですけど、自分ではすごーく常識的で、それが音楽をやる上でかえってジレンマになっているような面もあるように思います。飛躍とか打ち破るということとかがなかなかできなくてね。神経が細かく慎重派だと思います。

ご自身の自己分析どおり、見かけによらず暖かく細やかな心の持ち主。第五次の海外公演では〝コック長〟として日本食の自炊の指揮をとり、皆から感謝された。

それでは趣味の話を披露して下さい。

坂田――写真が好きで、昔は三畳間を暗室にしてました。今は倉庫になっちゃったけど。蝦をみつけては山へ行ったり海に行ったり、特に富士山の見える所が多かったけど、とにかく自然を撮るのが好きだったですね。ところが遠景を撮るとあんまりよく写らない。フィルターをいろいろ考えるといいのが撮れるんだろうけどそこまでは凝らない。ゴルフもワーッとやって、30代がでたり、ホールインワンを出したり。初めてコースへ行ったときのスコアが、ジャック・ニコラスが一番初めに出したスコア46といっしょなんです。最近は忙しくてあまりやらず年二、三回ぐらいです。

料理も好きでね。食べるのも好きだけど特に作るのが。以前あるピザハウスのピザがすごくおいしかったので、すぐピザの作り方の本を買ったら簡単に作れそうなので、わざわざガスオーブン買って来て作ってみたの。味は良かったんだけど三時間位かかったんでこりゃ大変だっていうんで、それっきり。釣りにもよく行ってました。刺身を食べるのが好きで、新鮮なのが食べてみたいから釣りに行くんです。釣った魚が食べられなきゃだめ、だから鮒なんて眼中にないわけ。

いずれにしても僕の趣味は準備にいろいろ手数のかかるものは長続きしないのが欠点。料理のように簡単にできるものはいつまでも……。

坂田――舞台に上がる前の気持って嫌なものですね。しかしその反面、その結果が良ければ演奏から解放された時の大きな拍手って本当に気持がいいですね。

暗譜でソロの演奏をしている時によく味わうんだけど、練習の時は、すーっと最後までいくのに、あれっ、次なんだっけと思うともう駄目ね、そこはメロメロ。これは練習では解決できないしね。弟子には、こうやればいいなんて言ってます

けどね。自分のこととなるとなかなかうまくいかない。憶病なのかな――。高校時代に、淡い感情を抱いてる人なんかの前へ行くと、もうチンプンカンプンなこと言ってるわけ、あとで考えると。見かけによらないって、みんな言うけど。そう見えないのは、大きいからかなあ。

（レポーター　霜島素子＋松岡美江）

**日本音楽集団第八期研究団員募集**

現代の日本音楽の演奏、作曲、指揮及び理論の専門家、指導者を目ざす人たちのために、研究団員を募集しています。

○専攻科目と募集人員――横笛、尺八、三味線、琵琶、箏、十七絃、打楽器、作曲、指揮、理論　各々若干名

○研究年限――二年（希望するものに更に二年間の在籍も可）

○応募締切――三月一日（木）　○オーディション――三月十九日（月）

○申し込み方法――所定の申込み用紙に必要事項記入の上、受験料七〇〇〇円をそえて集団事務局へ申し込んで下さい。今回特に笛、三味線、打楽器を歓迎）

要項は各演奏会場受付へ、又は五十円切手同封の上事務局へお申し込み下さい。

## 新しい邦楽を担う人たち

# 砂崎知子

砂崎知子さん。一九七三年に集団に入団。その人並みはずれたテクニックには定評のある箏奏者である。入団するなり、当時、集合時間にルーズだった団員たちに電話をして叱咤し、皆をふるえ上がらせたものだった。又、出産の直前まで大きなおなかをかかえて自ら進んで箏を弾き続け、お医者さんや回りの人たちをハラハラさせたり、今では〝トモゴン〟のニックネームをちょうだいして個もしい限りの中堅箏奏者として活躍している。

ご本人の話しだと〝黙って私についていらっしゃい〟という風に見られがちだけどそんなことはない、そうだ。

リサイタルもすでに三回、集団での箏奏者としての活躍もさることながら、今回は彼女がプリマとして箏の合奏で録音したレコードのお話を中心に、そのスーパーウーマンぶりを拝見してみよう。

砂崎――以前、BGM（バック・グラウンド・ミュージック）カセットの製作をしている人から、何か洋楽のものを箏でやったらどうかという話しがあって、その時は四人ぐらいで、ヴィヴァルディの「四季」から「春」と「夏」だけカセットに入れたんです。それを仕事仲間の岡野さん（東芝EMI）に渡したら、またま守屋さん（東芝EMI）がそれを聴いて、「わあー、こんなことができるのか。これレコードにしたらどうだろう」で、そもそもお箏を見たこともないからというので箏を見に来たんです。それでそばへ来てつくづく見て、「ふーん、これがお箏か」その時はじめて編曲者の角田圭伊悟さんを連れてきたわけ。レコード会社からOKが出るまでは、箏でヴィヴァルディなんてとんでもない、とたいへんだったんですけど、それを守屋さんが強引にやってみようということで実現したわけです。最初の指揮者は三石精一さんでした。

それがきっかけなんですよね。こんなに長く続けるつもりじゃなくて、とにかくどんなもんだかやってみようということではじめ、フタを開けてみたら、すごく売れちゃって。レコード会社がびっくり……。守屋さんは表彰されるし、私もヒット賞もらうし。国内より外国からの方がヒキが多くて、そのために東芝に海外班というのができたくらいなんです。社長さんが、「どんな人が弾いてるのか会いたい」と言ってきたり。よく売れるからというので他の邦楽のレコード添えて外国へ送っても、ヴィヴァルディだけ売れて、あれよあれよってうちに、次は何をやるかなんて会議が開かれました。

次にバッハの管絃楽組曲を入れることになって、指揮が福村芳一さんになったんですが、福村さんはお箏なんて聴くの初めてだったんです。調絃のこととか、一回弾いたら柱が動いて音が狂うなんてことも知らない。音が出る前、ツメが当たるカシャッていう音が八人全部で弾くともものすごい音に聞こえるのが不思議で

しょうがないらしいのね。音の出だしがどうしても合わなくて、やり直しで苦労しました。モーツァルトに関しては曲の難しさからいって、さらに難しくて、それに良く知られている曲でしょ。それでもって、転調転調、大転調祭りなんで録音も大変でした。

アイザック・スターンと共演したレコードも出ましたね。

砂崎——ええ、スターンがお箏の人とやりたいと言ってるという話しが出て、福村さんが、じゃあ砂崎さんがいるよっていう話になったんです。

それから、アメリカのフルート奏者、ランソン・ウィルソンがヴィヴァルディを聴いて感激して、ニューアンサンブルと共演したいって。その話がもう具体化してるんです。曲目はヴィヴァルディのフルート協奏曲なんですけど。

ひとつのちょっとしたきっかけから輪がどんどん広がって、企画が当って成功したわけですね。洋楽の人たちと共演したり洋楽を演奏したりということで、色色邦楽とは違った経験もあったでしょうね。

砂崎——ええ、とてもやっていて面白いでした。弾きながらきれいだなと思うし、ハモらない音がないから気持ちがいいです。音の出だしを合わせるのに苦労はしましたけど。音楽はモーツァルトでも六段でも結局真底にあるものは同じ。ああいうふうに淡々と音が流れても、歌うところは歌わなきゃいけないのね。合わせろっていわれて合わせるのに必死になってると、どうしてそんなに歌えないのかと言われるわけね。とても良い勉強になりました。

以前、ある雑誌で「あなたの専門分野で一番好きな曲をあげて下さい」というアンケートがあったんです。古典も現代の曲もすべての中から選ぶということで、非常に悩んだ結果、結局、私は三木さんの「箏譚詩集」を選びました。これらのレコードのヒットは、日本のみならず海外の人たちにも箏という楽器を広めたということで大きな仕事をしたと思いますが、この体験も栄養にして、今後も後進の指導やリサイタル活動を中心に古典、現代曲のすべての面でがんばってゆきたいと思います。

（レポーター　霜島素子）


国に国境あり。音楽に国境なし。

世界の巨匠アイザック・スターンと日本の伝統楽器が、いま出逢った！

アイザック・スターン

日本の調べ

曲目：荒城の月 —滝廉太郎作曲　叱られて —弘田竜太郎作曲
砂山 —山田耕筰作曲　七つの子 —本居長世作曲
中国地方の子守歌 —山田耕筰作曲　さくらさくら —日本古謡
ずいずいずっころばし —わらべうた　今様 —日本古謡
千鳥の曲 —吉沢検校作曲　通りゃんせ —わらべうた
六段 —八橋検校作曲　全11曲

ヴァイオリン：アイザック・スターン
尺八：山本邦山
編曲/指揮：早川正昭　藤井凡大　内藤孝敏
日本音楽集団/日本合奏団
レコード——25AC 415 ● ¥2,500

カセット・テープも同時発売
26KC69 ● ¥2,600
（デュアド・クラシック）

CBS SONY 株式会社CBS・ソニー

# 世界を翔る琴の魅力!

●12月5日発売　世界で注目! アメリカでも発売が決定!!

## 琴/ヘンデル

**組曲・水上の音楽**
① Allegro　② Air
③ Bourrée
④ Hornpipe
⑤ Andante
⑥ Allegro Deciso

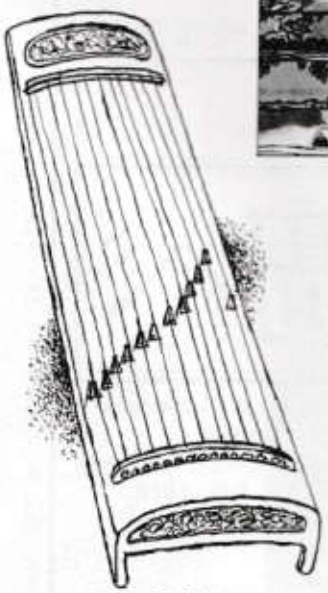
**組曲・王宮の花火の音楽**
① Overture
② Alla Siciliana
③ Bourrée
④ Menuetto

〈演奏〉琴ニュー・アンサンブル
〈プリマ〉鈴崎知子 〈第1琴〉森千恵子 〈第2琴〉吉村七重 〈第3琴〉花房はるえ
〈第4琴〉深海さとみ 〈17絃〉宮越圭子、木村玲子 〈指揮〉福村芳一 〈編曲〉角田主伊吾
●TA-72048 ￥2,300

●琴ならではのヴィヴァルディ「四季」の世界!

## 琴/ヴィヴァルディ「四季」春、夏、秋、冬

〈演奏〉琴ニュー・アンサンブル 〈指揮〉三石精一
〈プリマ〉鈴崎知子 〈第1琴〉中丸晴美 〈第2琴〉森千恵子
〈第3琴〉花房はるえ 〈第1,17絃琴〉沢井一恵 〈第2,17絃琴〉藤本エリ子
●TA-60060 ￥2,000



●琴で甦えるバッハの世界!

## 琴/セヴァスチャン・バッハ

●管弦楽組曲第2番ロ短調 BWV1067
●管弦楽組曲第3番ニ短調 BWV.1068

〈演奏〉琴ニュー・アンサンブル 〈指揮〉福村芳一
〈プリマ〉鈴崎知子 〈第1琴〉森千恵子 〈第2琴〉花房はるえ
〈第3琴〉吉村七重 〈第17絃琴〉速上早苗／飯吉圭子
●TA-72037 ￥2,300

●話題のレコード 軽快な合奏

## 琴/モーツァルト

セレナード ト長調
"アイネ・クライネ・ナハトムジーク"
交響曲第40番ト短調

〈演奏〉琴ニュー・アンサンブル 〈指揮〉福村芳一
〈プリマ〉鈴崎知子 〈第1琴〉花房はるえ／他
●TA-72042 ￥2,300

心への音楽
TOSHIBA EMI

東芝EMI㈱ 学芸部
東京都港区赤坂2-2-17 ☎03(585)1111代へ

# 日本音楽集団第五次海外公演を終えて

日本音楽集団第五次海外公演が終りました。

今回、中島と共に舞台や楽器の責任者をつとめ、海外公演初体験者として集団の海外での交渉や音楽作りを見てきた奈良の新鮮な目でレポートを書き、あわせて各地域毎の特徴ある印象を団員の有志に語り合ってもらいました。各種データは終りにまとめて掲載しました。

三年前、他の古典芸能団体と一緒に企画された、ある大手マネージャーのヨーロッパ演奏旅行計画が途中挫折、音楽監督三木稔がプロデュースを引き継ぎ、今回、国際交流基金の助成と、株式会社ジャパン・アーツのマネージメント協力を得て、約二カ月にわたる大演奏旅行が編成された（ジャパン・アーツは主にヨーロッパを担当し、カナダ、アメリカは一九七六年と同じくニューヨークのアジア・ソサエティが担当した）。

なお、当初全員揃って九月十日出発する予定であったが、ベルリンにおける日本東独経済交流記念式典（九月一日）への出演依頼があったため、別に三回のコンサートを東ドイツ国内において編成し、三橋、畦地、半田、太田、吉村、花房、宮越、高橋、奈良、久保の十名が八月二十九日先発した。

羽田の賑わいに較べると成田は閑散としていた。警戒厳重と宣伝されているため、見送り、出迎え、見学の人々が極端に少ないからであろう。海外旅行に発つ時のある種華やかさを想像していたのだが、この新しい国際空港は、これから初めて海外旅行を体験しようとする私に、そんな雰囲気を持たせてはくれなかった。

## アテネ

先発した十名と、後発の十六名は九月十一日アテネで合流した。（ドイツ民主共和国へは二度行ったので先発組の模様は、後程、「ドイツ編」としてまとめて報告する）。

我々は笑顔でお互いの無事を喜ぶのだが、実はそれぞれに一波乱あった。

先発組は、シリア、アラブ航空機のばかげた不手際で、ベルリンでさんざん待たされたあと、一度コペンハーゲンに北上して、再び南下してアテネに入ったわけだが、この間何と十数時間。後でアテネの日本大使館に招待されたとき、「シリア航空というのは、世界ワースト・スリーの航空会社だ、よく無事で」といわれ皆あ然。そういえば操縦もやくざだった。

一方後発の方はスイス航空の手違いで、直前に二日早く出発しなければならなくなった。私は先発で東ドイツにいたので、その間の事情に詳しくないが東京はてんやわんやであったそうだ。結局、どうしても調整のつかない杉浦、砂崎、西川の三名以外、長沢、三木、田村、宮田、坂田、坂井、野坂、田原、木村、尾崎、藤舎、堅田、中島の十三名は、九月八日に出発し、チューリッヒで一泊して十日にアテネに入った。

東京で大騒ぎしている時に、先発組は東独で熱っぽいコンサートを続け、逆に後発組がチューリッヒ、アテネで時ならぬ観光を楽しんでいる時、先発はとんでもない方へ連れていかれたりと、今こうしてならべて書いて見ると笑い話のような合流譚であった。

アテネのコンサートは、リカベタスの丘にある円形野外劇場で二夜連続予定されていた。コンサート第一夜は特異な会場の雰囲気にメンバーも興奮を覚えたのか、旅のはじまりとして文句ない成果をおさめ、その評価も想像以上であった。

翌日、朝から空模様がおかしい。昨夜適度に濡れた空気はさらに湿気を含み、黒い雲となって空をおおい始めた。リハーサルの段取りの関係で会場入りを二班にわけたが、先の組がホテルを出る頃にはひどい降りになっていた。しかし我々の元へは会場変更の情報もなく、観光局の担当者もホテルへ顔をあらわさなかった。難行のあげく一班が山上に着き、ホテルに残っているメンバーに電話を入れ、こちらの模様を伝えその後の情報を聞いたが、何の連絡もない。次の電話で、会場はオペラ劇場らしい（?）とのこと、とにかく待っているだけではらちがあかないので、オペラ劇場らしいという情報を確認するため、久保氏たちにオペラ劇場まで行ってもらい、山の上の我々は、いつ移動となってもいいように楽器の梱包

にかかった。結局、会場はオペラ劇場に変更、お客さんや報道関係には放送などでとっくにインフォメーションを流していたそうだが、肝腎の我々に何の連絡もないのだからまいった。迎えのバスが来たのは四時半過ぎ、トラックが来そうもないので、屋根に楽器を積み上げた。木片一本で重いケースを支え、曲りくねった山道を降りるのはハラハラものだった。とにかく、急ぎ街で買いこんだピザやパンを舞台の上でパクつき、何とか開演直前に準備完了という状態であったが、この日の演奏は今回の旅行でも上位に入るできの良さで我々スタッフを驚かせた。アクシデントがありながらそれによって普通なら滅入るところをエネルギーとしてしまう我がメンバーの強さにはただ敬服するばかりだ。

**三木**　このリカベタスの丘というのはですね。アクロポリスからだと正面に見えるところにあって、アクロポリスの下にあるヘロド・アティクスの代りに新しく作られた野外劇場なんです。

**宮田**　カンカン照りの下でリハーサルしたから、高校野球の会場みたいな感じでね。

**坂井**　三味線の皮が直射日光に当ったから、もう心配で心配で。

**三木**　リハーサルでは音が散っちゃってね、PAやらなきゃだめだと思いスピーカー用意してくれって言ったんですけど、何しろ彼らはすぐ事が運ばないラテン系の人たちだもんだから、結局ダメで、本番でも使わなかったんだけど。本番になって照明でパーっと舞台が区切られ、お客さんが入って、それで客席で聴くとね、PAなしでいい音なんですよ。これにはびっくりしましたね。それに、演奏者の方も集中してくるしね。こんなに変るものかと思うくらい。

**三橋**　ゲネプロの時は風が吹くと尺八が鳴らなくて、ピアニシモのロングトーンのときは、皆風下に顔向けて吹いて…。

**宮田**　うーん、田村さんにおこられちゃってね。

**三橋**　音が吹き飛んじゃうっていうの初めて、口から歌口にゆく間にもう飛んじゃう。

**宮田**　やっぱり外で吹くときは天蓋をかぶらなきゃだめなのだよ。（笑）

**坂井**　ほとんど満月でしたね。

**田村**　虫も気にならない程度に快く鳴いていたね。

**三橋**　待っている間、バリ島思い出した。

**三木**　夕方、海からの風が吹いてきてこれはまずいなと思ったんだけど、本番のときはピタッと収まったね。次の日の午後、観光局の総裁から昼食会に呼ばれて行ったら、その総裁がとっても感覚的に話のわかる人でね。口を極めて誉めてくれたんだけども、その誉め方が、我々が集団として狙っている通りで、それが大変うれしかった。要するに、ギリシアにも世界中にも民族楽器があるんだけども、それが皆フォルクロアに終ってしまっている。それを現代化しなきゃいけないんだけども、集団の場合はその唯一の成功例ではないかということ。それから、二十人という人数で、大オーケストラと同じような効果を上げている。この二つを、繰り返し繰り返しおっしゃっていた。それで、いい気になっていたら、外が雨になって、大変なことになったんですね。

**三橋**　何しろあの時、一時半にロビーに集合したら、急に雨足が早くなってきたんです。リカベタスの山に登る道が濁流になっちゃって、我々のバスが登れない。途中に放置してあった車を、ズブ濡れになって持ち上げたりしながら、やっと山上に行ったら、劇場のあたりがもう一面海なんですね。何しろ、楽器ケースに前の晩カバーなんか被さないまま野外だったし、楽屋には着物を床の上に置いて乾かしたままだったんで心配だったんですけど。辛うじて大丈夫だった。それで、この野外劇場では本番はできないだろうと、一体どうなることかと……。

久保さんのあの話は傑作でしたね。招聘先に、今晩のコンサート野外劇場ではできないからどうしたらいいかって聞いたら、相当の人がいないから明日電話してくれって。（笑）

**三木**　それで、今晩コンサートで、明日は朝六時に出発だって言ったら、朝の六時五分前に電話してくれだって。

**田村**　ああいう騒動起きた場合には決断下すのってむずかしいでしょうね。三木さんなんか大変だと思うけど。

**三橋**　今回の演奏旅行ではあれが唯一の事件。

**坂井**　演奏会ギリギリまでやきもきしたのは、アテネぐらいでしたね。

**三木**　旅のはじめに起っちゃったからね。だからその後は皆気持ちが引き締まっちゃった。しかも変更された会場のオペラハウスが、最高に音響がよく、ひょっとしたら演奏はあの晩が一番良かったんではないかしら。

**吉村**　乗ってましたね。

**三橋**　貸、パニックが好きなんですよ。（笑）

**田村**　急遽会場が変わったからお客さんがどのくらい入るか心配だったけど。

**坂井**　そう、よく集まったですね。会場が変らなければ、もっとお客さんが来たかもしれませんね。

**田村**　大使の夫人が言ってましたね、初日の演奏聴いて評判がよくて、二日目はお客さんが沢山になるんじゃないかって。

**吉村**　初日のお客さんはすごかったですね。感激した人が色々話しかけてきたり。

**三木**　そう、野外劇場の袖で、皆動けなかった。

**宮田**　外人の演奏家が来ると日本人は

お行儀がいいって言うけど、やっぱりずいぶん外人の客は積極的だね。

# ロンドン

拍手が鳴り止まなかった。

演奏者は退場し、照明も消えたのに拍手が鳴り止まなかった。その場を動こうともせず、暗い中で千人の手が動いていた。

クィーン・エリザベス・ホールはテームズ河畔にある。ウォータールー橋を渡った左側、我々のコンサートには最適の中ホールである。ヨーロッパはどこへ行ってもホールの具合は良いが、ここの音響のよさは中でも特筆に値いする。音響のよいホールは演奏者に負担をかけず、聴く者を疲れさせない。

この日のコンサートはBBC放送が中継録音し、ラジオ放送される。リハーサルから熱心に聴き、万全の調整を行なっていた担当ディレクター氏は、我々の音楽に非常な興味を持ったようで、本番を録り終えた時には興奮したおもむきで素晴しさをほめた。特に野坂のソロには大変な感激で、この日限りを大いに惜しみ、是非また録音したいと希望した。この話はどうも話だけで終わりそうもなく、あの熱心なディレクター氏の様子では、近い将来野坂はBBCのためにロンドンへ行くことになるかも知れない。

このところ、日本人のコンサートにはほとんど客が入っていないと聞かされ、どれだけ動員できるか不安であった。リハーサルを終えて食事にでたとき、となりのロイヤル・フェスティバル・ホールの「フランク・シナトラ・ショー」に続続とつめかけるお客さんを見てなおさら悲観的になったが、いざふたをあけて見ると、どんどん売れる当日券も含めて、客席が埋まっていくさまは驚きであった。

プログラムの第一曲目は「新八千代獅子」。ざわつく場内に緊張を促すように、暗い舞台から締太鼓の音が一つ、二つ。スポットライトが淡く奏者を照し出す。ゆっくりと間をおいて登場する演奏者。燃えあがる祭の前の儀式だ。私は舞台に一番近い扉の隙から客席を盗み見ていた。舞台からのあかりで聴衆の真剣な目つきがわかる。一曲ごとに盛んな拍手。そして最後には、演奏者の動きにつれほとんどの聴衆の体が動いていた。予定の、二曲のアンコールも演奏しおわり、照明も消したのに一人も席を立たず、鳴り続ける拍手に涙が出そうな感動を覚えたのは私だけであるまい。

ロンドンの印象は、メンバーの誰もが「素晴しい聴衆」に尽きるようだ。

**三木**　それでロンドンへ行きまして。

**宮田**　誰もどろぼうに合わなかったね。

**三木**　よかったですね。ニューヨーク、ロンドンていうのは最悪なんですよ。

**宮田**　ロンドンについたとき皆引き締まりましたね。

**三木**　それはもう、ロンドンは危ない危ないってしょっちゅう言っていたから。だけど言った本人がね。（笑）公衆電話をかけているところで十万円くらい入っている財布置いてきちゃってね。十分ぐらい後で気がついたんだけど、もうありませんよって言われて。ところが感激したんですよ、皆がたくさんカンパをしてくれたわけ、僕に。

**三穂**　もうかったでしょ。

**田村**　藤舎君あたりが発起人じゃなかったかな。

**三木**　あー、そう。びっくりしたなあ、本当に涙が出たよ。

**吉村**　それで三木さんがロンドンで演奏会の前の日ポスター見て大心配して。

**宮田**　ああいうところはやっぱり残念だね。

**三木**　この前のニューヨークは浮世絵で、今度は三河万歳風の。

**宮田**　それも、ロンドンで日本人の画家に頼んだっていうんだからね。

**一同**　ヘェーッ。

**三木**　結局、日本人の手にかかると全部おかしくなっちゃう。それで、動員とか色々心配したんだけど、当日行ってびっくりしましたね。表に行ったら当日売にお客がすごく並んじゃっているんだ。

**宮田**　それに、いいホールだった、最高のホールだった。

**吉村**　「華やぎ」終ったらブラボーって声がかかりましたね。

**三木**　そう、奈良君なんか横で聞いていて〝やった！〟って言うんだよ。前半じっくり聴いていた人たちが、それを契機に気持がほぐれたんでしょうね。トリの曲ではグワーときたね。

**宮田**　我々が暗譜をしているということも、聴衆を燃えさせることになるね。

**田村**　どこかで、ミュージック・スタンド（譜面台）がいらないってびっくりしていたね。

**宮田**　そう、全曲通じて譜面台がいらないっていうのは、お客にとってずい分気持ちのいいもんだよ。

**三木**　「巨火」の終りの方になると演奏者の体が揺れてくるんだ。作曲者冥利に尽きますね。全員がそれぞれ違う動きなんだけど、その動きが舞台の中ですごくコントロールされていて、あんなに動く演奏っていうのは邦楽はもちろん洋楽の中なんかにも絶対ありえないことですね。自分で演奏しているとわからないと思うけど、本当に感動的に体が動きますね。

**田村**　それは僕らも言われましたよ。

ロンドンの演奏会のためにわざわざベルギーから来たヴァンオスさん（注・七二年のヨーロッパ公演でお世話になった方）と後でパーティでいっしょになってね、開口一番そう言われましたね。〝すばらしかった。皆さんが「巨火」のときの揺れるのがとってもすばらしかったわ、皆さん腕上げられましたね〟って。

**三木**　六年前は古典の曲をやるときに、各楽器別のものをやったでしょ。あれが、ちょっと散漫になるきらいがあったけど、今度は八千代獅子に統一されているもんだから、出の演出もうまくいった。全体の流れがすばらしい、っていうことを言われましたね。方々で。やはり洋楽のオーケストラにはないような何かリチュアルなものがあったはずなんだ。

**田村**　ロンドンがピークだったでしょ。終ったときに楽屋に戻ってきて、皆紅潮した顔で、一人ずつ握手したり肩叩いたり、あれは感動しましたね。

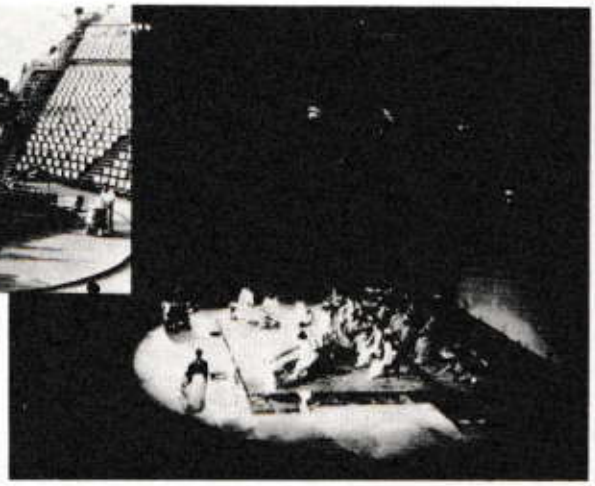
**坂井**　えー、私もそう思った。その前の晩、三木さんが心配していらしたでしょ。終って三木さんに本当におめでとうって、あれは忘れられないわね。

## スイス

今回の演奏旅行の公演地の一つとして計画がすすめられていたポーランドは、「ワルシャワの秋音楽祭」出演の話しまでほぼ決っていながら、一ケ月前に突然中止となった。そのため空白となった日程を、ロンドン滞在延期と、東独入国を早めること、そしてその間をスイス航空が通過するスイスで過すことになった。何分急なことで、代替としては、ルツェルンで着物ショーをするグループといっしょに、滞在費稼ぎにカジノに出演することが精一杯だった。

チューリッヒで二泊。鉄道移動には重いトランクは面倒と、ホテルの一部屋を荷物室に借り、必要最少限の荷物だけを持ってルツェルンに移動した。美しい町の最高級ホテルに到着した時は、少々場違いな気がしつつも幸福感に身を包んだ。出演料代りにホテル代がうんと安くなっていることで安心していたのだ。

翌朝、長沢、砂崎、奈良の三人は、着物ショーのメンバーと市庁へ表敬訪問に出かけた。ところが着物ショーの人たちの態度は少ゃおかしく、あいさつというより抗議が始まった。「世界民族衣装祭」（というふれこみらしい）に参加してきたのに、その会場が博奕場（カジノのこと）とは何事か、しかるべきホールを用



▶アテネ，リカベタス野外劇場での公演（9月12日）
▲同，リハーサル風景

▲ロンドン，クィーン・エリザベス・ホール公演（9月15日）のための問題のポスター

▶ルーマニア，クルージュ音楽祭当日

▼同，カーサ・ユニバシタリロンで花束を受ける田村

意しろ、そして「世界民族衣装祭」の資料を見せろというのである。市長が不在で、かわって応対に出た助役氏は困りはてた顔つきで、カジノは高級社交場であり、決して品の悪いところではないのだ、と説明していたがらちがあかない。午後、我々は夜の二回の本番のためリハーサルを始めたが、着物側は姿を見せなかった。ロンドン公演以来五日ぶりの本番に、我がメンバーはリハーサルに熱を入れるのだが、その間にカジノなんかではできないという着物側に、カジノの支配人は態度を硬化し、我々の演奏だけはやりましょう、との提案も聞き入れられず中止が決定してしまった。我々は着物側に対し、厳しく抗議し、着物側のとった態度が決して正義でないことを責めた。今更どうすることもできなかったが、ずさんな計画で海外に出かける文化団体の何と多いことかという感想を強くもった。彼らもまた被害者であったとしても、安易に、しかも文化使節面して海外に出かけるのはよした方がよい。ふり返って、我が邦楽界にはこうした愚行はあるまいかと考えもした。ともかく、苦い事件に関わってしまったルツェルンであった。

その苦さをきれいに払ってくれたのは、インターラーケン地方の空の青さであった。スイス滞在が決まったときから、三木は、たとえ自費であっても、邦楽をする人たちに必須の体験として、インターラーケンを決めていた。アルプスの基地インターラーケンは、どこを写真におさめても〝絵葉書〟になりそうだ。登山電車で、ユングフラウ・ヨッホまで登り、観光を楽しんだ。そこかしこに咲く草花、氷河の圧巻、切り立つアイガーの壁、「サウンド・オブ・ミュージック」は、こんな自然の中での物語だったろうか、〝まるでスイスみたいだ〟という堅田の冗談が皆を笑わせた。私事ながら、標高三四五四メートルで傘をさし、記念撮影したことは、旅行中一番楽しい想い出だ。

## 東独

八月三十日から九月十日までの東独滞在は極めて印象的であった。そして九月二十三日より十月六日までを再びこの国で過すことにより、この時抱いた好感が倍になって心に残るのである。

まず、ドイツ側のスタッフに恵まれたことがなによりであった。頭の切れるブレイム氏（招聘元クンストラ・アゲンツーアの随行員）と、チャーミングな通訳シロウさん（フンボルト大学の日本学科で学ぶ学生であるが、残念ながら？すでに一児の母）は、二度とも我々についてくれ、運転手は違ったが、専用のバスとトラックも用意されていて、特に一回目の時の二人の運転手（それが二人ともウーリーという名で、顔つきも似ていてまさに〝ウリ二つ〟であった）は、こわれた楽器ケースの修理までしてくれた。

先発は、そのきっかけとなった、ベルリンのドイツ民主共和国宮殿における、日本東独経済交流記念式典出演のほか、ブラウエン、ライプチッヒ、デッサウの各都市で演奏会を持った。ライプチッヒのコンサートは、印象に残ったコンサートの第一位にあげるメンバーもいる程、感激的であり実際〝成功〟であった。合流してからの公演地は、ライプチッヒ、マグデブルグ、エルフルト、ベルリン（二夜連続）であり、ライプチッヒがだぶっている。ライプチッヒは当初予定になく、ベルリンでのテレビ出演（スタジオ録画）と共に、旅行中に追加されたものである。一回目のライプチッヒ公演に顔を見せた、ゲバントハウス・オーケストラの面々と総裁ツンペ氏、指揮者マズア氏は、我々の音楽を高く評価し、二回目に来るときに、ゲバントハウス・オーケストラの百人のメンバーとその家族三百人のために、コンサートを作ろうではないか、と提案し、〝我々は最高の聴衆だ〟と付け加えた。しかし、次におとずれるまでに二十日ほどしかないことや、ツンペ氏の手帳（それにはライプチッヒでの全コンサートの予定が書いてある）によると、その時期空いているホールはないとのこと是非にと願っても期待はあまりしなかった。しかし、再びドイツを訪れると、九月二十五日に、工業高校のホールでのコンサートが編成されており、その組織力に驚き感謝した。先発のときは、旧市庁舎にある博物館のような会場で熱い演奏をした我々は、今度は、足を踏みならして拍手する「最高の聴衆」に会うことができた。その夜、ゲーチをはじめ、ドイツの名だたる芸術家が訪れたという酒場で、ゲバントハウスのメンバーと交歓した。彼等の友情に深く感謝すると共に、こうして得た連帯を明日の音楽に結びつけたいものだ。（実はニュースがあり、一九八一年ゲバントハウス・オーケストラは創立二百年を迎え、現在建設中の新本拠地の落成も兼ねて、大々的な記念行事が行われるのだが、その時、ゲバントハウス・オケが初演するために、三木は作曲を依頼されたのだ）

ベルリンでは、四回の演奏チャンスがあった。先発の日本東独経済交流記念式典では、「新八千代獅子」を演奏したが、ピアノのアンネローザ・シュミット、テナーのペーター・シュライヤー、ライプチッヒ聖トーマス教会合唱団、バスバリトンのテオ・アダム、指揮の小林研一郎、ソプラノの東敦子、ヴァイオリンの石川静と豪華な出演者の中で、最も長い二十

分の持ち時間を与えられた。九番目に出演した日本音楽集団の若いメンバーたちは堂々としていた。しかも締太鼓を中心に広がった形は羽を広げた鶴であり、たっぷりした演奏とあいまって実に美しい舞台であった。実演である以上、聴覚と同じに視覚にも訴える舞台が心掛けられねばならず、今旅行中すべてにわたって（もちろん国内でも常にそうだが）成功だったと思える。

テレビ出演もまた、ライプチッヒと同様こちらに来てから決まった仕事で、エルフルト公演の翌日、ベルリン音楽祭の前日十月三日に行われた。わざわざエルフルトまで来てコンサートの模様を研究した女性の構成者と男性ディレクターは、たった半日で「巨火」と「ファンタスマゴリア」を見事な画面に作りあげた。スイッチャーの勘のよさには、副調で指示に当った三木も舌を巻いたと話していた。

ベルリン音楽祭は十月四日、五日と二夜連続のコンサートだったが、それぞれ聴衆の感じが違ったのは面白い。四日は招待客が多かったせいか、質の高い演奏にもかかわらず、客席の盛り上りはもう一つという感じだった。それに比べると一般入場者の多かった五日は、熱気があった。聴衆の反応はすぐ演奏者に影響する。ロンドンが良い例で、良い作品と良い演奏と良い聴衆が揃った時がコンサートの成功といえる。丸いドーム状のホールは（プラネタリウムを思い出す）音響もよく、東独最後のコンサートを納得できる成果で終えることができた。

先発から数えると二十五日間をこの国で過した。その間つききりでお世話してくれた通訳のシロウさん、九月二十八日カール・マルクス・シュタットで別れてしまったが、円滑にコンサートが行われるよう努力してくれたプレイム氏、バス、トラックの運転手さん、ゲバントハウスのツンペ氏、マズア氏、オーケストラの友人たち、ブラウエンの善良な人々、ライプチッヒの熱い聴衆、ありがとう。

**三木**　今度の旅ではロンドンも良かったし、カーネギーも良かったし、他の所も……。しかし、別の意味で一番心暖まる旅であった東独（ドイツ民主共和国＝DDR）のことを話しましょう。

**三橋**　先乗りで四回やった中でも、ライプチッヒが一番聴衆のレベルが高かったと思います。何しろ、音楽を自分から聴いて理解しようと突っ込んでくる気迫を、あれだけ聴衆から受けたっていうことは、本当に初めてといってもいいくらいでした。

**吉村**　市庁舎の中の一室だったんですが、三百ぐらいの椅子が平面に置いてあって、両脇にもお客さんがびっしり立っていたんですね。それで一曲終るごとに後の方の人が伸び上ってみて、うなずいて。舞台と同じ平面なので押されてこう来るという感じで……。

**畦地**　デッサウもやはりいい聴衆でしたね、バウハウスのあるところだから、ちょっと変ったデザインの、丸と四角だけでできているような建物だったけど。

**三橋**　人数に対する拍手の量っていうのはデッサウが一番でしたね。アンコールもすごかったし。

**宮田**　後からライプチッヒに行った時、変な通ぶった客でなくて、音楽に詳しい客でありながら一番素朴に受け取ってくれたね。

**三橋**　そうですね、後から行ったときはゲバントハウスのオケのメンバーが全部聴きに来ていて……。大体、ゲバントハウス・オケの人が一しょに観光をしてくれたというのは、外国のミュージシャンとしてそうあることではないでしょう。

**三木**　ドイツ人というのは、東も西もすごく人間ぽいんですよ。特にライプチッヒは親密でしたね。

**宮田**　人情っていうものを本当に感じたねえ。シロウさんは別れ際にオイオイ泣くし。

**三木**　エルベ川の東っていうのは荒涼たる地帯でね、東独へ行った人が、もうあの寂莫さに参るよっていう話しばかり聞いていて、実際に九月でも寒い日があってね。しかし人間は全然暖かいんだ。

これは久保さんとも話したんだけど、東も西もヨーロッパでゲルマンが指導権を握っちゃったね。西はご存知の通りだけど、東の中での今の東独の地位っていうのは大変なもの。やっぱりその行動力、企画力、特に音楽面では秀れているんだが、そういうのをいやっていうほど見せつけられた。先方も日本と仲良くしたいっていう気持が大変強いようですね。

**三橋**　ゲバントハウスから三木さんが委嘱されましたね。

**三木**　びっくりしましたね。あれなんかも。あの時、田村さんと坂井さんが横にいてね、「OKしなさいよ、今すぐ」って言うもんだから、あーそうか、じゃあって、'sicher'なんて言ったんだけど。

**三橋**　感覚的に日本人とドイツ人ていうのは似ていますね。随行のプレームさんにしても、日本人と似た感性を持っていて、会話しなくても何考えているかすぐわかっちゃう。

**吉村**　そうね、ラテン系の人など最低の常識が全然違うわけですよね。

**三橋**　それからプレームさんの話しに驚いちゃった。あっちでは四LDKの家借りて一ヶ月家賃が二万円で、夫婦二人で吸うたばこが一ヶ月に六万円だって言うのは、本当にどうなっちゃっているんでしょうね。

**坂井**　必需品はものすごく安いけど、ちょっとぜいたくなものはすごく高かったでしょ。

**宮田**　それからすると音楽会の切符なんかは必需品なんですね。あれは二百円とか三百円とかですごく安いんだよ。

**坂井**　だから私、日本で思うんですけ

どね。国立劇場は日本の色んな音楽とか芸術を守っていくために建てたはずなのに入場料がものすごく高くて、出演料がものすごく安いのよね。だからそれは反対にならなくちゃ、保存してゆくことはできないのよ。やっぱり、聞きに来てくれる人がいなければ絶対に続いてゆかないわけでしょ。

三木　そうねェ、ほんとですよ。ベルリンでは切符が二日間で売り切れた。好きな人ならみんな買えるんだもんね。

宮田　憎いねェー、東京でいつそうなるだろう。

田村　それとドイツの調査力もすごかったね。例えば我々は東独は初めてだから、我々のことは全然知らないと思うでしょ。だけど我々が七二年に西ベルリンでやった時の評判とか、プログラムも全部そろっているしね。アゲンツーアではそういう調べが全部ついているわけ。

三木　そのあと、ルーマニアに着いたら、東独では大変な評判だったそうですねって、もう情報が入って来ていますって言っていた。

## ルーマニア

ブカレスト、クルージュ、サツマーレ、オラディアと四回のコンサートを持ち、ブカレストのラジオ・ホールの模様はテレビ中継された。日本に来たことのある「少年少女合唱団」(彼らは日本語でそういった)は、コンサートの終わったあと、バスの周りで「今日の日はさようなら」を歌ってくれた。ルーマニア人は、ギリシャ人と同じラテン系で、空港に着いて楽器の運搬に関して、アテネの雨の一件のようなことがあり、これからの仕事に少なからず不安をもっていたのだが、彼等の歌声はそんな気持をなごませてくれたし、四回のコンサートはどれも成功で、例えば「ダンス・コンセルタント」の二楽章〈水巡る〉で必ず拍手が来るなど、聴衆の反応は私の想像をこえた。どこの会場にもいた兵隊と、あまり味のよくない食事に不満なはかは、聞かされていた程悪い印象がないのは、やはり熱心な聴衆のおかげだろう。

今回の演奏旅行では三つのアンコール曲を用意し、毎回二曲を演奏した。「江戸子守唄」は毎回、「バッハ＝ロンド」はルーマニアを除く各地で、ルーマニアではルーマニア民謡「Pe Invor, Pe Invopas」を演奏した。アンコールはメインディッシュに続くデザートのようなもので、選曲にはそれなり苦労する。ドイツでバッハは大正解で、何も言わずに演奏を始めても最初のフレーズでどっと拍手が湧きおこり、和楽器で演る意外な響きが余程楽しいのか実ににこやかに聴いてくれ、終わった時には盛んに拍手してくれた。ロンドンもまたしかりで、その他の公演地でも和楽器のバッハは大いにうけた。ルーマニアの民謡はもちろん喜ばれたが、民謡は同じ国でも地方によって色々だし多民族であればなおさら選曲はむずかしい。余談だが、サツマーレは殆んどハンガリー系で、舞台で働く人はハンガリー語を話し、通訳のイナ嬢でさえ彼等の話していることは全然わからないという程だ。幸い我々の選んだ「Pe Invor, Pe Invopas」は大使館に相談して決めたこともあって、どの町でもうけた(ついでながら田村の踊りも大いにうけたことを報告しておこう。)日本情緒たっぷりの「江戸子守唄」に続きバッハや土地の民謡を演奏することは、聴衆に対するお世辞でなく感謝であり、まちがいのない選曲によるこの三曲は、我々のそうした気持を伝える忠実な使者であった。

ルーマニア最後の公演地オラディアからは鉄道でチェコ・スロバキヤのブラチスラバまで移動するのだが、ハンガリーを通過するこの間の楽器輸送には出発前から頭を痛めていた。八三〇キロ、二十一個の楽器ケースを列車に乗せることは無理だし、貨車を使った場合ハンガリー国内で一泊となりブラチスラバのコンサートに間に合わない。結局トラック輸送を選ぶのだが、運転手まかせでは心配なので中島に同乗してもらうことにした。前の晩握ったおにぎり三つと何かあったときのための二百ドルを渡し、無事に到着することを祈って我々は列車に乗った。

これまでに十七回の本番を終え、先発は四十四日、後発でも三十二日がたった。後二週間、もう一度心を引き締めて、一層の燃えあがりをみせよう。

三木　ゲルマンの国からラテンに移ったわけですよ。で、どこもお客は一杯だったわけだけども、やはり組織力の点で、差をまざまざと見せつけられたですね。ルーマニアは地震があったり、大水害があったりして、今、たいへん不幸な時期にあるんですが。三日連続乗り打ちなんかあって、一番強行軍だったね。

吉村　クルージュに行くのに、八時間か九時間かかったわね。

三木　でも途中、シビウっていう町で一休みしたでしょう。あそこの一角にあった中世の街並、ビックリしたね。その色の具合とか、屋根の流れ具合とか、両目をかいたような屋根裏部屋の窓とか、ハッとするような未知の美しさに会って今も忘れられないね。とにかく、今回の旅中一番田舎に行ったわけで、ブカレストとトランシルバニア地方とは人種が全く違う。特に最後のハンガリー国境のあたりではルーマニア語が通じないんだものね。

三橋　アンコールのときは一番それを

感じましたね。

吉村　それで、サッマーレで畦地君がエレベーターに閉じ込められて……。

三木　彼、本当にアゼッちゃった。(笑)

畦地　ボタン押した階に止まるんだけど、ドアが開かないんだよね、どこの階押しても。

三橋　全部フロアーとずれて止まってたんだね。

畦地　それで、一しょに乗っていたルーマニア人と、ドアをドンドン叩いたり、大声で叫んだりすること三十分。僕は本番の直前だったもんであわてて……。ドアのすき間から皆に手紙書こうと思ったんだけど。

宮田　楽屋に彼が飛びこんできて、あせって「手紙出そうと思ったんだけど……」って一しょうけんめい説明するんだけど、話しが通じないの。それで、こっちはわけわからないから「手紙出すんならちゃんと切手張らなきゃ」とか、からかっていたわけ。(笑)

三木　三十分も閉じ込められていればパニックになるね。

畦地　七時に乗って、本番は八時から、僕は最初の八千代獅子に出るから、もうダメかと思った。

三橋　後でエレベーターの扉みたらこじ開けた跡がいっぱいついていて、しょっちゅう閉じ込められるみたいだったね。

吉村　それからルーマニアでは商社マンのことがありますね。

三木　あ、あれはサッマーレね。あれは何ていうか、同情を禁じ得なかったね。商社マンが二人単身赴任で来ていてもう四ヶ月もいるんだって。遊ぶこともままならずで、テニスばかりしている。その二人が二人で三部屋借りて一部屋を日本人クラブにしちゃって。あのマージャンのパイが置いてあるのを見て、哀れになっちゃったね。二人しかいないのに。

三橋　何しろあの地方に日本人が二人しかいないんですって。バレーボールチームが前に四百キロも離れた町に来たとき、日本人としゃべれると思って喜んで応援に行ったのに、ソッ気なくあしらわれたんだって。今度もいっしょうけんめい一番前の席に陣どって目立つようにしていたんだって。(笑)

吉村　日本人が来たから、誘ったら遊びに来てくれるかもしれないって飲み物や食べ物を用意してお部屋きれいにして待っていたんですって。太田ちゃんたち

※Photo: Bubara Stroff

◀先発者手組によるライプチッヒ公演（旧市庁舎，9月5日）※

◀ゲバントハウスの本部に招かれて（9月4日），長沢（右から6人目）のとなりがツンペ総裁※

▼ライプチッヒ公演後，ゲーテやシューマンがひいきにしていた古いレストランでゲバントハウス・オケのメンバーと交歓会※

▼東独，ベルリンのコングレス・ハレで（10月4日）

▶スイスでの休日

が街で会ったらしいんだけど、「すごく慣れ慣れしい変な人がいる」って言って帰ってきた。

**三木**　次の日が一番厳しい日で、二時過ぎまで心やさしい五人の団員が話相手になってあげるのが精一杯だったね。マージャンもしてあげたかったんだけど。

**吉村**　次の日は朝早く起きて大移動する日だったんですね。

**三木**　その後又、オラディアがあって、それからチェコへ行くのにハンガリーを通過しなければならなかった。そこでオリエント急行に乗ったんだけど、これも大パニックで。

**吉村**　税関検査の終った部屋で立ちんぼで待っていたんだけど、一応決まっている発車時間を三十分過ぎても来ない。本当に来るのかどうかちっともわからない。そしたら突然来たというんでワァーッと行ったんだけど、どの車輌に乗るんだかわからなくて。

**三木**　切符見ても、どれが車輌ナンバーなのかわかんないわけよ。駅員もわかんない。適当に乗ろうと思っても、たいていの車輌は超満員。しかもホームはレールと同じ高さだし。

**吉村**　で、皆重い荷物三つも持って、右往左往。ホームらしきものがこれまた少ししかなくて、あとは石コロだから大変でしたね。

**坂井**　前の晩に女性団員総出で夜通しでおにぎり作って。坂田さんがあれこれと料理方法を指示して卵焼きを作ったり、色々味見したり、坂田コック長の部屋ッィンだったけど、もうゴッタ返し。男の人たちは東独からよくやってたようね。

**田村**　あれは三木さんの思いつきでね、そろそろ日本食が恋しくなったから自炊したらどうかって、鍋、湯沸し、ヒーターとか、お皿、おわんなどを買い込んでトランクもうひとつ買ってきて、その中に一式入れていつでも煮炊きできるようにして歩いてたんですよね。あれ良かったなあ、お米が大体買えたし。

**三木**　長い旅の中でちょっとしたアクセントというか、気分転換になったと思うんですよ。自由圏ではあんな事する必要なかったんだけど。それに坂田君がそういう時に労をいとわず献身的な人であるのを発見したのが嬉しくてね。どんどん乗っちゃった。まあ、そういう生活の知恵みたいなものうまくなって、手数のかからない団体になりましたね。

**坂井**　そうねェ、一回目のときに比べたら旅がうまくなりましたね。

## チェコスロバキア

中島のことが気になりながら、一行はオラディアから、バルト・オリエント特急に乗る。ハンガリーを横切りチェコに入るのだ。前の日、遅くまでかかって作ったおにぎりと卵やきが配られる。六人ずつの箱になった客室は、なごやかな家庭となった。八時間の汽車の旅は、五十九日間世界一周の中で、最も旅情を感じさせるものであったかも知れない。

ところで中島のその後だが、翌日午前八時にホテルに到着した彼は赤い顔をしてくさい息をはいた。済んでしまえば笑い話でも実は真っ青という事が多いもので彼の話はまさにそうだった。我々が列車に乗ったあと、彼はオラディアのホールでトラックを待っていたのだが、約束の時間が来ても仲々来ないので相当不安になったらしい。やっと来たトラックに楽器を積み込むと、トラックの運転手が、お前は乗せないと言うのだそうだ。中島は文字通り真っ青になったそうだが、その時の彼の気持ちは容易に想像できる。言葉が通じないながら必死に掛けあったそうで、この時の彼の姿も容易に想像できる。最後の手段と百ドル紙幣を手渡すとまさにコロッと態度が変わったそうだ。まったく百八十度の様がわりにさすがの中島も仰天したと話していた。それからはもう盛んに気を使ってくれたそうで、ハンガリーのビールは美味いと言うと買い込んできて飲めや飲めやで大騒ぎ。道中の間ビールを飲まされ続けて、朝ホテルについた時には真っ赤な顔をしていたというわけだ。とにかく無事でよかった。

プラチスラバでは、日本に来たことはないが、日本語の達者なキャロル・クチカさんが世話をしてくれた。彼は、乗馬を得意とする貴族だ。プラチスラバのコンサートは、ラジオ・ホールで行われ、テレビ中継された。客席は狭く、公開録画という感じであったが、まさにあふれんばかりとなり、ほとんどが立ち見で、会場は人いきれでムンムンした。リハーサル時、会場は鳴りすぎてしまいまとまりのないことを心配したが、これだけ客が入ってくれたおかげで、本番では少し落ち着いた。この夜もまたコンサートは素晴しく、例の貴族青年は、並んで座った長沢や三木にその感激を伝え、こういう曲をもっと書いてくれとしきりに言った。

**三木**　チェコはプラチスラバだけで二、三日しかいませんでしたね。前に行ったプラハ、ブルノと比べると、はるかに西欧的な街でしたね。クチカさんというかっこいい青年がいましたね。

**坂井**　そう、太宰治を訳したとか。

**田村**　私の前では、日本語わかりますよ、隠し事できませんよって。

**三木**　彼はすごい貴公子だったね。週に二日だけプラチスラバのミカエル門の

ところに住んでいて、後は都会はいやだと言って田舎で馬に乗っているんだって。名刺見ると、ホームとレジデンスと書いてある。

**三橋**　共産圏でああいう生活っであり得るのか、すごく不思議でしたね。

**田村**　六年前の悲惨な感じと全然イメージがちがいましたね。

**坂井**　服装もずっと今度の方が良くなっていましたね。

**三橋**　僕たちはホテルの隣でやっているサーカスをみました。

**吉村**　そのサーカスが、セッティングから片づけるのまで見せる要素があって、例えばステージの砂が乱れるでしょ、そうすると何人か出て来てね、何始めるかと思ったら、ワルツで箒でこう掃くの。

**三橋**　それがとってもいい。スポット当ててね。猛獣が出てくる時檻をステージ一杯に丸く作るでしょ、それをはずす時の手ぎわの良さ！

**吉村**　やっぱり我々も、舞台で何をするにしても全部見られているという意識は絶対に必要だなと思いました。

**三橋**　そうそう、奈良君連れてゆけば良かった。

**三木**　プラチスラバは今年の音楽祭の重要な催し物だったそうだけど、ホールが狭いので、生を聞きたい人たちが切符をとるのに苦労したらしいんだ。当日無理して入りたい人たちと入口でいざこざがあって、結局定員の倍近く入れることになったらしい。これが夜中の演奏会で、十時から始まったんだよね。

**吉村**　ものすごく音の悪い所で、ゲネプロの時はどうなることかと思ったんだけど、お客が入ったらそうでもなかった。

**坂井**　日本のホールだと音響板で囲ってあるのに、向うはパーッと開けっ広げで……。

**三木**　それが良いんですよ。

## カナダ・アメリカ

十月十四日、またしても早朝プラチスラバを発ち、バスでウィーンに入り、そこからトロントに飛んだ。

カナダ・アメリカはアジア・ソサエティの協力で四回のコンサートと、三回のレクチャー・コンサートが持たれる。そのうちのカナダ（トロント）公演は、パキスタン人のサビ氏のマネジメントであった。彼は、インドやパキスタン等からアーチストを連れてくるいわゆる呼び屋である。日本からは初めてだそうだ。彼は、殆んど毎日、新聞に広告をのせ動員をはかったが、国内でもそうであるように、こうした動員方法はあまり功を奏さず、六割の入りで彼は赤字を背負うはめになった。トロントの土地柄からすれば、日本に関係ある大学とか団体に対する呼びかけが、必要だったかもしれない。彼は私たちのやることを〝ジョー〟としてとらえていたようで、始まる前に随行のラニーさんに司会をさせるなど、コンサートの運び方が我々とくい違ったが、我我の音楽を聞いた彼は、〝ビューティフル〟と〝エキサイティング〟の二つの言葉を連発した。そして、インドかパキスタン、セイロンでの公演をしないかともちかけた。赤字ではあったが良い仕事だったと喜んだ彼から、帰国後早速手紙が来ている。

十六日はナイアガラまでかけ、スイスに続く二度目の観光を楽しんだ。ナイアガラの滝つぼにおりると、黒い雨合羽と長靴を貸してくれるのだが、相手の姿を見て「ペンギンだ」とお互に笑いあった。その時の写真をみると今でも吹き出してしまうが、我がメンバーの童心を持ち合せた善良さは、今回の旅行中常に笑いと感動をもたらした。素晴しき日本音楽集団と私が言えば、手前味噌だろうか。カナダ、アメリカでは、アジア・ソサエティの協力にもかかわらず、輸送関係で段取りのまずいところがあり、円滑にことが運ばないことが多かった。楽器運搬のトラックの手配の悪さが一番目立ち、シカゴではラニーさんがレンタカーを自ら運転する羽目になった程だ。お人好な彼に面と向って怒れず、苦笑いするくせがついてしまった。

ニューヨークでは、先ず、ノンサッチ・レコードの録音。A面は歌舞伎長唄集、B面は尺八、箏、琵琶、笛と打楽器。国内でも特に地方では集団のレコードが手に入りにくく、ファンにはいつも迷惑をかけるのだが、ましてや外国では二年前のノンサッチの古典物だけ。といって、日本から持って行くには負担がかかる。各コンサートで必ずその演奏曲目のレコードが欲しいという人がいて、そんな時淋しい思いをするが、こうした旅行の最中に、オリジナル作品のレコーディングができれば最高だ。ノンサッチは古典が中心だが、今回初めて、「華やぎ」と「颯踏（二部）」が加えられてよかった。

十月二十日、カーネギー・ホールへは続々と聴衆がつめかけた。前日、小沢征爾指揮するボストン交響楽団のコンサートがあり、我々の何人かは最上階の最後列で聴いたのだが、超満員で本当に空席は一つもなかった。我々の時はどうだろうと、素晴しい演奏に感激しながら不安になったが、（出足が遅かったが）最終的には二千八百のホールに八割以上入った客席を見て安心するより怖くなった。

カーネギー・ホールは権威主義のかたまりのようなところがあって、いわゆる貸ホールではないここで演奏するには、審査が必要となる。今回を含めて二度こ

こでコンサートを持った日本音楽集団は、その権威をかさに着るわけではないが、国際的な音楽団体としての自負が許されると思う。ただ、強力な従業員の組合があって、いたずらに融通性のないある意味でやりにくいホールにしてしまっていることも確かだ。何しろこの組合は細かすぎる労働条件を持っていて、楽器をトラックから楽屋口までわずか数メートルを運ぶ係と、楽屋口からしかるべき場所へ運ぶ係とは別になっていて、その間我我が手を出すことは許されない。また、休憩時間は絶対厳守で、リハーサルは六時には必ず終わり一分たりとも超過してはならず七時までの間、一歩たりともステージに足を踏み入れてはならないと、非常に窮屈だ。

カーネギー・ホールのコンサートは大成功だった。申し分ない動員を果せたことはもちろん、最大のヤマにふさわしい見事な演奏は、湧きあがる「ブラボー」の声といつまでも続く拍手とが証明してくれた。さすが音響の良さは文句のつけようがなく、撥絃楽器の多い我々の編成だが、このホールはその余韻をいい加減に消すようないじわるをしない。むしろ日本のホールよりも日本の楽器にいたわりがあるようにさえ思われる。

終了後、近くの日本料理店でパーティがあったが、アジア・ソサエティのディレクターであるゴードン夫人は、ことのほか今夜のことを喜んでくれた。ニューヨークでは宿泊が二つに別れ、何人かが原田さんのお宅の二階にお世話になったが、毎晩帰りの遅い我々にあまり好意を持ってはくれないようだった。しかし、この夜の演奏を聞いて感じが変わったのか、パーティの時には、四階にある自分の住まいに遊びにこいと言ってくれた。

シカゴでは、当団のメンバーでアメリカに住む白根に世話になった。彼女は、ニューヨークとシカゴ、ミネアポリスに参加した。シカゴのノースウエスタン大学の清潔なホールでの演奏は、動員に協力して下さったご主人のおかげもあって、素晴しいものとなった。

それ以上に素晴しかったのは、第二回音楽之友社賞受賞の報をこの地で聞いたことだった。我々は肩を叩きあって喜んだ。コンクールなどと違い、日常の活動に対する賞だったので、その喜びもひとしおだった。

また、ニューヨークのクィーンズ大学、ここシカゴのノースウエスタン大学、ミネアポリスのミネソタ大学で行ったレクチャー・コンサートも大変意味のあるものであった。特に音楽学校であるわけでないこれらの大学で、熱心な聴講生が集まって来るのを見て、何故日本の大学でこのようなことがなされないのか疑問を感じた。日本人が日本の音楽を知ることの当然さなどということではなく、文化の中心としての大学というものを日本ではもっと考える必要があるのではないかということだ。

ミネアポリスの高名な設計家になるホールは、音響の悪さにがっかりさせられた。しかも翌日行われる演劇のために照明を仕込んでしまったという理由で、我我の要求した照明は得られず、最終を飾るコンサートとしてはよい条件とはいえなかった。しかし、またもや悪条件下でも惜しむことなく演奏に燃える我がメンバーを見て私は感激するのである。巨火で長いカデンツァをたたききった堅田にしても、ホテルのシーツを引きさいてたすきにしてしまった尺八の三人も、片肌ぬいでスタンド・プレーした笛の西川も、皆が長かった演奏旅行の最後を飾ろうと燃えた。最後には、思わず笑みがこぼれる程うれしさがこみあげてきた。

翌日の打ち上げは、「ふじ」という日本料理店の招待で、我々はすきやきをたらふく食べ、かつ飲んだ。帰る喜びよりも、もう少し旅を続けたい気持ちがメンバーの殆んどにあったようだ。旅の途中では帰りたいと連発していたがもう少しと言いだしたのは、こんな充実した日々を送れることの幸福を皆が知ったからだろう。二十六人もの団体が約二ケ月も旅を続けることは、人間関係においても危険をはらんでいる筈なのだが、旅行中ただの一度もそうしたことによる事件がおきなかったことは驚異とも言えるだろう。

**三木** トロントはマネージャーがあれだけ宣伝をしてたのに、今回の旅で一番お客が入らなかった。だからマネージャーは大損したと思いますね。

**吉村** にもかかわらず、是非又来て下さいって、今度は必らず成功させますからって言ってましたね。

**坂井** あそこのホールは絨毯が舞台に敷きつめてあったですね。

**野坂** 私のソロの時出してくれたのは戸板かしら。

**三木** そうね。あんなものが良くあったね。音が吸い込まれてどうしようもないから、せめてソロの時だけでも下における板みたいなものを探してくれって言ったら、たまたまあれが出てきた。

**宮田** アメリカは日本人のお客が多くて、〝江戸子守唄〟やると皆涙流していたね。日本人のいるところではどこでもそうだったけど、ブカレストの大使館の奥さんたちとか。

**三橋** トロントなんかワーワー泣いていた。

**吉村** ミネアポリスでも。

**宮田** 日本人にはやっぱりこたえるんだね。

**野坂** そりゃいい節だと思うわ。自分で弾いていてもねえ。

**田村** また演奏がいいしね。(笑)

**野坂** ちょっと別のことだけど、日本でアメリカナイズされているんだなあってニューヨーク行った時思いましたね。本当に日本はこれでいいのか、違うとしたら建物の高さだけで。

**坂井** だけど、アメリカっていうのは

日本通の人が多いわね。日本のこと良く知っている。

**三橋**　尺八の本曲まで全部マスターしているっていうのには驚いた。それで何しろロッレでね、日本語で教えているという。

**宮田**　畳に座ってさ。

▲チェコスロバキア，ブラチスラバのラジオホールで拍手を受ける三木稔（10月13日）

▲カーネギー・ホール公演のポスター
◀カーネギー・ホールの大きなポスターの前にて（10月20日）

**三橋**　それでね、「調下業」をレコーディングするときね、我々譜面を持っていかなかったんで、そのときラリーから譜面を借りたんですよね。（笑）　で、ちょっと意味聞いたりして。（笑）

**三木**　日本文化にのめり込み過ぎて、逆に集団などがカーネギーホールなんかでやるのはナンセンスだって言う人もいるんですよ。ぼくも集団は日本の草の根を分けて地べたに接触してやってゆかなくてはいけないと思うけど、同時に外国のああいうホールの歴史的重みとか、ホール自体の音の特徴とかは、やはり知っていなければならない。そういうことをみんな感じたんじゃないかな。

◀カナダ，トロント大学コンボケーション・ホール，立ち上って拍手する聴衆（10月15日）
▼ナイアガラの滝の滝つぼを見学するアンサンブル・ペンギニア（10月16日）

**三橋**　各地回ったもんだから、カーネギーに入ったときもね、これがカーネギーかっていう印象は正直言って無かったんですよね。で、やっぱり本番で一番感じましたね、我々がよくいいホールだいいホールだと言うけど、それは単に演奏者として音響的なことを言ったりするわけだけど、いいホールというのはいい客、いい質の客を持っているのが本当なんじゃないかとね感じましたね。今回色んなとこで。

**宮田**　やっぱりどこのホールも同じように重みがあるしね、それぞれの特色がある。そういう点ではカーネギーでやるのがナンセンスだとは思わない。又、特別にカーネギーでやったから特別な音がつくとも思わないしね。

**野坂**　私、「華やぎ」弾いたでしょ、それで弾き始めてね、秒がどんどんたってゆく、それにつれて静かだなあ――って思ったの。その静かっていうのが水を打ったように、とにかく静かなんだなあ、三橋さんのいうお客さんの質みたいなものを、改めて感じましたね。

**三木**　自分の曲のあと客席で答礼して、ジーンと来ましたね。なんというか、客全体がウォークていう風に上の方から体を乗り出して来て、それに視線がものすごく暖く感じた。本当の友情みたいなものが降ってくるという……。色々ホールが違って、それぞれの体験が面白かった

けど、まあ、ホールもでかいし、客の数も多かったし、うれしかったですね。

**田村** ニューヨーク・タイムズなどが、ストをやっている。だから、ラジオとテレビとポスターなどでお客さんを集めるんでしょう。ニューヨークっていうのは色んなものをやっているから、たかが日本音楽集団が行っても、ものの数に入れてもらえるかどうかわからなかった、そういう意味で、満員に近いお客さんが集まったということは、非常に感激しましたね。

**三木** 開演前にゴードンさんと客席で会ったら、ひどく浮かぬ顔をしているわけよ。もっと入るはずだと思ってらしたんでしょうね。それからドーッと入って来ちゃって、残念ながら一曲目の「八千代獅子」のときは遅れてくる客でちょっと落着かなかったけど。終演後は人が変わったみたい。

**吉村** 休憩の時にね、わざわざ「すごく良かったですよ」って言いに来てくれたでしょ、すごくうれしかった。

**田村** うん、僕の部屋にも来た。

**三木** 前にアメリカへ行ったときもそうだったんだけど、本当に良くやってくれる。僕たちの気持ちをはかってくれる貴重な人ですねえ。シカゴでは、どこかく白根さんがよくやってくれて。家へ呼んでもらって、皆、発散してよかったね。

**野坂** それで、次のレクチャーの朝、「音楽之友社賞」受賞の報を聞いて。

**三木** そうそう、長沢さんが、霜さんからの電話で知ったって。

**野坂** あれも、すごくいいタイミングだったわねえ。

**三木** それからミネアポリスへ行ったら、これがまた傑作なんだけど、ツィン・シティであるセント・ポール市が、コンサートの日を〝日本音楽集団デー〟にしちゃって。空港に出迎えの助役さんから表彰状もらったんだよね。日系の人たちの苦労が反ってしのばれる想いで……。ホールは大変鳴らないホールだったけど。

**野坂** 有名な日本人が設計した…。(笑)

**三木** 逆にね、よく鳴るホールでは、「巨火」のときなど尺八なんかが打楽器に埋没しちゃって聞こえなかったけど、あそこでは隅々までよく聞こえたからね。でも、プレーヤーとしては鳴らなくて寂しいだろうね。

**宮田** アメリカの最後の方で三回レクチャーがあったけど、ああいうことをやるのは大変なことだけど、面倒でもやった方がいい。でも、やっぱりもう少し意志が通じるようになりたいね。

**三木** アメリカでやると、質問がポーっと連続するんだけど、日本じゃ絶対にそういうことない。で、いつもそうかと思ってラリーに聞いたら、前、歌舞伎のときはそんなに出なかったそうですよ。しかし、好奇心の固まりの国ですね、アメリカは。だからレクチャーがコンサート以上の重みを持っているということですね。

**三橋** ラリーなんか見ると非常に考古学的に研究している、我々の楽器を。

**三木** その部分はいらないっていう所を、根掘り葉掘りやっている。

**野坂** で、それが職業になるわけ。

**三木** そういうこと。今のアメリカの音楽学の発達はすごい。だが、音楽としてのとり方は一様でない。反対に東ドイツなんか、音楽の中味にダイレクトに入り込んでくる姿勢で、すがすがしいですね。アメリカの場合は、伝統や様式はヨーロッパから持ち込まれてきたものだから、外国のものへの対応の仕方が自由であると同時に屈折もするのかな。

さて、今回の旅では終りの頃になると、尾崎君たち団員が、もうあと二回しかコンサートがない、寂しい、寂しいって言っていたですね。六年前などとにかく遮二無二終りたいという感じだったけど。終り頃は帰りたくないって沢山の人が言っていた。僕には、判るような判らないような、いずれにせよ感慨深い旅だったなあ。

カットは、ルーマニアのオラデッアのコンサートの模様。Bussar Ion さんが、楽屋でスケッチしたものです。


音楽家とききてがつくるジャーナリズム

**音楽の世界**

■1月号■《年頭展望》日本人の音楽・辻荘一／新年展望・別宮貞雄／大衆音楽よ個性を・登日嘉瑞《新春訪問》今年のホープ村上弦一郎氏にきく《新春放談》私たちと音楽—言葉・音楽・お国柄—内田るり子・戸口幸策・助川敏弥

■2月号■特集音楽家の経済環境

月刊「音楽の世界」は音楽家・舞踊家と愛好家が自由に発言できる言論のひろばとしてユニークな成長をとげつつあります。

日本音楽舞踊会議

〒171 東京都豊島区目白2－30－5

(電)03－981－6671　振替　東京1－65140

1部450円 〒50円　年間購読料5000円

## 日本音楽集団第五次海外公演の記録

| 月 | 日 | 公演地(及び移動) | ホール | 曲目及び状況 | 放送 |
|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 29 | 成田発 | | 先発10名出発 | |
| | 30 | ベルリン着 | | | |
| | 31 | ベルリン | 共和国宮殿 | ゲネプロ | |
| 9 | 1 | ベルリン | 共和国宮殿 | 〔日本東独経済交流記念式典出演〕八千代 | テレビ |
| | 2 | ベルリン→ブラウエン | | 移動 夜、地元音楽家によるオペラ「フィガロの結婚」に招待される | |
| | 3 | ブラウエン | 市民劇場 | 八千代・萌春・ダンスコンⅠ・文様Ⅱ・春鳳・わ 公演後レセプション | |
| | 4 | ブラウエン | | 市内観光 | |
| | 5 | ブラウエン→ライプチッヒ | 旧市庁舎 FESTSAAL ALTES RATHAUS | 移動 八千代・萌春・ダンスコンⅠ・文様Ⅱ・流琴・わ | |
| | 6 | ライプチッヒ→デッサウ | | 市内観光のあと、ゲバントハウス・オケの指揮者マズア氏宅に招待される 移動 | |
| | 7 | デッサウ | BAUHAUS | 八千代・萌春・ダンスコンⅠ・文様Ⅱ・春鳳・わ | |
| | 8 | デッサウ→ベルリン | | 移動 | |
| | | 成田発→チューリッヒ | | 後発13名出発 | |
| | 9 | ベルリン | | 休養(国立オペラ劇場にて「ドン・ジョバンニ」を観る) 後発チューリッヒ着 | |
| | 10 | ベルリン→アテネ | | 先発移動 | |
| | | チューリッヒ→アテネ | | 後発アテネ着 | |
| | | 成田発 | | 最終3名出発(11名朝アテネ着) | |
| | 11 | アテネ | リカベタス野外劇場 | ゲネプロ 夜大使館レセプション | |
| | 12 | アテネ | リカベタス野外劇場 | 〔アテネ音楽祭〕八千代・鹿・ファンタス・華やぎ・巨火 | |
| | 13 | アテネ | オペラ劇場(雨のため変更となった) | 〔アテネ音楽祭〕調・唐・三味協・萌春・巨火 | |
| | 14 | アテネ→ロンドン | | 移動 | |
| | 15 | ロンドン | クィーン・エリザベス・ホール | 八千代・鹿・ファンタス・華やぎ・巨火 公演後パーティー | ラジオ(BBC) |
| | 16 | ロンドン | | 観光と休養 | |
| | 17 | ロンドン | | ホテル移動 | |
| | 18 | ロンドン→チューリッヒ | | 移動 | |
| | 19 | チューリッヒ→ルツェルン | | 移動 | |
| | 20 | ルツェルン | CASINO LUZERN | 2回の本番が予定されていたが中止となる | |
| | 21 | ルツェルン→インターラーケン | | 移動 観光(チューネル湖ほか) | |
| | 22 | インターラーケン→チューリッヒ | | 観光(ユングフラウ・ヨッホ) | |
| | 23 | チューリッヒ→ライプチッヒ | | 移動 | |
| | 24 | ライプチッヒ | | ゲバントハウスのメンバーの案内で聖トーマス教会など市内観光 | |
| | 25 | ライプチッヒ | 工業高校ホール | 午前中ゲバントハウス本部訪問<br>調・唐・三味協・鹿・巨火 公演後、ゲバントハウスのメンバーと交歓会 | |

■第五次海外公演参加者

作曲・代表――長沢勝俊
作曲・音楽監督・本公演プロデューサー――三木稔
事務局・舞台監督――奈良義寛
楽器係――中島隆
マネージャー――久保敦義(株式会社ジャパン・アーツ)

◇

篠笛・能管――西川忠平
尺八――宮田耕八朗・坂田誠山・三橋貴風
三味線――杉浦弘和・太田幸子
琵琶――半田綾子(薩摩)・田原順子(筑前)
箏・太棹――坂井敏子
箏(二十絃)――野坂恵子(ギリシア・イギリス・カナダ・アメリカに参加)・吉村七重・藤田美智子(東独・ルーマニア・チェコに参加)
箏――砂崎知子
箏・十七絃――花房はるえ・宮越圭子・木村玲子
胡弓――荒地慶司
打楽器――尾崎太一・藤舎波紋・堅田啓輝・高橋明邦
指揮兼打楽器――田村拓男

■演奏曲目

大編成曲

ファンタスマゴリア(太棹=坂井敏子・指揮=田村拓男ほか)
三味線協奏曲(三味線=杉浦弘和)
以上長沢勝俊作曲
巨火(カデンツァ=杉浦弘和・野坂恵子又は打楽器群、音頭取り=田村拓男・高橋明邦)
ダンス・コンセルタント第一番〈四季〉
以上三木稔作曲

| 月 | 月 | 公演地(及び移動) | ホール | 曲目及び状況 | 放送 |
|---|---|---|---|---|---|
| 9 | 26 | ライプチッヒ→カールスマルクスシュタット | | 移動 | |
| | 27 | カールマルクスシュタット | | 休養 | |
| | 28 | カールマルクスシュタット | | ドレスデン観光 | |
| | 29 | カールマルクスシュタット→マルデブルグ | | 移動 | |
| | 30 | マクデブルグ | テレマン・コンサート・ホール | 〔マクデブルグ音楽祭〕八千代・諷踏・三味協・鶴・巨火 | |
| 10 | 1 | マクデブルグ→エルフルト | | 移動 ワイマール観光 | |
| | 2 | エルフルト | 市庁舎 | 〔エルフルト音楽祭〕調・文様Ⅱ・ダンスコンⅠ・垂・ファンタス | |
| | 3 | エルフルト→ベルリン | テレビ局スタジオ | 移動〔テレビ・スタジオ録画〕ファンタス・巨火 | テレビ |
| | 4 | ベルリン | コングレス・ホール | 〔ベルリン音楽祭〕八千代・諷踏・三味協・鶴・巨火 | |
| | 5 | ベルリン | コングレス・ホール | 〔ベルリン音楽祭〕調・萌春・ダンスコンⅠ・流琵・ファンタス | |
| | 6 | ベルリン→ブカレスト | | 移動 | |
| | 7 | ブカレスト | ラジオ・コンサート・ホール | 午前中 大使館レセプション 八千代・流琵・ファンタス・鶴・巨火 | テレビ |
| | 8 | ブカレスト→クルージュ | | 移動 | |
| | 9 | クルージュ | CASA UNIVERSITARILON | 〔クルージュ音楽祭〕調・垂・三味協・萌春・ダンスコンⅠ | |
| | 10 | クルージュ→サツマーレ | | 八千代・諷踏・ファンタス・譚詩集Ⅰ・ダンスコンⅠ | |
| | 11 | サツマーレ→オラデア | CASA DE CULTURA | 八千代・諷踏・ダンスコンⅠ・文様Ⅱ・ファンタス | |
| | 12 | オラデア→ブラチスラバ | | 移動(バルト・オリエント急行) | |
| | 13 | ブラチスラバ | ラジオ・コンサート・ホール | 〔ブラチスラバ音楽祭〕八千代・鶴・三味協・萌春・巨火 | テレビ |
| | 14 | ブラチスラバ→トロント | | 移動 | |
| | 15 | トロント | トロント大学 コンボケーションホール | 八千代・諷踏・ファンタス・華やぎ・巨火 | |
| | 16 | トロント | | ナイヤガラ観光 | |
| | 17 | トロント→ニューヨーク | | 移動 レコード録音(ノンサッチ・レコード) | |
| | 18 | ニューヨーク | | レコード録音(ノンサッチ・レコード) | |
| | 19 | ニューヨーク | クィーンズカレッジ | レクチュアーコンサート | |
| | 20 | ニューヨーク | カーネギーホール | 八千代・鹿・ファンタス・華やぎ・巨火 公演後パーティー | |
| | 21 | ニューヨーク→シカゴ | | 移動 | |
| | 22 | シカゴ | ビック・スタイガー・ホール | 八千代・鹿・ファンタス・萌春・巨火 | |
| | 23 | シカゴ→ミネアポリス | ビック・スタイガー・ホール | レクチュアーコンサート(ノースウェスタン大学) | |
| | | | チルドレンス・シアター | 八千代・萌春・ファンタス・華やぎ・巨火 | |
| | 24 | ミネアポリス | ミネソタ大学 | レクチュアーコンサート<br>夜 日本料理屋「ふじ」の好意で打ち上げパーティー | |
| | 25 | ミネアポリス | | ミネアポリス出発 | |
| | 26 | →成田 | | 帰国 | |

新八千代鶴子　藤永検校作曲・日本音楽集団編曲

独奏及び小編成曲

萌春(尺八＝宮田耕八朗又は坂田誠山・箏＝砂崎知子又は白根きぬ子)

諷踏(笛＝西川徳平　ほか)

以上長沢勝俊作曲

華やぎ(二十絃箏＝野坂恵子)

流琵(琵琶＝半田綾子)

箏譚詩集　第一集より(箏＝砂崎知子)

以上三木稔作曲

調(打楽器＝尾崎太一・堅田啓輝ほか)

藤舎成慈作曲

鹿の遠音(尺八＝坂田誠山　ほか)

鶴の巣籠り(尺八＝宮田耕八朗)

星の的(琵琶弾き語り＝半田綾子)

尚、先発(東独)でのプログラムは次の通りであった。

一、新八千代鶴子

二、前春(尺八＝三橋貴風・箏＝吉村七重)

三、ダンス・コンセルタント第一番(四季)より

四、文様Ⅱ／三木稔作曲(箏＝花房はるえ・吉村七重・十七絃＝宮越圭子)

五、春風／畦地慶司作曲(胡弓＝畦地慶司・琵琶＝半田綾子)　又は、流琵(琵琶＝半田綾子)

(この二曲からそのつどどちらかを選ぶようにした。結果的にブラウエン、ゲッサウにおいて「春風」を、ライプチッヒにおいて「流琵」を演奏した)。

六、わ／三木稔作曲

また、ドイツ民主共和国宮殿(ベルリン)における日本東独経済交流記念式典では、「新八千代鶴子」を演奏した。

# 団員の声

## 日本音楽集団第五次海外公演参加

### 長沢勝俊

今回の最終演奏地ミネアポリスでの公演の後、カーネギーホールの正面玄関にかかげられた大きなポスターの裏側に、全員がそれぞれ旅の思いをこめた寄書をしました。それに私はこう書きました。「はげしくもえ、はげしくにつまる、集団このすばらしきもの」と。これは決して自画自賛ではなく集団のプラス面もマイナス面をも含めて生きた演奏団体の一員としての私の卒直な感想です。

各人の自由意志によって構成されている集団だが、その一人一人の強い意志と自覚と用意周到な準備の上に、この旅に出たからこそ一たび舞台にあがれば一つの共同体として、はげしくもえ、すばらしい成果をあげることが出来たのだと思います。

世界の名だたるホールでの公演、そこで私達が日本の伝統楽器で出来る限りの音を鳴らしえたこと。いいかえれば、各劇場でなし得た私達の行為とこれに対する聴衆の熱狂的な反応に対し、現代に生きる音楽人としての生の感動を演奏者とともにわかち得たことに私は限りない喜びを感じます。

この貴重な経験は一朝一夕にして得られたものでなく、集団の長い活動のつみ重ねの上にきずかれたものであり、個人はもとより集団にとってもかけがえのない財産となって残ることと信じます。

最後に四年の長きにわたり困難なプロデュースの仕事を一身に引受け、この度の成果をもたらした音楽監督の三木稔に心からの敬意を表します。

### 宮田耕八朗

演奏家としてなによりもうれしいのは、聴衆の熱い拍手を受けたことです。対日感情があまり良くないと聞いていたロンドンでも、思いのほかの拍手でしたし、東側の国々の人たちが、古典とか現代とか、その他もろもろの既成概念を持たずに、誠に素直に音楽として聞き、私たちを盛大な拍手で包んでくれたことは大変うれしいことでした。

広大でのどかな田園や、のびのびと草を喰む動物の群を見て自然の大切なことを想い、又、私たちと接したいろいろな人々からは、東京では今急速に失われつつある人情というものを暖かく感じることができました。

ロンドンやニューヨークのコンクリートの高い建物がたてこんで、古くなったありさまは決して気持のよいものではありません。東京もこのまますすめば、やはり昼なお暗い巨大なスラムとなり、人心はすさみ、世界に名だたる犯罪都市になってしまうのでしょうか。

### 野坂恵子

アテネ、ロンドンと好評のうちに演奏会を済ませ、ホッと一息つく為に、皆でスイスに来た時のことです。

その静かな美しさに浸って考えたことがあります。

こういう騒音のない所で、時間をたっぷり使って納得のいく音作りをしてみたい、そうしたら、本当に味わいのある音楽が生まれるに違いないという思いなのです。私たちはあまりにも忙しすぎるし、練習一つを取り上げても、もっとじっくり時間をかけたい。日本の現状がどうであれ、その場限りの音では、この雄大な自然に吹き飛ばされて了う。

思えば日本こそ、このスイスに負けない素晴しい自然があり、永い間それを友として、先人たちは生きてきたのでした。

今回の成果で、私たちの方向は間違いではないという自信を誰もが得たと思いますが、今後私たちに必要なことは、「自分たちの楽器で自分たちの音楽を創る誇りと喜こび」を再確認し、各自が責任を持ってこの道を歩むことではないでしょうか？

この世界一周旅行は、「集団」の第一楽章のフィナーレを飾るに相応しいものだったと思います。第二楽章は、今回得た人々との強い連帯を基本に、日本の風土にどっしりと根を下ろした深みのある音楽を目指す時だと思うのです。

### 田村拓男

今回の旅行は、結成以来十五年目を迎えようとしている音楽集団にとって、一つの総決算的な意味合いを持っていた。

作曲家と演奏家が、一つの団体の中で長年、苦楽を共にし、今回のように世界のさまざまな聴衆の反応を直接肌で感じ、良くも悪くもその成果を共有して、過去をふり返り、今後への指針とする機会を持ち得たことは大変有意義なことだった。

今回のプログラムは、長年の経験より得た周到なものであり、「新八千代獅子」から「巨火」に至るまで、ソロや二重奏を含めた多彩な曲目は、変化に富み、迫力に富んだものだった。殊に集団が編曲して、見事に我々の前に甦った新生古典「新八千代獅子」はプログラム冒頭の着到の役目もし、お囃子群の多彩な演奏や、一瞬の間を置いて一糸乱れず飛び込む箏

群（この曲は指揮なし）の颯爽とした演奏振りは聴衆を唖然とさせ、「巨火」に内在するドラマや祭りは打楽器奏者のタスキがけを伴う終曲部分で否応なく盛上る……。

今後もこのように、客を絶対に飽きさせないプログラミングは不可欠なことだと思う。

ロンドンのクイーン・エリザベス・ホールでは、すでに二曲のアンコールが演奏し終り、ライトを消しても鳴りやまぬ拍手に、またライトをつけて登場したこと。ベルリンのホールやカーネギーホールのように音響のよいホールでは相乗効果で一層感動的なものにつながることも体験できた。

また今回の旅行では、チームワークが一まわり大きくなり、皆が示した協調性は今後の集団にとっておおいにプラスになると思う。そして旅行中における積極的な意見の交換は、チームを惰性から遠ざけ、考える団体、変化に順応できる生きた創造集団にしていたと思う。

坂井敏子

アテネ、ロンドン、スイスと廻って、東独のライプチッヒに入りました。雨もよいの夕方、ネオンも殆んどなく、大きくどっしりした石の建物が、一層重苦しく感じられました。然し、予定されていなかった此の地の公演は、ゲバントハウス管弦楽団の後援のもとに、二週間で見事に準備され、熱烈な聴衆に迎えられ、皆胸の熱くなる思いで演奏致しました。ドイツでは、公演を成功させるために、楽器運搬から、各地への移動に至るまで、総ての事が、最善の配慮で組織され、本当に有り難く、心暖まる旅をつづける事が出来ました。

ゲバントハウスの団員の案内での市内見学では、バッハが二十七年間合唱指揮をしていたという、聖トーマス寺院へ参りました。折から日曜日でバッハのミサ曲を演奏しておりました。又移動の途中、ワイマール地方ではゲーテやシラーの家を見学いたしましたが、各地で歴史の重みをずっしり感じられ、それが今もなお、人々の生活の中に息づいている偉大さ。各地で見かけた戦争のキズ跡の復興が未だなされつつある国で。

バッハと時を同じうした、日本のルネッサンスの先がけを高らかに歌った八橋検校の「六段」や「みだれ」が、又その後の伝統音楽が、なぜ民衆全体のものにならなかったのか？　「歴史の重み」、それは「人間の命の重み」です。外国の力によっていち早く復興し、繁栄に酔いしれて、それを見失なってしまった日本と、非常に対照的な国でした。集団も長い年月を経て、やっと少しずつその方向に歩きはじめました。数年前の海外公演と比べて、今回本当に心からの拍手を受けたのもそこにあると思います。今後、はっきりとそのことを見きわめて進んで行きたいと願っております。そこに、伝統音楽を発展させ、新しい命を生み出す力が有ると思います。

半田綾子

二ケ月という、私の経験した中で一番長期の、そして生涯の思い出となるであろうヨーロッパ、アメリカ演奏旅行は、無事に終了致しました。私は、先乗り組から参加し、東ドイツでの十日間は、十人の若手ばかりのグループでしたが、各地での暖かい拍手と、もてなしには、本当に心熱くなる思いでした。九月十日にアテネで他のメンバーと合流し、楽しさも一段と増して、大世帯での旅行の一歩が始まりました。長い旅でしたので、思い出は数知れないけれど、私の脳裏に焼きついて離れない強烈な印象は、ロンドンでの公演でした。イギリスというと、何となく気位が高く保守的で、めったなものは受け入れないというような先入観を持っていたのですが、「巨火」が終ると、あの割れるような拍手と「ブラボー、ブラボー」の声が上がり、アンコールが終って客席が明るくなってもまだ鳴りやまない拍手に目の前がボーッとかすんで、拍手の音の中に体がすい込まれていってしまいそうな気が致しました。演奏外でのもう一つの感激は、スイスの大自然でした。私たちは、山麓のインターラーケンで登山電車に乗りこむだけで、眼前にそびえていた雄峰、メンヒやユングフラウの肩ぐちユングフラウヨッホに行くことが出来るのです。又、ゴミ一つ落ちていない牧草地や、美しく澄んだ湖、カモメの群や白鳥、とにかく恵まれた自然を、十二分に生かしたスイスの観光施設には、全く感心させられました。

藤吉成美

不安と期待をもって出発した、ヨーロッパ、アメリカ演奏旅行を終え、自分にとって、大変得るところが多かった旅行であったが、特に印象深かったのは、最初の公演地アテネ、カーネギーホール、そして、スイス、インターラーケンの風物等である。中でも、カーネギーホール公演日は、ちょうど昨年亡くなった父の一周忌当日に当り、肉親であると同時に、師匠でもあった、自分にとっては強烈な存在であった父への懐古と、世界のカーネギーホールでの演奏という想いとで、ホールの素晴しさはもちろんのこと、その上に、諸々考えることの多い、感慨深い一日であった。

約二ケ月間、日常の仕事、生活のサイクルから切り離され、海外での団体行動の中で、客観的に物事を考え直す時間を持てたことは、自分にとっては大きなプラスであり、「演奏」を構成する〝一分子〟としての、自分の充実を目ざしたい等と、考えておりました。日本に居ては、表面的にはわからなかった団員それぞれの人間性も知られ、団員間の親しみも深

められ、東欧での、耐乏生活(?)での協力ぶり――坂田氏の自発的日本食、炊事当番――など、なつかしく想い出します。

――堅田啓輝

海外での演奏会で一番大変なのは客の動員です。宣伝にしろ何にしろ、海外でのことですから、こちらの思ったようにいかないことがままあります。今回もイギリスのような絵からのポスターに出くわして、客に対するこちらのイメージをかなり心配したこともあります。しかし、いざ幕を開けてみると、イギリスに限らずどこの都市においても客の動員は大変なものでした。又、来て下さった皆さんがあんなにも感動を、そしてある種の驚きをもって我々の演奏を聞いてくれたことに対して、心より〝ありがとうございました〟と口の中でつぶやいていました。演奏が終ってからのあの拍手、あのふんいきはこれから先も忘れられないでしょう。

プログラミングですが、打楽器のソロの部分が出て来る曲が多すぎたようです。打楽器が入っていても全体に伴奏に徹している曲があった方が、〝ここぞ打楽器ソロ!〟というところでひきたったのではないでしょうか。同じ曲を毎回やると慣れという恐ろしい物がおそってくるので、それを防ぐように演奏者全員、大変努力していたようでした。

今回は初めて演奏会をした所が多く、珍しいということも手伝って来てくれたのかもしれません。が、来て下さった人たちは大変感動して帰ったわけで、この次はこの人たちはもちろん、もっともっと多くの人たちに我々の演奏をきいてもらいたいのです。そのためには我々もどんどん海外に出て世界中の人々に日本音楽のすばらしさを分けてあげたいと思います。

――高橋明邦

今回で、私、四回目の海外公演参加となりましたが、この度の世界一周公演は、やはりこの四回というキャリア、或いはそれを含めた、この十四年間の音楽集団の伝統の力が十分に発揮できた良い演奏旅行であったと思います。やはり、前回(六年前)のヨーロッパ公演では、私自身の若さもあり、又初めての海外ということで、そのめずらしさや、私のように洋楽出身の者にとっては、やはり本場の舞台はあまりにも高すぎました。が今回演奏して回って、単に東洋の珍しい音、という表面的だけでなく、私達の作品、演奏が、この長い歴史をもつヨーロッパ音楽の愛好家達の心を、少しでも本当にゆり動かすことができたのではないか、と思います。

特に私にとって印象深いのは、私が〝音頭取り〟と〝打楽器〟を兼ねて「巨火」を演奏したライブチッヒのことです。この都市は、ヨーロッパ音楽の父〝バッハ〟のねむる聖トーマス教会のあることで有名な、東ドイツ第二の都会ですが、この音楽的にも由緒ある町の人々から、絶讃をあびたことは、私達の作品が、演奏が、日本の楽器で生れた作品の、日本人による演奏が、このバッハを愛する人々にも、同じ喜びとして伝わったのだな――と感じました。これは、私にとって今までにない大きな喜びでした。そして、又、これは、今後の私の演奏活動に大きな影響を与えたことはいうまでもありません。この確信を土台とし、私自身、ますます一タイコたたきとして、がんばりたいと思います。

――砂崎知子

今回は七ケ国を訪れ、総日数五十八日にも及ぶ長期公演で、どの土地も感激することが多くありましたが、やはり最初の土地であるアテネの印象は特にあざやかでした。リカベトスの山で夕方の五時だというのに、太陽にギラギラと照りつけられながら最初のリハーサルを初めた時には、とうとう来てしまった、そしていよいよ始まるのだなという闘志が胸の内にたぎって来るのが分りました。昼間は気が乗りきらない感じもしましたが、しかし、いざ夜の本番になると真暗な中、スリ鉢状の会場の舞台のみ照明によって浮き上り、しかも最初の「新八千代獅子」の鼓を〝カーン〟と打つ、その瞬間にパッとライトが輝きを増すという凝った演出も、見事に成功したようです。客席から〝オーッ〟という声にならないどよめきのようなものが感じられました。この大旅行の目玉ともいうべき大曲「巨火」が終ると、割れるような拍手、そこで二曲のアンコール。全て終ってもなかなか拍手は止みません。着替えて舞台にもどると、楽器に群がっていて、名前を聞いたり太鼓などを打ってみたりして、色々質問されました。こういう状態はアテネだけでなく、どこのホールでも見られた風景です。一番感じたのは、聞いて感動すると非常に素直に態度に表わす、というか、心から音楽を楽しんでいる、というようすが分ったことです。又、ルーマニアの少女合唱団の子供たちが、会が済んでずい分夜も遅いのになかなか帰らず、私たちのバスの窓の下で日本語で歌ってくれた時も心暖まる思いをしました。

この旅行をふり返ってみて、慣れない土地で困ったこともありましたが、音楽には言葉の障害も文化の違いも思想の違いもないのだということ、又、音楽を通じて心と心を通じ合えるということのすばらしさを体験できたのは、私にとって最高の幸せだったと思っております。

――三橋貴風

今回の公演旅行では、初参加のメンバーも若干いましたが、旅慣れたせいか、全般的には純度の高い演奏ができたようです。また客の反応は国によって色々な

のですが（国どころか都市によって全く民族が異る場合もありました。日本は一民族、一言語、一国家で幸せだと思います）、音楽的な意味からすると、先発の人たち十名で行ったライブチャヒのコンサートが印象的でした。会場は四百人程のキャバの旧市庁舎でしたが、超満員の客の音楽を理解しようとするその姿勢と、カーテンコールの暖かく熱狂的な拍手は、自分が今まで経験した内でも最高のものでした。翌日、世界最古の歴史を持つゲバントハウス・オーケストラの指揮者クルト・マズア氏邸に招かれたことは、一生忘れ得ない思い出でしょう。それから後は何といっても今回の二つの山場、ロンドンのタイーン・エリザベス・ホールとニューヨークのカーネギー・ホールです。終演後ライトが消えても立ち去ろうとしなかったロンドンっ子たちの拍手。そしてカーネギーでは最後の曲「巨火」で精一杯演奏をした後、客席の最上段から〝ウォーク！〟の拍手が起こった時、正直のところ一瞬目頭が熱くなりました。

二ヶ月もの長い演奏旅行ともなれば、内外共に多少のトラブルは付き物ですが、たとえそれが過酷な旅であっても、演奏を聴いてくれた人々が、それによって心が和んでくれたならば、それこそ我々演奏者冥利に尽きるというものでしょう。

——田原順子

外国で演奏するということに、何の心がまえもなく出発してしまった演奏旅行でした。

ところが、帰国後、たしかに何かが違ってきているのです。

風土、国民性のちがういろいろな国々での演奏、そこで受けた拍手、日本では考えられないようなホールでの演奏も思い出深いものでした。それらの経験はまったく無意識のうちに私の中に積み重なっていったようです。

今まで心のすみにわだかまっていた、現代における邦楽というものへの疑問、古典琵琶というものへの疑問、現代音楽に対しての疑問など（感覚的なものでしかなかったかもしれないのですが）、それらは何となく私をスッキリさせないものでした。それが、どこかへ消えてしまっているのです。もちろん通ってきた世界はほんの少しだけではありますが、その中で日本というものを見なおすことができたのかもしれないと、うれしく思っています。もっともっと日本を大切にしたい。日本の音楽を大切にしたい。古いものも新しいものも区別なく……。

個人的には演奏技術の未熟さに、涙、涙の連続で、あの盛大な拍手をうけているのがつらく、はずかしい事もたくさんありました。でも今からのち、スッキリした気持で、自分なりにやってゆけそうな気がしています。大切な音楽です。だいじにしなくては！

——花房はるえ

海外演奏旅行は、私にとって初めての経験で、行く前は不安がいっぱいでしたが、この二ヶ月は中味の濃い、有意義な旅行でした。

整然とした太鼓の音に乗って、出演者が登場し、新八千代獅子の演奏が始まりました。どの聴衆も、ハッとした様子で音の出た楽器を順を追って見ていました。もの珍らしさもあるかもしれませんが、緊張の面持ちで聴いていたようです。しかし、二曲目、三曲目からは、日本の楽器という事よりも、音楽として受け入れてくれました。日本の音楽が、私達の演奏した音楽が、世界中の多くの人々に聴いてもらえ、感動してもらえたことは、最高の幸せでした。立ち上っての拍手、足を踏み鳴らしての声援……。本当に、心からの惜しみない、暖かい拍手を受け感激しました。特に、ロンドンの演奏会では「巨火」の終わった後、ライトが消えてもずっと拍手が鳴りやまず、涙が出てくるのをグッとこらえた程でした。

アテネのリカベトス野外劇場、ロンドンのタイーン・エリザベス・ホール、ニューヨークのカーネギーホール等、威厳ある、音響の良い素晴しい会場で演奏できたことは一生忘れられない思い出です。

——畦地慶司

海外公演でのコンサートは、国内では得られないインターナショナルな広がり

■第五次海外公演募金者ご芳名

第五次海外公演は国際交流基金のご援助の他、多くの皆さまに募金をいただいたおかげで成功に終ることができました。

募金の総額は二百八十万四千円、次にご協力下さった皆さま方のご芳名を掲載させていただき、お礼にかえさせていただきます。

日本演奏家協会
茂香　白洞他
市川憲次
（有）琴光流和楽器店
国井久吉
飯吉トク子
笠原理一郎
ぐるーぷ・だだ
田村始
長江昭子
奈良英雄
野坂操寿
野坂豊久
平田多真美
民芸総務部
光安広行
山本美恵子
砂崎業末
高末昌枝
武岡美和
名古屋音楽大学
早水英敏
星組有志
増田睦実
山本一義
吉村克己
池上早苗
猪井重幸
小川楽器店
たあく有志
黒田孝雄
坂田香折
坂田元三郎
佐々木喜美夫
中村美津子
濁沼英子
旅野恵美
花房艶子
藤田寿太郎

を私たちにもたらしたと思います。私たちの音楽活動の意義のある所は、自分たちの伝統楽器をもって演奏し、古典の演奏の領域に留まらずに今も生きる音楽の創造演奏活動を続けているということだと思います。それは、ずい分な私たちの強味で個性的なものであったようです。そして、伝統楽器によるアンサンブルは、東洋に対する興味やエキゾチシズムを越えて彼らの心に強く残ったと思います。音楽のスタイルや楽器の奏法、音色などの違いの他に感受性のイモーショナルな部分へ触れるものがあって、各地で大きな拍手を受けたのは忘れることができませんでした。又、私は多分胡弓の奏者としては初めて海外で演奏をした者と思いますが、ゲバントハウスのメンバーと胡弓の魅力や奏法について話したり、東独での数回の琵琶と胡弓の為の「春鳳」(畦地作曲)や、各国での「新八千代獅子」「巨火」の中での胡弓の演奏など、大きな評価を得、聴衆の心に残ったようです。それは、演奏会終了後の熱心な聴衆の感激の言葉や、大学で行ったレクチャー・コンサートでの積極的な質問や交歓を通して感じ、とてもうれしく思いました。

今回、打楽器の活躍が目立ち、触発された点もありましたが、アンサンブルの中での擦絃楽器の妙味も今後おもしろさを増幅させ、私や多くの人たちによって展開される可能性を予見することのできた旅だったと思います。

**太田幸子**

初めての海外演奏旅行で、一番感じた事といえば、外人の音楽に対する反応が非常にはっきりしていて、かつ自然であった事です。良い音楽を聞いた時、彼らはその喜びを拍手だけでなく、その表情、体の動き全部で表わしていました。それがとても自然な感じがして、温かい人間味を感じたのは、私だけでしょうか？お義理が全くないあの熱い拍手を受けると、私のようにセカンドで弾いている者でも、何か無性にうれしくなって、演奏家になって良かったなって、思う事がしばしばでした。

もう一つ――集団の音楽が、世界に通用する音楽であること。演奏会が終わると、近い将来もう一度来てほしいという声をたびたび聞きました。あれは、集団の音楽が、単に楽器に対する珍らしさや、興味のみでなく、何か彼らが直感的に受け入れられるものをアピールしていたからだと思うのです。一概には言えませんが、日本の純古典を持っていったなら、それは興味をそそるだけで終わってしまうのではないかと思うのです。今回のプログラムの中でいうなら、「調」などは非常に効果的だったのではないでしょうか。古典の手法を用いながら、その緊張部分だけを凝縮させたという感があり、外人だからというのではなく、〝現代〟にアピールする力は大きいと私は思います。とにかく、色々な意味で非常に勉強になる旅行でした。

**木村玲子**

研究団員の身で、未熟ではありながら、今回の海外公演に参加することができ、そして大きな舞台を経験できたこと、大変うれしく思いました。毎回、舞台では緊張の連続で少しの余裕もなかったために、物事を客観的にとらえることができなかったように思います。が、何ヵ国かを廻り、その国々での、聴衆の反応のし方は様々でしたが、一体となって私達の音楽を喜んでくれた時、本当に演奏してよかったという気持でいっぱいでした。そのように聴衆が沸いているのをみる時やはり、日本の楽器で、日本の音楽を演奏していることに、今まで感じたことのない、誇りと喜びを感じるのでした。しかし又、世界のひのき舞台といわれるカーネギーの舞台では、自分の小さ、未熟さを感じたと同時に、世界の大きさというものを感じずにはいられませんでした。そういう意味では、とても有意義な演奏旅行であり、又、今後の意欲を大いにかきたたせるものであったと思います。集団の音楽が世界の人々に少しでも理解してもらえたという喜び、そして自分達の音楽（伝統あるものも含めて）を大切にしたいという思い、その気持を大事にしていくためにも、私自身、もっともっと勉強していかなければ、と思っております。

---

古川羽衣山　丸園商店　渡辺つゑ　山田萬美
田井謙二　野坂静子
秋浜友子　畦地速見　阿曽久美　家永和治　井阪紘　大瀧楽器　奥山加代子　大西咲子　梶井徹　金沢佑光
カメラータ・トウキョウ
郷晃　小室圭子　鈴江襄治　砂崎澄江　砂崎勝重　高山図南雄　武田撮男　田中金吾　田中恒雄　田村通
丹野井成寿　南雲ヨシ　西山泰義
平野みどり　藤川秀雄　藤沢恵　星光和　本間謙伍　本間謙太郎　松下よし子　松原剛　松山義朗　毛利洋毅　縫毅
森口克彦　山口雪子　山田蕭山　山田美喜子　山本佳代　山本武夫　弓田栄一　吉村長子
秋山ことみ　大形岩夫　奥村泰子　木村美智子　西山たま代　磨家敦子　熊木操華
樹の会
伊藤朗子　川崎都賀子　北川登美子

## 久保敬義

二ヶ月という長い演奏旅行。楽しくもあり、また大変でもありました。そして今では、その大変さも楽しい思い出になりつつあります。毎朝、皆さんと顔を合わせる生活を二ヶ月過ごして成田に到着した時は、翌日のスケジュールを説明する必要がないという事がなんとなくピンとこない状態でした。今年の春に、この演奏旅行にマネージャーとして同行することが決まった時は、正直なところ〝大変だなァ〟という気持でした（そして、帰国するまで〝大変だなァ〟と思い続けることになるのですが）。長期間で、国の数が多い為に、起り得る全ての状態を想定しながら準備をしたのですが、やはり予想できない事態に直面することが度度ありました。例年九月には二日しか雨が降らないアテネで、不幸にも三回目の雨にぶつかったり（この日は野外劇場での公演が予定されていました。楽器の移動にあたっての集団の皆さんの奮闘ぶりは実に大変なものでした）、ルーマニアからチェコへの列車移動の際には、なかなか車両がわからずワーッと乗ったのは良いのですが、自分達の車両の所までスーツケースを運ぶのに苦労したり。そのかわり予想外の素晴しい出来事にも会いました。東ドイツでは先発グループ全員が著名な指揮者のマズア氏の自宅に招かれたり、ゲバントハウス管弦楽団の二〇〇周年記念フェスティバル（一九八一年秋）に、三木先生が作品を委嘱されたり――これは本当に大きな出来事です。

東側では食事に関して意外な程苦労します。レストランの数が絶対的に少ないのと、システムが非能率な為に、演奏会の日の食事の確保には本当に神経を使うことになりました。一人で先に食堂に行き、「ビール二〇本、ワイン三本」と注文し、それをかかえて皆さんの到着を待っていたのも今では楽しい思い出です。旅行中はいろいろ制限された条件の中で生活するわけですので、大変チーム・ワークが大切になってきます。その点では音楽集団の皆さんの努力には、大変教えられる事の多かった旅行でもありました。お世辞でなく、「良く統制のとれた」そして「共通の意志を持った」すぐれた集団という印象を強くうけました。その事が二ヶ月という長い旅行を無事に終える事ができた最大の力であったと言って間違いないでしょう。その点では私自身にとっても、励まされ、教えられる事の多い旅行となりました。

演奏旅行を準備するというのは、目に見えない所での苦労が多いものなのですが、音楽集団のすばらしい演奏と、聴衆の暖かい拍手の中で「やって良かった」と感じ続けた旅行でした。

帰国して、海外とのたくさんの手紙を整理しながら、「もうこのファイルは不必要なんだな」と思うと、うれしくもあり、また少しばかりさびしくもあります。近い将来、またやってみたいですね。

## 中島　隆

私は、この演奏旅行に参加することが商売（箏屋）のプラスになるかマイナスになるか、まず頭に浮びました。それと国内における日本音楽集団の運動の魅力もさることながら、長期的にみて商売のプラスに結びつけることができると判断し、もう一つは私自身の精神的に弱い部分の鍛練になると思い、国内における自分の準備もそこそこに出発しました。

アテネでの二回のコンサートからロンドンへと日を追うごとに今まで漠然としていた集団の魅力がどこにあるのか意識的に感じるようになってきました。単に海外公演のためにチームを急増して演奏している所は数多くあるでしょう。日本の音楽にも他にも良い物があるでしょうが、作曲家、事務局を土台に、ほんとうの日本の音楽を紹介しよう、自分たちが創造したものを紹介しようという点、ここが、他のチームのまねの及ばないところかもしれません。

三木先生の舞台のそでの涙（ロンドンでの演奏中）、長沢先生の地味な気の使い方、杉浦先生の弟子の愛し方、野坂先生の舞台人としての本性――等に接することができたのはすばらしい感激でした。

ブカレストのホールでのリハーサル中一番感じたことは、すばらしいホール、鳴りそうなホールにもかかわらず、箏だ

---

北島　邦子
久保　幸子
小林　温代
坂井　真理
神保佐香枝
高須　和子
塚田　幸子
堀江　文子
牧島　純子
森田　信
吉田　弥生

貴風会
井原　哲男
今泉　裕陽
今出川美登
大橋　幸雄
川岸　忠秋
木下　研作
小島　正美
近藤　美矩
坂爪　茂
高橋　盛男
内藤　茂昭
長瀬　克彦
長藤　昭正
中山　美則
生田目正義
松藤　和夫
吉田　政次
千葉　忠男

箏志会
阿部小夜子
飯田　知子
五十嵐松代
石上さち子
稲葉　雅子
岩内　貞子
江口　美栄
神山　浩己
加藤富士子
川合まゆみ
桐生　文代
熊沢栄利子
佐伯　明彦
佐藤　良子
白井　俊子
杉井　宥子
杉井社中
瀬端　淑子
生田目麻規子
東泉　トヨ
深津　厚子
古部　治子
星野　幸子
松崎　伴子
宮崎　陽子
向井奈津子
山下　節子
大和　宏子

調弘会

以上敬称略

けがきこえてきませんでした。こうなると箏は完全にコンサート用、アンサンブル用として、何にもまして鳴る箏でなければならない、音質が良いだの、木目が良いだの、あるいは父、糸締がうまいへたにかかわらず、大きな音で鳴る箏でなければならない、それにはきっと、製作上、思い切って自分の判断が必要だ、従来の形式にこだわって作る必要はない……などとも思いました。

# 立奏台

●昨年の七月、名古屋の労音主催で『日本音楽集団による室内楽演奏会』が行われ、その時観客にアンケートをお願いしました。いただいた数は二十ほどでしたが、その中から誌面の都合上抜粋して掲載させていただきます。

一、萌春／長沢勝俊作曲

○実に魅力的な演奏でよかった。（男・38歳　高校教師）

○演奏者の若さがこの曲にぴったりとしていた。（男・36歳　公務員）

○前半、尺八の音が突き貫けてしまいすぎたように思う。箏の音が少しとんだような気がする。（男・22歳）

二、春三題／長沢勝俊作曲

○三絃の新しい面が発見できて、おもしろかったです。（女・20歳）

○情景描写でないというためか、ピンとこない曲だった。曲の心を感じとれないこちらの未熟さか。（男・22歳）

三、わ／三木稔作曲

○祭太鼓のような、又、モダン・ジャズのような血湧き肉躍る曲で楽しかった。最後にズッコケルような「ワッ」も面白い。もっと支えのある『ワッ！』を予想していた。（男・38歳　高校教師）

○真面目な演奏、最後の〝わ〟というところ、実に集団らしいですね。（女）

○六人が音をあわせることを非常に楽しんで弾いていることが、よく感じられ、曲自体よりもその雰囲気がとてもよかったです。（女・22歳　教員）

○阿波踊りに似たリズム、庶民の讃歌、かなりシッコクせまる……三木節の面目躍如。（男・36歳　公務員）

○最後のしめくくりがおもしろかった。リズムが変わっていておもしろい。（女・20歳　会社員）

○意味はわからないまでも、次の音がどんなに変わるか、思わず引き込まれてしまった。（男・22歳）

四、夕影の詩／三木稔作曲

○情感豊かな佳曲。（男・38歳　高校教師）

○演奏の中に人間性がもっとあふれればと思うのです。（女）

○言いわけがましく叙情的というか、描写音楽的というか、この曲を作った意味を少しテレながら語る三木さん。しかし、それは〝トンネルをぬけるとそこは雪国〟みたいなもの、ファきるところからはじまる気がする。（男・36歳　公務員）

○きれいな曲でした。（男・22歳　学生）

○夕影の情感を感じとれなかった。（男・22歳）

五、遡河／小田切清光作詞・長沢勝俊作曲

○語りがよかった。一番人間らしかったのではないでしょうか。（女）

○琵琶の弾き語りは初めて聴きました。心にしみ入る感じでした。（女・20歳）

○いつ聴いても琵琶はぞくっとするほど好きなのだ。しかし、声は少しもの足りない感じ。（男・22歳）

○詩は未整理、声は鶴史さんと比べてはならぬが……。しかし、現代の語りものをつくる意欲は買いたい。更に進んだ展開を。（男・36歳　公務員）

六、ダンス・コンセルタント第二番〈鳴門秘帖〉／三木稔作曲

○たいへんこの集団らしい曲で素晴らしかったです。集団の方の伴奏で歌えたなんて感激です。（女・22歳　教員）

○お千絵のテーマが聴けただけでも感激です。（女・20歳　会社員）

全体を通して

○曲がよく消化してあると思えました。しかし心をうつものが足りない。演奏の中

今回の旅行では色々な体験を得ることができました。当社製作の箏が使用されたことはこの上ない喜びではありますが、まだまだ開発の余地は十分あり、重大な責任を感じ、帰国後さらに追求するつもりであります。この旅行に参加できたことを今、喜びと感じられるのは、自分の人生の中でいつまでもわすれられないことだと思います。

にその人の人生があり、その人自身があるのでしょうが……。でも邦楽界では、充分楽しめたのです。

（女）

○舞台の人でイスも丸く並べてあって、アットホームな感じでよかったです。

（女・20歳　会社員）

○舞台設置に、皆好感を持った様でした。楽しい雰囲気で気楽にくつろいで聴けて、終った後、皆よろこんでいました。時間にゆとりがあって出演者と話ができたらと思いましたが……。六曲の中では「わ」が一番印象に残っています。今後もこのような演奏会を期待します。

（男・22歳　学生）

## ●日本音楽集団第八回夏期合奏研究会に参加して

京都・佐野都志江

簡単に感想を言えば楽しかった！　複雑には……、とても口では言えない。直かに身体で感じたことはそのままだ手足の先で、ビリビリとふるえている。

まず楽しかったというのは、組織的なこと（運営法やプログラムなど）は勿論のことだが、邦楽器で日本の音楽を合奏できたこと。腕は未熟でも一しょに力を合わせて弾いているのだという喜び（当方には喜びでも指揮者にとっては苦しみだったかも……）、誰が上手でもなく、目立つでもなく、それぞれの分野で力を出し一つの曲を作ってゆく喜びを知ったこと。

でも一瞬頭をかすめたことは、この喜び楽しみは決して特別のことではなく、当り前のことではないかということだった。今まで自分が過ごしてきた邦楽の世界では、楽しいなんて思ったのは遠い昔の何も知らない頃のことでしかなかった。少し分かりかけて来ると師匠の通りに弾くことが最高のこととされ、その枠から出ることは罪悪で、全く自由を感じなくなり、必死で相手方と拍子を合わすことだけだった。これでは楽しい筈がない。又、後輩を指導する時も一字一句違いないように伝達することに専念しなくてはならず、息苦しい思いばかりだった。そういう世界から足を洗いたいと思いながらそれもできず、大げさに言えば、悶々とした日々を送っていた私がこの研究会に出席でき、何かホッとするものを感じ、すくわれたような気がした。〝音楽〟とは〝音を楽〟しむであり、決して〝音が苦〟ではないはず。もっともその〝楽〟に行くまでには、相当の苦があるのはこれ又当然のこと、その苦が大であればあるほど、楽もそれに比例して、あるいは倍加していくと思う。私にとっては表面的な苦ばかりで、本当の意味での苦はまだ味わっていないのだろ……ナ。早く本当の苦楽を味わわなくては……と少々あせり気味。

来年のハワイが楽しみです。一応出席の予定ですのでよろしくお願いいたします。

南の楽園ハワイに日本の響きを

## 日本音楽集団夏期合奏研究会――ハワイの部

### 一九七九年七月二十二日～二十七日

昭和四十六年より、夏の軽井沢で行っている、伝説の日本音楽集団夏期合奏研究会を、今年は、ハワイでも開催する事になりました。（軽井沢でも開催します。）

この企画は、以前からの念願で良い機会があればと思っておりました。ちょうど今年は、六月と七月に開催されるハワイ大学インターアーブ・フェスティバルに、日本からは日本音楽集団が唯一の団体として招待され、七月九日より二十二日の十四日間参加することになりました。この間、四回のコンサートのほかレクチュアー等が行なわれますが、この機会に、現地よりのサポートもあって、合奏研究会をフェスティバルに引続く七月二十三日から二十九日（帰国は三十日）の七日間、開催する事になりました。

この時期は、航空運賃がオフシーズンからオンシーズンの扱いに変った直後なので、少し割高になっておりますが、それだけに、観光地ハワイを訪れるには、素晴しい時期なのです。参加費用は、最終的な結論は、まだ出ておりませんが、大体二〇万から二五万円の間に落ちつくものと思います。

今回の合奏研究会は、常夏の島オアフで、ハワイ大学の充分な設備のもとに、経験豊かな上級者のみならず、初心者から、中級、上級の全ての方々に、満足して頂けるよう、今迄になく楽しく、魅力あふれた、幅広い企画を考えております。講習会だけでなく、コンサートやパーティ、ハイキング、ワイキキの浜辺でのスイミング、ホノルル市内観光、希望者にはオプショナルツアー等々……。又現地の人達多数の参加も見込まれており、邦楽器を通して日米の文化交流も計りたいと思っております。

常夏のハワイに、日本の響きを！

奮って参加、お待ちしております。

（担当・坂田誠山）

**日本音楽集団第九回夏期合奏研究会――軽井沢の部**

○期間　八月十六日（木）～十九日（日）○会場　北軽井沢ミュージックホール　○募集楽器　笛・尺八・三味線・琵琶・胡弓・箏・十七絃・打楽器・作曲（編曲）・見学。

※以上詳細は集団事務局へ。

**第五次海外公演より帰国後に行われた日本音楽集団の主な公演**

一九七八年

十一月五日（日）　東京音楽大学芸術祭出演　東京音楽大学

十一月十二日（月）　栃木県芸術祭出演（宇都宮）　栃木会館

十二月三日（日）　うたごえ三十周年記念式典に出演　浅草国際劇場

十二月十三日（水）　「音楽之友社賞」受賞式（パーティにて新八千代獅子を演奏）

十二月二十二日（金）　京都公演（第四回関西定期）　京都会館第二ホール

一九七九年

一月一日（月）～三日（水）　FM東京「音楽の森」―十五周年を迎えた日本音楽集団

一月七日（日）　FM東京「デンオン・ライヴ・コンサート」出演

一月十一日（木）　松戸子供劇場出演　松戸市民会館

一月十三日（土）　KCAファミリーコンサートN「野坂恵子＋三木稔」　兵庫県民小劇場

**一月二十二日（月）、二十三日（火）　第・49・第・50　総合定期演奏会（創立十五周年・定期コンサート五十回記念）　都市センターホール**

**日本音楽集団及び団員に関する今後の予定**（現在決まっている八月までのもの、太字は集団主催。学校公演などは省略します）

**関東・甲信公演**（文化庁助成）

高崎　一月二十九日（月）　群馬音楽センター

上田　一月三十日（火）　上田市民会館

長野　一月三十一日（水）　長野市民会館

松本　二月一日（木）　松本市民会館

諏訪　二月二日（金）　諏訪市文化センター

甲府　二月三日（土）　山梨県民会館大ホール

横浜　二月七日（水）　神奈川県立県民ホール（小）

藤沢　二月九日（金）　藤沢市民会館小ホール

水戸　二月十七日（土）　水戸市民会館

**三月二日（金）　第・51　定期演奏会――日本の四季・西洋の四季（楽しい邦楽演奏会）　朝日生命ホール**

三月十日（土）　野坂恵子二十絃エコール松本の会　松本才能教育会館

四月十二日（木）　四つの個による〈楽〉コンサート第・1（三橋・吉村・宮越他出演）　東京・芝ABC会館ホール

四月十三日（金）　四つの個による〈楽〉コンサート第・2　大阪・テイジンホール

五月　第二回日本音楽集団フェスティバル

**☆五月八日（水）　第・52　春の総合定期演奏会　都市センターホール**

曲目　一、心――邦楽器のための／高橋雅光作曲

二、まゆだまのうた／長沢勝俊作曲

三、第四回日本音楽集団作曲公募一位入賞作品

四、四群のための形象／三木稔作曲

五、邦楽器のためのシャコンヌ／安達元彦作曲

五月二十三日（水）　琵琶現代音楽演奏会（半田他出演）　芝ABC会館ホール

**☆六月八日（金）　第・53　定期演奏会――邦楽器と綴る四つの物語**

作・演出　秋浜悟史　語り　伊藤惣一　青山タワーホール

曲目　一、しゃみ猫博士の冒険／杉浦弘和作曲・構成　語り・伊藤惣一

二、黄金花咲く／日本音楽集団管楽器奏者構成

三、まぼろしの米／三木稔作曲

四、ゴロゴロ閣下の冒険／日本音楽集団打楽器奏者構成

六月十八日（月）　二十絃箏水無月の会（野坂・吉村・池上・滝田ほか出演）　芝ABC会館ホール

**☆七月六日（金）　第・54　定期演奏会――演奏家による作曲へのアプローチ・その二　田村拓男構成　青山タワーホール**

七月九日（月）～二十二日（日）　ハワイ大学第一回インターアーツ・フェスティバルに参加

**七月二十三日（月）～二十九日（日）　日本音楽集団夏期合奏研究会・ハワイの部**

**八月十六日（木）～十九日（日）　第九回日本音楽集団夏期合奏研究会・軽井沢の部　北軽井沢ミュージック・ホール**

☆☆印の定期コンサート・シリーズを割安の料金でお聴きになれる「友の会A会員」募集中です。詳しくは本誌30・31ページをご覧下さい。

☆ハワイ、軽井沢での合奏研究会について、詳しくは本誌59ページをご覧下さい。

代表　長沢勝俊
理事　長沢勝俊
　　三木稔

理事　田村拓男
　　杉浦弘和
　　宮田耕八朗

監事　芹沢英雄

事務局　奈良義寛
　　本図光子
　　霜島素子

委員会議長　坂田誠山

音楽監督　三木稔
首席独奏者　野坂恵子（箏）
　　宮田耕八朗（尺八）
　　杉浦弘和（三味線）

田村拓男（指揮・打楽器）
望月太八（能管・篠笛）
坂田誠山（尺八）＊
三橋貴風（尺八）＊
福田輝久（尺八）
田嶋直士（尺八）＊
藤崎重康（尺八・笛）
畦地慶司（胡弓・笙・作曲）
山田美喜子（筑前琵琶）名誉団員
半田綾子（薩摩琵琶）

田原順子（筑前琵琶）
坂井敏子（箏・三味線・胡弓）
白根きぬ子（箏）
宮本幸子（箏）休団中
砂崎知子（箏・三味線・胡弓）＊
吉村七重（箏）＊
池上早苗（箏）
花房はるえ（箏・三味線）
小室圭子（箏・作曲）
飯吉圭子（箏・三味線）
尾崎太一（打楽器）
藤舎成敏（打楽器）
堅田啓輝（打楽器）＊
高橋明邦（打楽器）
黒坂昇（打楽器）

稲田康（指揮）
研究団員
太田幸子（三味線）
霜島素子（箏）
奈良義寛（文芸）
中島隆（楽器）＊
鶴野和子（文芸）
研究団員
内田とも子（作曲）
松岡美江（文芸）
＊印は本年度委員
昭和五十四年一月現在

〈文芸部〉
伊藤憲一（演技）

〈マネージメント協力（国内及び海外）〉
株式会社ジャパン・アーツ

〈賛助会員〉
（有）琴光堂和楽器店（松本・諏訪・東京）
滝沢修　高瀬卓朗
野坂操寿　霜島邦子
鶴田錦史　半田多真美
三木卓雄　古川羽衣山
渡辺精一　丹野井成寿

〈団友〉
青木誠　藤舎呂悦
秋浜悟史　仲俣申喜男
荒谷俊治　中村八大
小田切清光　西川浩平
川崎祥悦　野口鎮
菊地悌子　野口美恵子
福知子　佐藤敏直
鞍掛昭二　芝祐靖
戸井昌造　清水義矩
　　芹沢英雄
高野文子　元橋康男
田中利光　矢崎明子
広瀬量平　柳家小三治
鯉沼広行　ディヴィッド・ロープ
鳳声晴由　ディヴィッド・ヒューズ
星旭　ヘンリー・バーネット
増田睦実　ラニィ・シェルダン

〈支部〉
関西支部　田嶋直士 [redacted]
大阪支部　川向勝祥 [redacted]
東海支部　横井園生 [redacted]
水戸支部　斉藤幸山 [redacted]
長野支部　佐藤幸宇山 [redacted]

山梨支部 [redacted]
[redacted]
長崎支部 牧山雅楽郁 [redacted]
熊本支部 古川羽衣山 [redacted]
秋田支部 菅森真雄 [redacted]
[redacted]

日本オペラ協会
株式会社ノサカ
菱電商事株式会社

朝吹 英一　武江 利博
赤木 明　田村 鎖男
井坂 紘　根志 彰
稲木 一　旅野 恵美
遠藤 将一　福田 洋一
岡 功三　星 光和
金子 博美　松井 翠
家根原光子　松原 剛
国持 光生　鱒 毬
河野 義博　柳川 創造
近藤 栄一　鞆本美保子
高橋 克己

〈維持会友〉
AOIミュージック株式会社
西武建設株式会社
西武鉄道株式会社
株式会社西武百貨店
株式会社西友ストア
株式会社豊島園

☆日本音楽集団は東京音楽大学民族音楽研究所の協力団体で、同大学の好意によりC―四〇三教室を練習場として使用しております。練習場の電話は、九八三―八〇九六（直通）です。

☆日本音楽集団は横文字の名として今まで ENSEMBLE NIPPONIA を使っておりましたが、集団自体の活動がそのイメージより大幅に広がったこともあり、又、文法上からの不自然さを各方面よりご指摘されていることもあり、現在は海外でも、Nihon Ongaku Shudan をそのまま使用するとともに、愛称として Nipponia を付記しております。

**編集後記**

今年度、我が日本音楽集団は最大規模の五度目の海外公演、創立十五周年、定期公演の五十回目、そして音楽之友社賞受賞と記念すべきおめでたいことが重なりました。偶然に重なったともいえますが、十五年の実績が稔り当然のこととも思えます。

■

それにつれて私たちの身辺も賑やかになり、集団もこれまでになく多くの方面から注目を浴びていることを意識せざるをえません。

■

「今まで日本は伝統的文化の輸出に頼りすぎてきた。このような文化はいわば、パーツ（部品）である。今の日本を支えている総体としての文明を伝えるよう努力すべきだ」（朝日新聞、一月一日、梅棹忠夫『私の提言――文明の全体像を伝える努力を』より抽出・要約）

この〝総体としての文明〟を伝えるのは、国際交流に限らず私たちの仕事の基本精神として、本誌を通じても各方面へ発言してゆきたいものです。

■

秋に海外公演があったため、六号は「秋――初春号」となりました。次の七号は五月、春号として発行されます。（雷島）


**邦楽現代第六号**

定価三〇〇円
一九七九年一月二十日発行
発行責任者　三木　稔
編集　霜鳥素子
日本音楽集団
東京都渋谷区神宮前6―16―14
小早川ビル2F
電話〇三―四〇九―五三七四（代）
Nihon Ongaku Shudan (Nipponia)
Kobayakawa Bldg., 6-16-14 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo.
印刷　株式会社アジア企画群
印字　けやき印刷
表紙デザイン　及部克人
レイアウト協力　黒沢恭子



**「邦楽現代」取扱店**

東京と東京近郊――三越本店・高島屋日本橋店、玉川店、横浜店・東武百貨店・浅草松屋・川崎コミヤ（以上、武田屋楽器店扱い）・琴光堂・邦楽堂　諏訪・松本――琴光堂　金沢――関屋楽器　福井――伊与楽器　奈良――中村楽器　京都――金善楽器

直接購読ご希望の方は日本音楽集団へお申し込み下さい。尚、現在三、四号は品切れ、一、二号は定価二〇〇円、五号は三〇〇円。送料は二冊まで一二〇円、四冊まで一六〇円。継続購読ご希望の方は友の会B会員（詳しくは本誌31ページ参照）になられるとお得です。

## 日本音楽集団のレコード（現在発売中のもののみ）

○現代物及び古典物

| レコード・タイトル | 収録曲名（作曲者） | レコード会社／番号 | 定価(円) |
|---|---|---|---|
| 響／和楽器による現代日本の音楽 | 組曲「人形風土記」(長沢勝俊)・しがらみ第2（八村義夫）他・ | RVC／JRZ2505～8 | 8,000 |
| 人形風土記／子供のための組曲 | 組曲「人形風土記」・子供のための組曲（長沢勝俊） | RVC／JRZ2523 | 2,200 |
| 野坂恵子古典箏曲集（第一集～第五集） | 一集―千鳥の曲・八段・砧 他 二集―八重衣・五段砧 他 三集―六段の調・春の曲・梓 四集―越後獅子・みだれ他 五集―青柳・屋嶋・秋風の曲(前弾) | COL／CLS5168, 5169 5199, 5211, 5245 | 各2,000 |
| 邦楽器のためのシャコンヌ | シャコンヌ（安達元彦）・鶴の単音・春の曲・春の宴 | オーディオユニオン／Au5 | 3,000 |
| 三木稔作品集Ⅰ～Ⅲ | Ⅰ―古代舞曲によるパラフレーズ・凸 Ⅱ―ソネット・箏曲詩集・四群のための断章 Ⅲ―序の曲・独ひのうた・天如・孤響 | COL／GZ7003～5 | 2,000 |
| 隠者／長沢勝俊作品集 | 二つの舞曲・箏四重奏曲・詩曲・雨春 | RVC／JRZ2558 | 2,200 |
| まゆだまのうた／長沢勝俊作品集 | 一絃協奏曲・笛と打楽器のための音楽・二つの田園詩・まゆだまのうた | RVC／JRZ2571 | 2,200 |
| めばえ／三木稔選集vol.1 | ダンス・コンセルタント・芽生え・舞手・夕影の詩・竜田の曲 | カメラータ／CMT1001 | 2,500 |
| NHKドラマ「雑門稼帖」物語 | テーマ音楽・千絵の曲・山下画・おつなラプソディ・月夜の祝宴 他 作曲：三木稔 語り：古今亭志ん朝 | 東芝／TP72293 | 2,300 |
| 雅（みやび）／PCM録音による | 華やぎ（三木稔）・六段の調・みだれ・新八千代獅子 | COL／WX7510 | 2,500 |

○解説物及び入門物

| | | | |
|---|---|---|---|
| 日本の楽器 | 日本の各楽器の代表的古典曲・他に現代曲の一部収録 | RVC／JRZ2520～1 | 4,000 |
| 日本の楽器入門 | 箏のなかま・尺八のなかま・三味線のなかま・太鼓のなかま | COL／ELS3342～3 | 3,000 |
| 箏の演奏法（初級編） | | VIC／SJL2115 | 2,000 |
| 尺八の演奏法 | 尺八演奏法の基本練習他（沢田耕八郎編曲） | VIC／SJL62 | 2,200 |
| 箏と尺八（初級篇） | 楽しい練習曲1（長沢勝俊編曲） | VIC／SJL177 | 2,200 |
| 箏と尺八（中級篇） | 楽しい練習曲2（長沢勝俊編曲） | VIC／SJL178 | 2,200 |

○編曲物

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 青時草／和洋合奏による日本のメロディ | VIC／SJL99 | 2,200 | 「琴」ヴィヴァルディ・四季 | 東芝／TA60060 | 2,000 |
| | | | 「琴」セバスチャン・バッハ | 東芝／TA72037 | 2,300 |
| 尺八／山の詩・海の詩・里の詩 | COL／FZ7015～7 | 各2,000 | 「琴」モーツァルト | 東芝／TA72042 | 2,200 |
| 尺八・虚無僧の世界 | CBS／WX7506 | 2,300 | 1．スターン日本の調べ | CBS／25AS42 | 2,500 |

その他にカセットテープもあります。


いま、世界の熱い視線をあびて
創造に生きる希有な才能で
よみがえる私たちの古典!!

■PCM録音による

# 雅（みやび）
## ～華麗なる箏～

華やぎ／乱輪舌
六段／新八千代獅子
●二十弦箏・箏／野坂恵子
●演奏・日本音楽集団
▼WX・7510 ¥2,500

## 野坂恵子古典箏曲集

■第一集 ▼CLS5168
千鳥の曲／八段／砧／四季の眺

■第二集 ▼CLS・5169
八重衣／五段砧／四季の曲

■第三集 ▼CLS・5199
六段の調／春の曲／梓

■第五集 ▼CLS・5245（各¥2,000）
青柳／屋嶋／秋風の曲（前弾）

コロムビアレコード

演奏会、温習会のレパートリーに
邦楽器による現代音楽の美を追求する
すぐれた作品を網羅する

# 現代邦楽フイブラリー

❶三木　稔　〔四群のための形象〕文様、居機、曲、撚――五〇〇円
❷三木　稔　〔箏　譚詩集〕――三〇〇円
❸諸井　誠　〔対話五題〕二本の尺八のために――三〇〇円
❹助川敏弥　邦楽器のための〔形象〕三〇〇円
❺間宮芳生　〔四面の箏のための音楽〕／〔三面の箏のための音楽〕――六五〇円
❻小山清茂　和楽器のための〔四重奏曲第二番〕／和楽器のための〔三重奏曲〕五〇〇円
❼長沢勝俊　尺八・箏による〔萌春〕四〇〇円
❽長沢勝俊　〔箏四重奏曲〕――六〇〇円
❾清瀬保二　〔尺八三重奏曲〕――五〇〇円
❿湯山　昭　〔三面の箏によるカプリース〕――六五〇円
⓫三木　稔　尺八独奏のための〔孤響〕／三本の尺八のための〔ソネット〕――五〇〇円
⓬間宮芳生　〔尺八のためのプレリュード第一番〕／〔第二番〕――五〇〇円
⓭山本邦山　〔山本邦山尺八作品集〕――一〇〇〇円
⓮佐藤敏直　〔ディヴェルティメント〕――五〇〇円
⓯石桁真礼生　〔箏のための組曲〕五〇〇円
⓰三木　稔　二十絃箏のための三つの作品〔天如〕／〔佐保の曲〕／〔竜田の曲〕――八〇〇円
⓱広瀬量平　〔アキ〕二本の尺八のための／〔鶴林〕独奏尺八のための――七〇〇円
⓲清瀬保二　〔尺八と箏五重奏曲〕／〔日本楽器のための四重奏曲〕――八〇〇円
⓳篠原　真　箏のための〔たゆたい〕五〇〇円

楽しい練習曲集
**箏と尺八**
長沢勝俊――作曲・編曲――七〇〇円

五線譜による
**箏曲新教本**
古屋富蔵――著――一二〇〇円

⓴石桁真礼生　箏・鼓・笛による〔無伎の咏〕――八〇〇円
㉑長沢勝俊　〔詩曲〕独奏尺八のための／〔まゆだまのうた〕尺八・箏のための五〇〇円
㉒三木　稔　尺八・箏・三絃のための〔夕影の詩〕／二面の箏のための〔箏　双重〕／尺八と十七絃のための〔雅びのうた〕――七〇〇円
㉓小山清茂　〔赤土になる妹〕／〔樹下の二人〕――七〇〇円
㉔松村禎三　〔詩曲一番〕箏と尺八のための／〔詩曲二番〕尺八独奏のための六〇〇円

五線譜による
**尺八教則本**
山本邦山――著――一三〇〇円

五線譜による
**尺八民謡曲集**
山本邦山――編――八五〇円

ZEN-ON
㈱ 全音楽譜出版社
東京都新宿区東五軒町25　〒162
電話(03)269－0121代　振替・東京195092